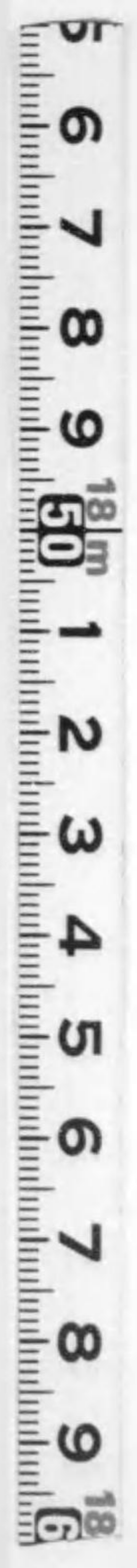


327
405₁



始



26. 7. 2

25904
不

~~326-190~~
327-4051



氣合術獨習法

講道館長 嘉納治五郎先生題
代議士 松本君平先生序
古屋鐵石著 述

東京 精神研究會

大正
5. 4. 24
内交



力勇技謀
未以足決

勝敗矣

甲南



序文

松本代議士序文

宇宙萬有に遍在し、古今東西を貫通して謬らざるものは眞理也、眞理の實相は一義なりと雖も其發動の現相は無量無邊にして、言説の好く施設する處に非ず、眞理は宇宙萬有の精神にして、大時^{ダイジ}と大靈^{ダイレイ}の上に超越す、眞理を逮得するは、即ち眞理たる事にして、無礙の眞理を思念するものは無上堂の神に到達するもの也、茲に最大の權威あり、茲に最上の靜安あり、茲に最高の道義あり。

眞理に到達するの道は、無量劫なり、其意義は廣大深甚にして、獨り哲學者の題目たるに非ず、衆生は皆な其縁に因て眞理の門に入る事を得べし、一藝一能あるものは其縁を索めて、眞理

の妙堂に達すべきもの也、能術技藝の眞祕に悟入すれば聖堂の鑽鑰を握ることを得べし、人一度び此の妙境に到着するを得ば、茲に神秘莫測の權能を得べし、人生の消長得失、成敗利鈍の如きは、一切の根本義を這裡に求むべし。努力修養、勤力精進の故を以て、此の眞諦を得るものあり、妙感靈動(インスピレーション)の作用の故を以て、此の眞諦を得るものあり、均しく之れ聖哲に入るの道也、奔心散意、放縱逸樂を以て、此の妙道に上らんとするが如きは、猶ほ木に縁て魚を求むるが如し。

也、這の眞理は宇宙萬有を一貫せる眞理也、之を人生人事に應用して、素より秋毫も錯度するものに非ざる也、故に這の眞諦妙機を知了する事、愈よ深遠なれば、其權能を得る事益々高大也、小は以て一身一家を顯名光著ならしむ可く、大は以て國を樹つべく、以て民を濟ふ可く、以て世を救ふに足る可し。モーセ、基督、ゾアロスター、釋迦の徒は、之を以て救世の大業を成就したるもの也、歴山王、核撒、黃帝、文武の徒は、之を以て建國の鴻圖を完成したるもの也、ペリクルス、シセロ、蘇秦、張儀の徒は、之を以て一代の民衆王侯を指導したるもの也、眞諦妙機の發露する處、窮極なしと雖も、機根は即ち一義也。友人古屋鐵石君、勤學修養の士也、深くヒプノナズムの學術の精粹を修め、其の蘊奧を究む、古今聖哲の書を讀んで、這般妙諦

の機微を覺得す、近時一書を著して題して、氣合術獨習法と云ふ、序文を余に徵せらる、就て之を讀むに滔々數萬言、精神主義を以て立論の基礎となし、ヒプノイズムの心理を以て萬象を解釋せんとす、篤學精進、余の大に敬服する處也、余も亦た這般の眞理を攻究する事、茲に多年、蓋し鐵石君素と余と同好同氣の士、之を以て天下の青年を教化する處あらんとする君の志や偉也、若し夫れ有爲の士、此書を精讀して、修養工夫を凝し、心會默記する處あらば、庶幾くは眞諦握機の妙境に入るを得ん乎、一世の智勇を推倒し、萬古の心胸を開拓する、又奚んぞ難しとせんや。

明治四十三年中秋

君平世民

自序

余は時々自宅に於て同志の士と氣合術の稽古をするを爰に數年、思ふに氣合術は精神力の働を見事に現はす法にして、之れに由て實に不思議の現象を呈す、例へば鐵棒を飴細工の棒の如くに曲げ、暴行者を不動金縛となし、人間を木葉の如く飛ばし、燃火は冷たく感じ、熱鐵を皮膚に觸れ、口中に火を點じて何等の害なく、身體を無感覺とし腕に針を刺すも痛みなく、歩行者の足を止める如き、奇現象は即座に現はすことを得、尙々氣合術は武術の奧義、護身用として、短銃に優る、金儲の秘訣、心身の健康法、膽力の養成法、精神療法の眞髓、催眠術の極意、柔術の極意、相撲の極意であることの事實と理論とを述べ、且此術を素人が獨習し得らる

る様手引せんことを旨として記述せり。
看官若し此書によりて、氣合術の何者なるかを知り、之を應用して精神力の働をして大ならしむることを得る一助となるを得ば、著者の光榮は之に過ぎずと云爾。

明治四十三年終月初旬

古屋鐵石識

氣合術獨習法

目次

第一章	緒言	一
第二章	精神と氣合術との關係	四
第一節	氣合術は精神力によりて行はる	四
第二節	精神研究に對する科學と哲學との範圍	六
第三章	科學上より見たる精神	八
(一)	精神の起原	九
(二)	精神の能力	一二

第四節

哲學上より見たる精神……………二

(一) 精神は原子にして火質なりとする説……………一四

(二) 精神は本體界の一部分なりとする説……………一五

(三) 精神は身體の圓極なりとする説……………一六

(四) 精神は物と力との聯合なりとする説……………一七

(五) 精神は最上能力を有すとする説……………一八

(六) 精神は靈魂なりとする説……………二〇

第五節

精神觀の將來……………二三

第三章

氣合術を行ふ極意

……………二五

(一) 丹田の修養……………二五

(二) 無念無想の修養……………三〇

(三) 氣合術修得の苦行……………三五

第四章

武術の奧義としての氣合術

……………四九

(一) 武術上に行はれし氣合術の淵源……………四九

(二) 豊臣秀吉の行へる氣合術……………五一

(三) 伊藤一刀齋の行へる氣合術……………五二

(四) 富田勢源の行へる氣合術……………五二

(五) 兵馬が行ひし氣合術……………五五

(六) 無念流の行ひし氣合術……………五六

第五章

- (七) 小野治郎左衛門と柳生宗矩との氣合術の試合……………五八
 - (八) 武藝と氣合術との區別……………六〇
 - (九) 柔術と柔道との區別……………六〇
 - (十) 體術と柔術との區別……………六一
 - (十一) 居合術と氣合術との區別……………六一
 - (十二) 氣合術と合氣術との區別……………六一
- 文明的護身用としての氣合術……………六二
- (一) 氣合術は護身用として短銃に優る……………六二
 - (二) 氣合術は身に寸鐵を帯びずして活殺自在の働をなす……………六四
 - (三) 天下無敵の法としての氣合術……………六五

第六章

金儲の秘訣としての氣合術……………六八

- (一) 戦はずして勝ち勞せずして利ある法……………六八
- (二) 眞劍の勝負は氣力の強弱による……………六九
- (三) 心力の強き程大なる成功をなす……………七三
- (四) 圓轉滑脱の妙境……………七五

第七章

心身健康法としての氣合術……………七七

- (一) 禪と氣合術との關係……………七七
- (二) 氣合術を應用せし精神修養法……………八二

第八章

膽力養成法としての氣合術……………八四

- (一) 膽力と肉體との關係……………八四
- (二) 膽力養成法の秘訣……………八六
- (三) 柳生宗矩が澤庵和尚に學びし練膽法……………八七

第九章

精神療法の真髓としての氣合術……………九二

(一) 精神療法の根據と氣合術……………九二

(二) 精神病を治したる氣合術……………九三

第十章

催眠術の極意としての氣合術……………九四

(一) 催眠暗示現象と氣合術との關係……………九四

(二) 催眠術の真髓としての氣合術……………一〇三

第十一章

柔術の極意としての氣合術……………一〇五

(一) 柔術の根底……………一〇六

(二) 柔術の無形的極意と有形的極意……………一〇七

第十二章

相撲の極意としての氣合術……………一〇八

(一) 相撲術の巧拙と勝敗との關係……………一〇九

第十三章

氣合術應用の實例……………一一七

(一) 畫道の奧義としての氣合術……………一一七

(二) 習字の祕訣としての氣合術……………一二〇

(三) 壽命延長法としての氣合術……………一二三

(四) 歩行停止法としての氣合術……………一二六

(五) 疼痛無感法としての氣合術……………一二六

(六) 口中點火法としての氣合術……………一二七

(七) 熱觸鐵皮法としての氣合術……………一二七

(八) 燃火冷感法としての氣合術……………一二七

第十四章

結 論……………一三〇

(九) 力量増加法としての氣合術……………一二八

(十) 不動金縛法としての氣合術……………一二八

(十一) 鐵棒屈曲法としての氣合術……………一二八

氣合術獨習法目次終

氣合術獨習法

古 屋 鐵 石 著

第一章 緒言



言

緒

勝海舟曰く全體何事によらず氣合といふことが大切だ、この呼吸さへ呑み込みて居ればたとへ死生の間に出入しても決して迷ふことはない」と先生が云ふ所の氣合とは何ぞや、而してこれを得る方法は如何。

相撲に「テ、ン、立、ち」と云ふことあり、土俵の上に將に勝負を決せんとするに當り、相手が勢ひ込んで立ち上らんとするハナを態と待つたを入れる如き風を装ふて其の氣勢を避け、相手が拍子抜けして氣を弛める瞬間に附け入つて術を施して難なく相手を倒すなり、まことに些細な呼吸なれど此のべてん立ちに掛つては餘程段違ひの者も力を入れる間もなく突き出され、押出されて見苦しき敗を取ることあり。

りといふ、たゞ一瞬の呼吸なれど、實を避け虚を衝くことに依りて己を利し他を敗り得ること斯様に妙なり、此の一瞬間の呼吸を氣合といふ、此の氣合を巧に應用すれば一種の術となりて如何なることに對しても其の效果は實に大なるものなり、されば昔時の武士はこれを以て劍道武藝に缺くべからざるものとなせり、此の術の精妙は驚くべきものにして、たゞ一呼吸、一喝によりて戦はずしてよく敵を仆し得るといふ程なれば如何なる名人も之れに敵する能はず、武道の精妙を極めんとする者は競ふてこれを得んとしたり、而かも此の術は唯だ殺伐なる武術の上のみ効果あるものに非ずして應用の他方面にして其の效果の大なることは實に驚くべきものあり、一例を云へば彼の有名なる畫家圓山應舉は氣合術を以て畫道の妙を發揮せり、勝伯は氣合術を以て維新の大功を立てたり、水戸の名主徳川光圀は斯術を以て病者を治せり、松島瑞巖寺の雲悟禪師はこれに依つて下郎より身を起して日本唯一の高僧となれりと傳ふ、昔時に於てさへ已に應用の途斯く廣くして效能の偉大なること夫れ斯の如し、而かも是れ只二三の例のみ、更に仔細に云へば此の術は人間の世渡りに缺く可らざる處世の妙法たり、最も簡易明快なる成功の

秘訣ともいふことを得べく、或は此の術を得たる者は體力を増進し、また如何なる危難に遭遇するも巧にこれを避くることを得るが故にこれを心得たるものに危難なく、齒痛も止むべし、吃逆いせきさへも止むることを得べし、實にこれ奇妙不思議の仙術とも魔法ともいふべく、斯く云へば餘りに奇怪なる妄誕なることを云ふが如くなれど事實は決して妄誕奇怪なるものにあらず、また名ばかりありて其實到底行はれざるものにもあらず、既に一種の術たる以上は鍛練研磨せずしては得られぬことは勿論なれども、今其の理論を研究して其の理の基く所を調べて見れば、或る程度までは、何人にも行ふことが出来るものにして、又殊更に氣合といはざるも其の實、吾人が日常の行爲業務の上に知らず、識らず此の術を應用して居ることあり、されば今其の理論を研究して之れを得んとする方法を講ずるは別段困難なることにも非ざるなり。

余は今こゝに之れを分析解明して之れを得る原理と方法とを講じ、また此の術を社會人事に應用して如何なる效能の存するかを述べんとす、これ畢竟現今の浮薄柔弱なる人心を鼓舞して沈重強固なる活氣を與ふる精神の修養法となるべきこ

とを思ひ、又他の一面には益々面倒に暮し難くなれる世の中に一種の簡短なる處
 世法となる根本精神を與へんと思へばなり。

第二章 精神と氣合術との關係

第一節 氣合術は精神力によりて行はる

此世に於ける人の行爲の結果として存在する者は、一として精神の發現ならざる
 なし、然るに世人中誤解して彼が云々の品物を造りたるは彼の手なり、彼は妙手を
 有せりと稱す、又彼は云々の歌をよく唱ふるは彼の口なり、彼は妙口を有せりと贊
 す、然れども彼が手或は口を動かすものは抑も何者ぞ、彼の精神によりてなり、彼が
 手を動かし口を動かすときは眞に精神力を單めて以てなしたる結果なり、手と口
 とは器械にして其器械を使ふものは精神なり、故に人の行爲の結果として存在す
 る森羅萬象は一として精神の發現ならざるものなし、と余が言ひし所以なり。

試に見よ彼の馬琴の傑作が讀む者をして我を忘れて或は喜び、或は悲しませ、或は
 笑はしむるが如きは、實際其文を作るとき馬琴が眞に喜びて記したる處は後世の

人其れを讀むとき眞に喜ばしくなるなり、又其文を作るとき眞に悲んで筆を執り
 たる處は、後世の人其れを讀んで眞に悲しくなるなり、換言すれば作者の精神通り
 に後世の人が感ずるなり、又彼の左甚五郎の彫刻せる木像が動きたりと云ふ如き
 も、甚五郎が精神を單めて作りたる故木像に精神が籠つて全く生き居る如く見え
 たるなるべし、凡そ何物を問はず後世に迄遺る處の傑作は、其れを作る人の天性に
 よると雖も歸する處は其人の精神が籠りてなりし故なり、之れは獨り物を造る時
 のみならず、人の一舉手一投足と雖も苟も人をして感ぜしむる者には皆此の精神
 籠れり、踊の如き芝居の如き角力の如き劍術の如き又然り、此の理に於て氣合術を
 行ふに精神力の必要な理は了解せられしならん、實に氣合術の如きは精神力の
 發現の著しきものにして、形式なる術者の態度言語は精神力を現はす一の手段に
 過ぎず、故に如何に形式のみ立派に具はるも精神力に乏しければ氣合術とならず
 して何等の感應もなく滑稽に終るべし。

之れによりて氣合術を研究せんとせば、先づ精神の何者なるかを深く考察するを
 要す、併しながら精神の何者なるかに就ては大議論の存する所にして、一小冊子の

能くする處にあらざると雖も、其大要を以下に論ぜん。

六

第二節 精神研究に對する科學と哲學

との範圍

今此の書物を讀むる、諸君は、此の書物は精神に關することを記せるものなることを知り、或は此の記事は面白し、此の記述は面白からずと感じ、或は此の書物を必らず讀み盡さん、否、此のページにて休息せんなどと欲せらる、ならん、斯様に知り、感じ、或は欲望する精神の働きは如何にして起るものなるか、又た吾人の精神は斯様に眼前の物事に就いて思考し、感動し、欲望するのみならず、遠き過去の事を追懐し、又た遙か未來の上を想像し、或は宇宙の眞理を悟るといひ、又は天地の美を感ずるといひ、神の力を信仰すといひ、且つ又彼の催眠術によりて催眠状態に陥りし者が種々の奇なる現象を示すが如き、仔細に考へ來れば此の精神の働き程世に不思議なるものは無きなり、抑も斯様に不思議なる働きを有せる精神とは如何なるものなるか、これ實に吾人の胸中に屢々起り來る問題にして、此の精神の一々の

氣合術獨習法

精神と氣合術との關係

働きにつきて研究する學問は即ち精神科學と稱するもの、而して其の精神科學の研究の結果を統一し之れによりて精神の本體を知らんとするものは哲學なり、されば精神の研究に對して、科學と哲學との相違する點は、科學は精神の働き、即ち現象について研究し、哲學は其の本體について透視するものなり、精神の本體を究むるものは哲學にして、科學は其の一部分につきて研究するものなり、隨つて眞に精神の何物なるかを知らんとせば、哲學的研究と科學的研究と兩々相俟つて初めて完全なるを得べきなり、故に英國近世の有名なる科學者チンダル氏は、科學唯物論に於て物質と精神が必ず兩者相關係して働くものなることを論じて後、『されど科學として精神を論ずる時は、腦髓が斯く動く時は人は憎みの感情を生ずべし、斯く動く時は愛する感情を生ぜるなりといふことを知ることを得るも、結局斯く働く、斯く動くといふことを知るに過ぎずして、何故に斯く働けば憎み或は愛するものなるかといふ、何故にといふことは到底科學者の解釋する所にあらざらん』といへり、これ寔に科學の性質を明言せる言にして、實際科學の爲す所は單に事實を有りのままに研究するに過ぎず、されば精神についても、只た吾人が日々夜々に起す所

七

の知り、感じ、欲望する等の諸作用をいひ、此の諸作用の總計を精神(Mind)といふに過ぎず、すでに吾人が日々夜々に起す諸作用なり、故に其の取り扱ふ所は狭くして淺きを免れず、狭くして淺しと雖も、現に日夜起り來る自己精神内部の諸經驗を取扱ふものなるが故に實驗的にして事實を誤ること少なし、然るに哲學は其の研究する所根本的にして廣く且つ深し、「精神とは何ぞや」「何故に人に精神と肉體とが在りや」「宇宙の一現象としての精神は果して何者ぞ」と深く其の根本を究めんとするに隨つて其の研究法は實驗を離れて冥想的となり、時に迷見誤解多しと雖も、往々現實を離れて想像を神祕の境に馳するが故に其の見る所幽玄にして科學の解すべからざる問題を闡明すること無しとせず、今少しく此の邊の大略を記して以て此の不思議なる精神研究の資料となさん。

第三節 科學上より見たる精神

齊しく科學といふも此の中に包含さるゝ學課は多くして一ならず、先づ大別して之れを自然科學、精神科學の二となす、自然科學とは生理學、物理學、地理學、天文學等

の自然界の現象を對象として之れを研究する諸學科をいひ、精神科學とは美術學、教育學、心理學等をいふ、而して之等の學は各々趣を異にし、此の中専ら精神を研究する科學は即ち「心理學」なり、心理學は今や他の精神科學中に最も發達し、單に通常の心理状態を研究するのみならず、進んで催眠心理、精神病學等の病的心理にまで及んで殆んど其の秘奥を極めて餘蘊なきが如し、故に精神科學より見たる精神は即ち心理學上より見たる精神なり、然らば心理學に於ては此の精神を如何に見るか。

心理學上にていふ精神(Mind)とは又たは心意ともいひ普通にいふ心のことなり、即ち吾人の意識作用全體をいふ識しとは(Consciousness)意味にして、今諸君が此の書物に對する時、諸君の眼に「精神」といふ文字が映じて諸君は「精神」てふ事について考へつゝあり、此の考が即ち識にして諸君が現在の精神は生れて以來、覺え來りし、即ち意識し來りたる識全體を以て成立ち居るなり、此の識の總計を精神と見て其の識に關する諸種の働きを研究するが心理學の役目たるなり。

(一) 精神の起原

（精●神●は●如●何●に●し●て●成●立●し●た●る●か●）心理學は身心の並行を假定す、即ち吾人の精神は單に精神として獨立に存在するにあらざりて必ず物質たる肉體と相俟つて其の作用を表出するなり、其の表出するや筋肉運動の形式を取る、故に恰かも蒸汽機關が種々の仕掛に依りて活動を生じ、其の活動の結果として一直線の運動を爲すが如く、精神は身體の機關が種々に組織されて働くによりて生じたる諸作用なりと見るを得、故に精神成立の要件はこれを生理的に求めざるべからず、然るに精神の基礎となるべき先天的要素三あり、曰く本能曰く直覺曰く氣質之なり。

（イ●本●能●）今一匹のわらぢ蟲を放ちて其の蟲は何れかの方向に向つて靜止せり、然るに其の蟲の側面より熱湯を流さんか、其の熱湯の近附くに從つて蟲は急がはしく前方に奔り去らん、これ何故ぞ、此蟲には熱湯の何物たるやを知らざれども其の側面が熱するによりて足の運動を生じ、以て前方に奔り去るなり、斯様に吾人が幼穉にして未だ何の意識も生じ居らざる時にも、防禦或は自己の目的に適する働きを爲す力を有す、これを本能といふ。

（ロ●直●覺●）吾人は部分は全體よりも小なりといふ幾何學上の自明の理の如きもの

を一々經驗せずして直覺する力を有す。

（ハ●氣●質●）人に神經質あり、樂天質あり、すべて氣質の相違を先天的に有す。さて以上の如き先天的根本能量が基礎となりて此の上に後天的經驗によりて種種の識を生ず、而して其の狀態をいへば。

（ニ●腦●と●神●經●系●統●）精神が腦の働きによりて種々の作用を生ずることは今日一般に信ぜらるゝ所にして、スペンサーは腦は正直なる外物の登記なりと云へるが如く、吾人が日々夜々に受くる所の外界の刺激は悉く皆吾人の腦の上に映ぜらるゝ、例へば今此の書物を讀む場合に諸君の腦は此の書中の記述を以て充たされたり、これ腦が働く所によりてよく此の記述を讀むを得るなり、さて此の書物に依りて諸君は幾分かの智識を得たり、これが諸君の腦と神經系統の作用によりて此の書中の事柄を保留するが故なり、然れども諸君は此の書中の文字を一字一句悉く記憶し居られるにはあらざるべし、其記憶しつゝ、了解せられたる箇所はこれ諸君の識に上れる所、若し讀み外したる所あらばこれ識に上らざる所なり、讀みてよく了解したる所を意識したりといひ、讀みながら心附かざりし事を無意識といふ、精神

とは此の意識と無意識との諸作用の集まりと、前述の先天的要素とより成れるに外ならず、科學上にていふ精神とは實に斯る要件によりて成立したるものにして、之れが或は物事を了解し、識別する智の作用と現はれ、或は喜こび、或は憎むの情の作用と現はれ、又は物事を決定し、欲望する意の作用となりて現はれ、又は感應や想像等の奇異なる作用によりて現はるゝものなり。

これを要するに、心理學に於ては、精神の成立は肉體の諸機關に依るとなし、この説明を爲すには、一々實驗上の事實に依りて何等超自然的、神祕的の意義を有せざるなり。

(二) 精神の能力

斯様に吾人の精神なるものは、吾人が日夜經驗する所によりて知ることを得、然らば此の精神が有する所の能力は、果して如何なる働きを爲し、如何なる力を有するものなるか、此の問題に對して心理學は人の精神の働きは其の現はるゝ主なる方面を以て智情意の三に區別せられ、記憶、想像、推理等の諸種の働きを爲す能力在りとなせり。

今其の説明はこゝに述べざるも、要するに其の説く所すべて經驗の上に説を立て、單に吾人が通常精神作用の能力を説くに過ぎずして、想像や推理や感情や意志の如き實驗を爲す能はざるものに至りては其の説明殆んど行詰りて當惑せざるを得ざるなり、されば今非常なる精神を有する者——例へば千里眼の如き現象は現今の心理學にては之れを充分説明すること能はざる也、何故に然るか、前述の如く、心理學は吾人の日夜經驗せる事を組織して成れるものに外ならず、然るに千里眼と云ふが如きものは普通人が經驗せざりしものなり、即ち心理學の未知の事件なればなり。

こゝに於てか心理學は未だ以て人の精神能力の如何を悉く解決する能はず、これを無限なりと言はんか、これ非科學的也、哲學の口吻を眞似たるものに過ぎず、有限といはんか、如何なる程度に之れを定むべきか、心理學は遂に人の精神能力を悉く解決すること能はざるなり。

吾人は科學上の精神觀を見んと欲して心理學の説く所を一瞥せり、然るに心理學は只通常一般の精神作用を知るに止まりて、其の實驗の及ばざる所に至つては行

詰りて何等の爲す所を知らず、あゝ科學は遂に常識のみ、未だ以て千古未解の人の精神の全般を知るに足らず、況んやチンダル氏の言へるが如く科學は只事實を有のまゝに示すに止まりて『何故に』といふ其の根本問題に鋒を向けざるに於てをや、精神研究の事遂に哲學に行かざるべからざるか。

第四節 哲學上より見たる精神

哲學は、世界及び人生に關する一般の問題を論究する學なり、故に精神に對しては科學の如く其の作用現象を攻究するに非ずして其の本體を究むるなり、科學が人若しくは動物に起る現象として取扱ふに對し、哲學は寧ろ宇宙間の一存在物として精神を取扱ふなり、故に同じく精神といふも、科學に於ては通常心(Mind)のみの意味とすれど、哲學にありては靈魂(Spirit or Soul)の如き特種の意味を有するなり。

さて哲學に於て精神を如何に見るかといふに、こは科學の如く一定の説を見る能はず、同じく哲學といふも唯物論あり、唯心論あり、東西古今各々其の説を異にして

一様ならず、今其の中に於て西洋哲學に就いて言へば、既に古代希臘の哲學者は三千年の古に於て之れを究めんと努力し、或る者は精神の本體は動力なりといひ、或る者は火とし、或る者は空氣なりといひ、又た血を以て人心作用の根元と爲せるもありしが、漸く紀元前四十世紀の頃、哲人デモクリタスに依りて稍や一定の説を見たり。

(一) 精神は原子にして火質なりとする説

彼はおもへらく、精神は一の原子にして其の質は火にして最も精微なり、又た圓滑にして最も動き易きもの、而して遍ねく宇宙間に瀰蔓し、人間の肉體中には最も多く存在し、呼吸に依りて維持せらる、此の心の原子と他の物とが相互作用する時、茲に知覺を生じて、色、音、香味等幾多の感官の性顯はるゝなりといへり、而して此の心の原子と他の物とが相互作用する有様は、先づ外物より『アイドラー』と稱する極微の影を放出し、此の影が心の原子中の之れに類似せる部分に觸れて以て知覺を生ずるなり、さて此の知覺は總べて粗大なる原子にして外に夢幻の如きものは覺醒時には餘り微なるがために感ぜざりしを、睡眠中に細微なる思惟が之れを感ずる

なり、而して斯様な状態に於て、人の精神は互に交通す、即ち心通て、事實あることを言ひ、又鬼神の存在をも否まざる極めて面白き説を立てたりき、要するに此の哲學説に於ける精神は、火質を具へたる原子的物質より成れりといふに在り。

(二) 精神は本體界の一部分なりとする説

精神を以て物質的原子より成れりとせる唯物論的見解に反し、彼の「デモクリタス」と殆んど同時の「プラトーン」は全然之れと反對に唯物論的見地より、所謂「イデア」(觀念論を唱道して「イデア」は本體常住の世界にして現象變化の世界の原型なり、而して人の精神は「イデア」の一部分を分有して現存するものにて、此の精神の作用に二つの方面あり、即ち生活と意識とにして、生活の根元としての精神は生滅界に屬するも、一方「イデア」を認識し得る方面より云はゞ、精神は現象界と本體界との二界に跨りて永遠に不滅なり」と、精神不滅の思想の基を成せり。

(三) 精神は身體の圓極なりとする説

「アリストテレス」は此の二説を調和せるが如き態度を以て云へり、心は身の圓極なり、即ち身體の運動變化中に自ら實現するといふが如き説を立てたり、此の點に於

て彼は心身相關論者たるなり。

斯の如くにして希臘哲學の初期に於ては精神に對する三種の見解あり、即ち、精神は物質より成れりといふ、原子論者と、觀念論を立つる唯心論者と、身心并論者なり、爾來種々の哲學説は出でて精神に關する雜多の諸説は出でたれども、要するに後世之等の學説が種々に變化し發展したるに過ぎざるの觀あり。

かくて古代哲學は漸く進歩して「靈魂」といふが如き觀念をも生じ、後世のストア派に至りては靈魂即ち精神を重んじて肉體は精神の牢獄なりといひ、靈魂輪廻の説をも生じ、中世に至りては一切の物は精神に依りて生ずるといふ唯心論最も勢力を占め、すべての哲學者は精神の研究に力を注ぎ、遂に精神は非人格的の理性と見らるゝに至れり、然るに此の反動は十八世紀に至りて唯物論を生じ來れり、其の説に曰く。

(四) 精神は物と力との聯合也とする説

佛蘭西のラメトリーは醫學上の觀察より自他心身の相關を認め、動物と人との生理を研究し、人の精神作用は單に腦の器械的作用に過ぎずとなして曰く、「凡そ一

切の事物は物と力との兩者の聯合によりて成る故に精神も亦た腦の作用より生ずる力に外ならず、精神を物質の外に假定するは形而上學の空想に過ぎず、精神作用既に皆身體より生ずとせば感官に起因なきものは凡て精神内容となるを得ず、若し人をして生來他人と交通せざらしめ唯僅少の感官の經驗に限れば其の觀念内容は大に通常人と趣を異にするものあらん」と彼はこれを以て近世哲學史上劈頭に唯物論を唱道して從來の形而上的思想を排して實驗心理學を喚び起さんとしたり、これ等の唯物論によりて後世の心理學は生れたり、心理學は實に此の種唯物論に負ふ所多し、而して此等の説は十九世紀に至てスペンサーに於て完成されたり。(スペンサーの説く所殆んど現今の心理學と同じ)

(五) 精神は最上能力を有すとする説

精神の最高能力としては實に哲學上にいふ所の理性と靈魂なり、これ實に心理學等の諸科學に於て説くを得ざる所のものなり。

(理性) 此の語には古來種々の用法ありて、最も廣義に解する時は、概念、斷定、推理、容知等の高級認識力を指して人類知力の總稱となす、然れども此の意味に於ては專

る心理學的なり、今哲學上に於ては高等直覺力、即ち先天眞理を知る能力にしてカントの用ゐしもの、精神に此の能力あるがために吾人は如何なる眞理をも達觀することを得、科學上に於て不可知の問題とせらるゝことを知るを得るなり。

カントはおもへらく、吾人が通常知るといふことは只だ經驗界の事物のみ、眞の經驗以外相對界を超越せる神といふが如き絕對界を知るは此の理性に依らざるべからずと、而して吾人が物事を認識するに當りて精神に二の作用あり、一を悟性といひこは科學的智識の機關なり、他は今いふ理性にて哲學的機關たるなり、又吾人の精神には本能等の作用に動かされざる能力あり、即ち肉慾を恣にせんとするは吾人の本能なれど之れを抑壓する精神能力あり、これを倫理學上理性といふ、これ

又た通常科學に於て説かざる精神能力たるなり。

哲學上に於ては人の精神能力は實に無限なり、吾人の精神能力は斯の如く、單に科學のいふが如き經驗より成立せるもののみならずして、勿論吾人の精神は後天的の經驗が其の大部分を成せるものなるも、更に此の經驗以外特殊の理性と稱するが如き能力の存するありて、宛かも煌々たる明玉の如く、何等外部の影響に關せ

ず、卓然として無限の能力を有し、或る場合には之れを發揮し得るといふが如くに見るなり、但しスペンサー等の唱ふる唯物論に於ては精神に斯る先天的能力在るを認めず、總べて後天的の經驗に依りて成れるものなりとするなり、今は唯心論の場合にいふ、斯様に理性の存在を説いて精神を尊重視し、且つ又た精神に靈魂と稱する能力在るを説いて科學の不可知とせる精神の一面を闡明せんとす。

(六) 精神は靈魂なりとする説

吾人は人類學或は哲學史等の證明を待つまでもなく、時の古今を論ぜず、洋の東西を問はず、凡ての民族が人に靈魂なるもの存在することを信ずることを認めざるを得ざるなり、而して此の靈魂の實體の如何なるものなるかは之れを科學に問はんか、科學はもとより此の實體を知らず、又た之れを實驗し得ざるの故を以て、之れ科學思想の未だ發達せざる野蠻未開の思想なりといふも、今尙知識ある人の間に行はれつゝあるを見れば、強ち野蠻未開の思想とのみ云ふを得ざるべし、兎に角靈魂に對する存在非存在、滅不滅の疑問が人々によつて懐かるゝとせば、之れに對して何等かの解釋を爲さざるべからず、然るに科學は前述の如く之れを爲す能はず、此の

問題に指を染むるものは哲學なり。

(イ) 靈魂存在の實體的論證。靈魂が必ず存在するとの證明は之れを一言にて言へば、若し靈魂が全然無きものならば、斯様に多くの人が齊しく「靈魂」てふ觀念を有せざる筈なり、或る論者は之れを以て太古蒙昧の民の迷想なりとするも、事實は人智開發の今日といへども、世の野蠻と文明とに論なく、人々の思想に在る以上、これ人心固有のものにして、人々が自らの靈魂を自覺するが故に生ずる思想なり、我れといふことを思ふが故に「我れ」の存在が眞實ならば、靈魂を思ふことが人心固有の觀念なる以上、靈魂の在る事も事實なりといふべきなりと、これを一部の哲學者が靈魂の實體論的の證明といふ、彼等は此の證明の上に靈魂の存在を確定して、靈魂不死の説を爲すなり。

(ロ) 靈魂の性質。哲學上の唯物論者は心理學と同じく靈魂の存在を否定す、若し精神の存在を許すとすも、それは單に身體組織より生ぜる普通の精神現象に外ならずして物質的現象なりと見るなり、然るに一部靈魂の存在を信ずる唯心論者は之れに對して説を立て、曰く。

靈魂は物質にわらずして精神なり、何となれば凡そ總べての物質は此の空間に於て一定の場所を占む、而して各物體は分子より成立して分解せらるゝものなり、然るに靈魂なるものは未だ身體の何れの箇所に存在するを認めず、又た分解されたるを聞かず、これ靈魂が非物質的なる確證なり。

靈魂は變化せず、靈魂の非物質的なることは、靈魂が時間の制約を受けざることを以て證し得べし、凡そ物體は其の組織上よりして常に同一状態に在るを得ずして、絶えず化學的及び物理的變化をなすものなり、生理學の證明する處に據れば吾人の肉體は數年間に全く一新して舊物質の一塊をも止めずと、然るに吾人の靈魂は生成より以來同一のものとして又た不變なり。

靈魂は人の本體なり、すでに生理學の示すが如く、人の肉體を組成せる物質は數年間に全く一變し盡すに拘はらず、十年前の我も二十年後の我も全く同一なるを見れば、人格の同一なる點を此の靈魂の不變なるに依るとなし、以て靈魂が人の本體と見るべしといふにあり、而して靈魂は何等肉體の力を借ること無くして自活せるものなりと。

以上の如き靈魂論は一般の哲學、又は唯心論のすべてが稱ふるといふにはあらず、るも一部の學者間に於て唱へらるゝ所にして、彼等は斯る論證法によりて靈魂の不變を説くなり、其の他ライブニツツの如き靈魂肉體共に不變なりとなす哲學説あり、或は印度哲學の諸學説の如き高遠なる靈魂論あり、又た近世の大生物學者ハツクスレーの如き生物學上より靈魂論を説きし哲學説もあり、其の所説一様ならず、又余が上述せし學説の如き、其の説の當否はもとより問ふべき限りにあらず、こゝには只だ哲學が精神の最高能力として、科學の取扱はざるものを論究するてふことを紹介するを以て足れりとせん。

第五節 精神觀の將來

以上大略科學と哲學とが精神を如何に取扱ふかといふことを述べたり、即ち科學は日常の經驗を基礎として、此の基礎の上に立ちて實驗上より種々の立論を爲す、而して科學の取扱ふ精神は只だ精神現象のみ、かくの如くにして科學の精神觀は、其の範圍極めて狭く淺しと雖も、もとより實驗上の説なるが故に多く誤謬を見ず、

故に吾人は通常の精神現象につきては、多く科學の示すところに従つて過ちなきなり、然れども既に言へる如く現今の心理學の實驗法は未だ幼稚にして意志、想像、推理等の如きに至つては之れを實驗する方法を知らざるが故に行き詰らざるを得ざるなり、而して科學は部分に研究するなり、精神の現象は之によりて知られんも、宇宙の一存在としての精神は遂に哲學の手によりて究明せられざるべからず、然るに之れを又前述する如く、思辨冥想を事とする哲學はしばしば、迷見誤解に陥りて正確なる判断は得易からず、甲論乙駁哲學上の眞理は今尙總べて未定なり、果して然らば哲學の完全なる精神觀は何時の頃にか成就すべき、思ふに吾人が正確なる精神現象の研究を爲すものとして信頼する現今の實驗心理學は十八世紀の唯物論の哲學に依りて十中八九は成就せられたり、而して十九世紀以後の哲學は亦た此の實驗心理學によりて多大の助力を蒙りぬ、若し今後科學は發達して精神研究を司どる心理學が完全の域に達せんか、哲學は之れを基礎として更に進歩せる學說を立つべく、心理學は亦た哲學が示す所に依りて其の學說を統一し完成することを得ん。

然り而して近來心理學は漸やく其進歩の兆を示せり、從來發見せられざりし催眠心理學上の眞理は往々にして千古未決の精神上の秘密を開くことあり、又た泰西諸國の學者が齋らす所の學術上の報告は日に月に新らしき學說の發見となる、今後心理學が順境に進歩發達すれば、或は吾人が希望する如き點にまで進歩完全に千古未だ曾て適切なる解決を得ざる『精神とは何ぞや』との問題は完全に解決せらるべき日無きにあらざるべし、斯くして『精神とは斯の如きものにして斯の如き作用を爲す』といふことが明らかに缺點なく示されんか、哲學及び精神學の任務はこゝに殆んど盡きて人類は實に至大の幸福を得べきなり。

第三章 氣合術を行ふ極意

(一) 丹田の修養

前章に於て氣合術を行ふ基礎たる精神の如何なるものなるかを略述し了れるを以て、本章にては如何にして氣合術を修むべきかを述べんとす、蓋し之れを記述する丈は簡易なるものなれど、實習は容易のものにあらず、余は勿論斯術の蘊奥を極

めたるものにあらずれど余が常に實驗しつゝある處を理論上より考察し、且つ先人が之れを修めたる實驗談に基き少しく其の修養方法を説かん。

凡そ人は一般に暗示に感應すべき者なれども、或る暗示に對して如何なる程度で感應するかは、暗示者の暗示を與ふる方法の巧拙と、被暗示者の精神状態の如何によりて強弱あることは催眠學上の原則なりとす、然らば此の氣合術も氣合を掛ける者の修練が充分積み居るにあらずれば大效を奏し難きことは勿論なり、人を驚かさんとする聲は大きくして且つ力あるものならざるべからず、聲が大きくして且つ力あれば、それだけ多く相手が驚く如く、氣合術者の口より出づる「エイッ」と叫ぶ一聲が、敵手の肝臓に響いて五體が痺れるやうになるには充分の鍛練を要す、「エイッ」の一聲は口先にて大聲をするにあらずして丹田より力ある莊嚴の語を出すなり、よりて氣海丹田の修養が第一なり、丹田と云ひ氣海と云ふは何を言ふか一言に言へば下腹部の事なり、之れに就き熊代氏は詳細に説明せり曰く。

「仙家にては臍輪の處を稱して氣海といひ、臍下一寸五分の處を丹田といふ、丹田とは不老不死の仙藥たる大還丹を作り出すべき田地といふ意にて、氣海とは總身の

元氣が洩るべき大海ぞといふ義である、茲に氣海丹田の大切なる所以を説かば、臍は元來臍帶の落ちたる處なるが其の臍帶てふものは全く二筋の緒で一端は母の胎中に附き一端は子の臍に附きて、一筋の方よりは母の胎より血を送りて子の體を養ひ、養ひ終れば又一筋の方より母の胎へ送り返すものである、されば臍は鍋釜にて言はゞ鑄口の處で瓜果で言はゞ蒂落の處である、翅に血を母胎より輸入るゝばかりでない、天地の元氣を受け初めたる、人身の根元元氣の本府たる處である……氣を全身に發送するに便利のよきやうにとて、造化より賦與せられたもので上下の延長相等しく左右の延長相等しといふ處から肉月に齊といふ字を書きて臍の字を爲したるものか、また齊はとゝのふと訓ず、即ち臍は呼吸の原動力の處で氣を此處に漙めて、いつも下腹部が充實して居るときには、よく肉體をとゝのへるものである、されば肉月に齊字を書きて臍と爲したることは、頗る意味の深いもののあるやうに思はるゝのである、凡百の藝能、其極意を尋ねれば、是れ亦何れも臍の一字に歸するのである。

氣海丹田の修養とは平たく云へば下腹に心を留め力が籠つて居るやうにせよと

いふことなり、人が何かに驚ける場合には必ず下腹が小さく、又た神経衰弱の人の腹部は皆ベツタリとして力の無きものなり、斯様に下腹即ち丹田に力の無き時は、人は少しの事にも驚き易く、又た言葉にも筋肉にも力が無くなる、此の状態に在る時は決して氣合を掛くる資格なし、之れに反して下腹に精神を凝めある人は之を萬事に應用して落附きあり、其の聲は太くして力あり俗に所謂る山が崩れて來ても動かぬといふ人は此の種の人に多きは諸君も屢々實見せらるゝ處ならん、此れ心身相關の理によりて精神に力あれば従つて肉體に力を生ず、彼の大豪傑たる西郷南洲の腹を見よ、又彼の負けても勝つても悠然たる横綱梅ヶ谷の便々たる腹を見よ、思ひ半に過ぎん、英國のヴィクトリア女皇が女は弱し、されど子の母は強しと云ひたるは附會かは知らざれど女が子を孕めば、即ち腹が大きくなれば落附きが出來て強くなるといふ意味にも取ることを得、氣合術によりて敵手の五體を痺らす位の強き力ある音聲を出さんとするには是非其下腹に精神籠りて力があるやうに修養せざるべからず、これ氣合術に達せんとする修養法の第一義なり、而して之れを爲すには腹式呼吸、坐禪或は自己催眠によるをよしとす、海舟翁は坐禪の方

法に依り下腹を修養して以て心膽を練磨せり翁曰く。

彼の島田といふ先生が劍術の奥義を極めるには先づ禪學を始めよと勸めた、それでたしか十九か二十の時であつた、牛島の廣徳寺といふ寺にいつて始めた、大勢の坊主と禪堂に坐禪を組んで居ると、和尚が棒を持て來て、不意に坐禪して居る者の肩を叩く、すると片端から仰向に倒れる、なに、皆が坐しても、錢の事やら、女の事やら、色々の事を考へて、心が何處にか飛んで了つてゐる、そこを叩かれるから喫驚してこるげるのだ、おれなんか此のひつくり返る連中であつた、段々修業が積むと、少しも驚かなくなつて、例の如く肩を叩かれても、只僅か目を開いて視る位の所に達した、かうして殆んど、四ヶ年間眞面目に修業した、此の坐禪と劍術とが土臺となつて、後年大層爲めになつた、瓦解の時分、萬死の境を出入して、つひに一生を全うしたのは此の二つの功であつた、ある時、澤山刺客やなんかにおびやかされたが、何時も手取りにした、此の勇氣と膽力とは畢竟此の二つに養はれたのだ。(氷川清話)

と實に丹田の修養は精神の養成として非常の功あるを知るべし、されば氣合術を

修めんとするには先づ丹田を十分養はざるべからず、丹田を養ふことによりて膽力は出来、膽力が基礎となりて此の術を行ふるを得るなり、されば古來の英雄豪傑と稱せらるゝ劍客は皆此の術を得んが爲めに苦心し、靜坐工夫して丹田の修養に務められたり。

(二) 無念無想の修養

催眠術士が催眠術を行はんとするに當りては、術者の精神は莊嚴にして熱誠ならざるべからず、若し術者の心が散亂妄動すれば、施術は無効に終る。氣合術に於ても亦たこれと同じく、術者の精神は所謂無念無想の状態にありて唯氣合のことにのみ全力を傾け得る状態なるを要す。無念無想の状態とは所謂無我の状態なり。無我の状態とは心は明鏡止水の如くにして一點の曇りなく、騒げる事なく、落付き拂ひたる状態なり、斯の如くなれば、曇りなき明鏡に萬物が其の儘の姿を映し來るが如く、敵手の虚實が明白に見え得るなり、されば機に望み變に應じて自在に術は施され、斯くして敵手の實を避けて虚を衝き、一氣に仆し得らるゝなり、勝伯曰く、心は明鏡止水の如しといふ事は、若い時に習つた劍術の極意だが、外交にもこの

極意を應用して少しも誤らなかつた、かういふ風に應接して、かういふ風に切り抜けるなど、豫め見込を立て、置くのが世間の風だけれども、これが一番わるいよ、おれなどは何にも考へたり目論見たりすることはせぬ、たゞ一切の思慮を捨て、しまつて妄想や邪念が靈智を曇らすことのないやうにして置く、かりだ、即ち所謂明鏡止水のやうに、心を磨き澄ましておくばかりだ、かうして置くと機に臨み、變に應じて事に處する方策の浮び出ること恰も影の形に従ひ響の聲に應ずるが如くなるものだ。(水川清話)

此勝伯の談話に氣合術の奥義は含めり、再讀して其の意を味はれたし。論者或は曰はん、人の精神が何の考へもなき、所謂無念無想の状態、即ち催眠状態の如きに至らば、自ら一切の自發的活動、即ち自分の所作は休止して了ふものなり、斯く自發的活動が休止して了へば、相手を倒すといふが如き事は出来るものにあらず、と勿論極端に無意識、無感覺の状態となれば、一切の自發的活動が休止するが故に、斯術を施する能はざるも、劍道或は禪學にていふ無念無想の境界とは左様な忘我の状態をいふにあらずして、無我の状態をいふ忘我とは其の精神状態に

大變なる相違あり、前者は一切の自我意識を忘れ盡したる状態なれど、後者はこれと異りて自我觀念中の種々の邪念妄想を無くする事にして、無我の我は此の邪念妄想を指す、此の邪念妄想を拂ひ除いて無くすれば真正の自我が發露す、これを爰に無念無想の状態と名づく、今此の場合にいふ邪念妄想とは何ぞ、即ち敵手に對して恐怖を懷く念慮とか、或は強ひて勝たんとか思ひあせる念慮なり、斯くして敵に對し以て敵の行動に注意するとも、實は心理學上にていふ非意、注意の状態の如く、注意しながら却て注意せざるが爲めに不覺を取るなり、之れに反して一切の邪念妄想即ち敵手を恐怖する精神もなく、敵手を仆さんとあせる心もなく、平然として敵に對する時は、心理學上にいふ無意、注意の如く、注意せずして實は非常なる注意を爲して敵手の進退動作を洞察し、機に臨み變に應じて如何様なる働も出来るなり、されば無念にして而かも大念あるなり、力を入れずして實は精神に大活力が充滿しつゝあるなり、澤庵曰く。

智慧働の分は失せて無心無念の位になり申候、至極の位に至り候へば、手足身が覺え候て心は一切入らぬ位になる物にて候、鎌倉の佛國々師の歌にも、心ありて

もるとなけれど、小山田に、いたづらならぬか、しなりけり。皆此の歌の如くに候、山田のかゝしとして人形を作りて弓矢を持たせておく也、鳥獸は是を見て逃る也、此の人形に一切心なければ、鹿がおしてにぐれば、用がかなふ程に、いたづらならぬ也、萬の道に至り至る人の所作のたとへ也、手足身の働斗りにて、心がそへとも止まらずして心がいくにあるとも知れずして、無念無心にて山田のかゝしの位にゆくものなり。(不動神智妙經)

と、彼が言へる如く無念無想の境界になれば、彼の案山子あやまこが能く鳥おどしとなるが如く、心を働かさずして働くといふことを得るなり、彼は又斯く云へり、不動と申候ても石か木かのやうに無性なる義にてはこれなく向ふへも左へも右へも十方八方へ心は動きたきやうに動きながら卒そと度も止まらぬ心を不動智と申候。と、石か木かのやうに無性なるとは即ち忘我の状態にて自發的活動休止の状態なり、止まらぬといふは一處に停滯せざるをいふ、十方八方へ動きたきまゝに動きて而かも不動とは即ち無念無想の状態を指せるものと知るべし、此の如く精神に妙作用を起し得るに至つて始めて氣合術は行ひ得らるゝなり。

尙、通俗なる例を以て此の理を云へば、諸君は彼のゴム毬を弄びたることあらん、今
 ゴム毬を取つて地上に抛てば、彼の弾力によりて毬は高く飛び上らん、これ何故ぞ
 や、此の飛び上る弾力は何によつて生じたるか、即ちゴム毬の中が空虚なればなり、
 若し一物にても中にあらんか、毬は弾力を生ぜず、反撥性を失ふて空中に飛び上ら
 ざるべし、而かも空虚といふと雖も、其の真空ならず、即ち空氣なる者が充實せり、
 若し空氣を出して真空とすれば、毬はベタリと萎縮とて反撥性を失ふなり、今無我
 の状態に在りて能く氣合術を施し得るといふも亦た此の理に外ならず、若し心中
 何等か徹底せざる所あれば、毬の中に物ありては強き弾力を生ぜざるが如く、強き
 氣合を發する能はざる也、而して毬が所謂の真空の状態に在れば、萎縮して何等の
 反撥性もなきが如く、吾人の精神状態が忘我の情態にありては何等の自發的活動
 もなし、能はざるなり、然るに毬が雜物を藏めず、空氣のみにて張り切りたる時は、こ
 れを抛てば高く飛上り、之れを抑ゆればボンと反撥するが如く、心中何等の雜念を
 止めずして、所謂の精氣活力が充満して居る時は、敵が攻め來らば突き返し、敵が退
 けば其の虚に乗じて「エイッ」と一喝して之れを仆すに至る也、氣合術は此の理に依

りて生じ、此の理に依りて行はる、而して之れを心理學者は活源より出づる活力と
 呼ぶ、諸君は之れを前述の方法に依りて實地に練磨し練習すれば、遂に何の苦もな
 く如何なる場合如何なる時にも行ひ得ん、志あるもの努力せずんばあるべからず
 これ此の術の秘傳なり秘訣なり。

三 氣合術修得の苦行

古來の英雄が此の術を得んがための苦心は實に尋常ならず、彼の伊藤一刀齋又は
 塚原卜傳の如きは山中に居を設けて之に住み人無き山間の巖上に靜坐して心膽
 を練りしと云ふ、又た宮本武藏の如きは小倉の靈巖洞中に坐禪して心氣を養ひた
 りといふ、以て氣合術會得の苦心は尋常ならざるを知るべきなり、然れども此等の
 事實の真相は吾人の詳らかに知り得ることにあらざれば、余が最も憧憬し師事し
 たる故勝海舟伯の行ひたる事實談を掲げて参考に供せん、伯曾て長州に於て鐵砲
 にて撃たれんとするや、忽ち其の手にせし鞭を以て相手の火繩を打落して無事な
 るを得たことあり、又た維新の際勝伯自ら西郷隆盛を訪ふや、官軍の兵士關門を擁
 して伯を入れず、伯乃ち故らに傲然大喝し兵士をして覺えず門を開かしめたりと

いふ、之れ即ち氣合術の應用なり、勝伯の著はしたる氷川清話に左の文見えたり。
 本當に修業したのは劍術ばかりで、全體おれの家が劍術の家筋だから、おれの親父も骨折つて修業させやうと思つて、當時劍術の指南をしてゐた島田虎之助といふ人に就いた、此人は世間なみの擊劍家とは違ふ所があつて、始終今時みながやり居る劍術は形ばかりだ、折角の事に足下は眞正の劍術をやりなさいといつて居た、それから島田の塾へ寄宿して自分で薪水の勞を取つて修業した寒中になると、島田の指南に従うて毎日稽古が濟むと夕方から稽古着一枚で王子權現に行つて夜稽古をした、何時も先づ拜殿の礎石に腰をかけて、瞑目沈思心膽を練磨し、然る後起つて木劍を振り廻し、更にまた元の礎石に腰かけて心膽を練磨し、また起つて木劍を振り廻し、かういふ風に夜明まで五六回もやつて、それから歸つて直ぐに朝稽古をやり、夕方になると、又王子權現へ出掛けて一日も怠らなかつた。

勝伯は斯の如く苦心して斯術の蘊奥を極めんとせり、尙同書に曰く。

始めは深更に只一人樹木が森々と茂つて居る社内にあるのだから、なんとなく

心が臆して風の音が凄く聞え、覺えず身の毛が豎つて、今にも大木が頭の上に乗れかゝる様に思はれたが、修業の積むに従ふて、次第に慣れて來て後には却つて寂しい中に趣がある様に思はれた、時々は同門生が二三人來ることもあつたが寒さと眠さとに避易して何時も半途から近傍の百姓家を叩き起して寐るのが常だつた、併しおれは馬鹿正直にもそんな事は一度もしなかつたよ、修業の效は瓦解の前後に顯はれて、あんな艱難辛苦に堪へ得て少しもひるまなかつた、ほんに此時分には寒中足袋もはかず、袷一枚で平氣だつたよ、暑さ寒さといふ事はどんな事やら殆んど知らなかつた、ほんに身體は鐵同様だつた、今にこの年になつても身體も壯健で根氣も丈夫なのは全く此時の修業の餘慶だよ。

と、其の修養の苦心と鍛練の有様を知るべき也、之に由りて獨り氣合術のみならず武道の極意は單に體力の練習のみならずして精神の鍛練にあることを知るべきなり、實に氣合術は戦はずして勝ち、勞せずして利益を得んとする、謂はゞ濡れ手で粟の掴み取りの妙法なり、然れども之れを得るまでの苦心は容易にあらざるなり、只「エイッ」といふ一喝には幾千萬無量の苦心慘澹たる事實が含まれて居るもの

なることを忘るべからず。
尙重複の嫌あるも松村介石氏の談話を次に抄出して示さん。

己の父は劍道の師範役にして最も得意とせられたりと云ふ氣合術によりて鐵を切たり扱此の氣合といふものも修養の結果になる精神力の發現で、傳へ得べきものでなくして自得すべきものである。總て此の氣合術といふものは呼吸が甚だ六ヶしい周囲の調子と呼吸がシツクリ揃はねばいかぬ、この鐵を切るが如きともそんなに六ヶしいものには無い、只倦まず撓まずやつて居る内に其の呼吸を自得するのである、山岡鐵舟の悟りは全く精神力の顯現自得である、荒木又右衛門、宮本武藏の劍法の奥義といふも矢張同様である、又右衛門の鐵扇は、身を捨て、こそ浮む瀬もあれとあり武藏の秘訣として傳る處は、目を以て知る勿れ、手を以て撃つ勿れ、心を以て撃つとありしといふ、且又彼の槍先きで米俵をポンポン刎揚げるといふのも精神力の働きて、斯んな奇妙なことさへ精神修養の結果で出来るのだから、病氣を精神の力で癒す位のこととは何でもない筈である。氣合術を實行する方法は以上に説ける所に依り諸君は略々之れを知られしなら

欠

欠

氣合術を行ふ極意

感ぜず持上ぐる事が出来る。これ此の掛聲の結果である。この掛聲と同時に、全身に於ける筋肉は緊縮し、精氣満ちて活氣旺盛非常の勇氣を増すものである。と云へり、掛聲效用の理窟は斯る處にもあるなり、尤もこれは掛聲と同時に自己の精神を統一することを云へるものなるが、此の掛聲によりて敵手を倒す理は斯の如く統一したる精神力を感應せしめしに外ならず。

(七) 阿呷の呼吸法

氣合術を行ふには猥りに「エイッ」と叫びさへすれば夫れにて可なるものにあらず。其掛聲を行ふに妙機あり、其妙機を知らんには先づ阿呷の呼吸とは如何なるものなるかを知らざるべからず。

阿呷の呼吸とは阿といへば息を吐き出す姿、呷といへば息を吸ひ込む姿で、息を吐き出す時は筋骨が弛む、息を吸ひ込んで下腹に入ると筋骨が縮るなり、阿の時は力なく呷の時は力が入る、即ちこれ虚實にして我れ實にして敵の虚を撃つのは、即ち下腹に息を入れて敵の吐く息の時に突くので、突くに應じて倒れるなり、氣合を掛ける妙機は即ち之れなり、我は息を引き込んで居て敵の吐く息と見る機一髪、エ

イッ」と聲を掛けると立ろに敵の氣を奪ひ去ることが出来るなり、彼の武術に於ける勝敗に虚實を明にする秘決も畢竟奚にあり。

或人曰く、凡そ吾人が深呼吸を爲すには、呼氣吸氣共に鼻を以て吐納するのが本則であるが、また別に鼻より吸ひ口より吐き出す方法もある。所謂阿呷の呼吸法は後の方に屬するものなり、吸ひ込むときにンーといふ聲を爲しつゝ、下腹に力を入れるなり、また呼氣即ち氣を吐き出すときは口を開いて口より出す、其時アーといふ聲を爲しつゝ、氣を吐くなり、蓋し阿は開口の音、呷は口を閉づる音で、阿の聲を出さうと思へば口を開かざるべからず、而して阿の聲を發する時には咽喉の處にある懸搖垂俗に所謂ヒコロクといふものが上の方へ吊り上る、又呷の聲を發する時には其の懸搖垂が吊り下る、試に鏡に寫し口を開けて置いて阿と呷との聲を出して見れば直ぐ分るなり、斯う云ふ工合に呷の聲を出すときに懸搖垂が下るから鼻腔は開張して其面積が廣くなる、其の際鼻より吸氣すれば酸素を多量に納れることが出来る、また阿の聲を爲すとき懸搖垂が吊り上るから鼻腔内は狭められて反對に口腔内の面積が廣くなるから其の時口の方より呼氣すれば炭酸瓦斯を多量に

吐出することが出来るなり、即ち呼吸の目的が十分に達し得らる、故に阿呷呼吸法は頗ぶる必要な呼吸法なり。

と成程之れも一理あることにして精神修養法としては可ならんも、愈々互に雌雄を争ふ場合にアー、ンーの聲を出して口を開きたり閉ぢたりして呼吸をなし相手方に示すものありや否や、余は寧ろかゝる人なきを知る、單に阿は呼息、呷は吸息と解するも實益に於て不可なからんと信ずるも否か。

金石相撃つや突如として火を發す、其の作用たるや實に目にも止まらざる也、氣合術も亦た是の如し電光石火的也、敵手に乗すべき虚あらば電光の如くこれに乗じて彼を倒す也。

前數段に述べたる諸法により氣合を掛くる機を見定めて其の機を逸せざる様にするが肝要なり、而して其時に臨んでや注意周到に或は敵の虚を誘引し、或は敵の虚を衝き以て勝を制するなり、此の作用を自在に行ひ得るやうになりたる状態を佛國々師が「心ありて守るとなけれど小山田に、いたづらならぬ案山子なりけり」と歌ひたるなり、又た澤庵禪師が「至極の位に至り候へば手足身が覺え候て心は一切

入らぬ物にて候と云ひたる也、實戦の場合に至りて、兎やせん角やせんと思ひ案じて躊躇する如くにては到底此の術は行はるゝものにあらず。

四八

(八) 確心力の必要

術者は必ず敵を倒し得べしとの確心ありて後に氣合術を行ふことを要す、若し此の確心が不充分にして之れを行はんか失敗に終るや當然なり、よりにて其確心を得る様に精神の修養を第一義とす、而し敵に活氣が充滿して居れば此の術は行ひ難きものなれば、其の實を避けて虚に乗ぜよとは屢々繰り返したる所なるが、さればとて無闇に敵手の鋭氣を避けるばかりにては無論駄目なり、勝伯は自己の實驗談を爲して曰く。

危難に際會して逃れぬ場合と見たら、先づ身命を捨て、かゝつた而して不思議にも一度も死な、かつたこゝに精神上の一大作用が存在するものだ、一たび勝たんとするに急なる時は忽ち頭熱し胸跳り、措置却つて顛倒し進退度を失するの患を免れることは出来ない、若し或は遁れて防禦の地位に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じ來りて相手に乗せられるのだ、事大小となく此の規則に支配さ

れるのだ、おれは此の人間精神上の作用を悟了して何時も先づ勝敗の念を度外に置き虚心坦懷事變に處した。

伯が云へる如く無暗に敵手の氣鋒を避けんとばかりすれば、却て彼の乗ずる所となるのみにして氣合術にならず、氣合術は積極的に敵を倒す術なればなり。

以上は只實行の場合に於ける必要條件の尤なるものを記したるのみ、其の他は術者の臨機應變たるべし、心を以て心に傳ふる此の術は、今茲に筆紙を以て記す能はざる機微あり、例へば書を甘く書くには如何にせばよきか、只其書法の講義を讀みし丈にては効少なし、之れと同じく斯道に志ある士は精讀翫味實地に就て練習を重ね、以て學理に鑑み實驗を積まば斯術の大家となることも敢て難きにあらざるべし。

第四章 武術の奥義としての氣合術

(一) 武術上に行はれし氣合術の淵源

吾國に於て武術家が氣合術なる名稱を附して之れを用ゆるに至りし時代は恐ら

四九

く徳川氏の初期に属するものなるべきも、其の實際は古來より氣合、矢聲等と稱して勝負の場合に必ず用ゐられたるもの、如し、余が徳川氏以前は此術が獨立して用ゐられざりしといふは徳川氏以前に出でたる戰記物語等に、氣合術なる名稱を見る能はざるに依る、而して徳川氏の初期に一種の術として氣合術の名稱を與へたることは、當時の著述にして現今世間に流行せる講談の種本となれる武勇物語の種類に始めて此の事を記述し、且つ寛永以後の劍道の奥義等を記載せるものに此の名稱を見受くるが故なり、然れども吾國の武藝家が用ふる氣合なるものは、武術に最も必要な呼吸として舊くより用ゐられたることは、弓術に矢聲あり、相撲に掛聲あるを見ても知らる、彼の伊藤一刀齋が夢想劍と稱へて氣合を以て人を仆したりと云ひ、又た宮本武藏が之を受けて、佐々木巖柳を惱ませりと云ひ、或は荒木又右衛門が柳生宗冬の面前に於て白紙をしごきて白刃に對し、宗冬をして切り込むとを得ざらしめたりと傳ふるが如きは、今より云へば疑もなく氣合術に外ならず、要するに斯の如き術は武術の發達と共に次第に發達して形式を具へ來り、寛永の前後に至り一方には心膽練習の法たる禪學或は明儒の唱ふる理氣の説等の

影響を受けて漸く完成したるものならん。

さて此の氣合術が武藝として如何なる形式と内容とを具へたるものなるか、元り、術といへばとて心の作用にして外觀に現はれたる舉動は心の作用を大ならしめ、又は之によりて生じたる結果と見るべきなり、即ち此の術は心と心との感通、以て傳心の術なれば、砂糖の甘きは嘗めたる者にして始めて知る如く、此の術を實地に會得したるものならんは、其機微をば知ることを得ざるは勿論なれど、砂糖の甘き理は學理上之れを知ることを得るが如く、此の術を知らざるものと雖も、これが學理上應用の一現象たる限りは、理言を以て説明し得られざるにもあらず、先づ理論に入るべき順序として古來武術として此の術が如何に行はれしかの實例を知る要あり、世間傳ふる所、元より事實の眞偽は知るに由なきも、左に記す如き二三の傳説講談の類を以て略々其の一斑を髣髴するを得んか。

(二) 豊臣秀吉の行へる氣合術

賤ヶ嶽に於て柴田勝家の家臣佐久間玄蕃、單騎秀吉の陣中に迫りて鐵棒を振ひ將に秀吉を打殺さんとす、時に秀吉一喝して玄蕃を睨めば、玄蕃五體痺れて何事をも

爲す能はざりしといふ、これ秀吉が玄蕃の精神の虚を衝いてこゝに至らしめしものにて、之れ即ち氣合術の應用と見るを得べし。

(三) 伊藤一刀齋の行へる氣合術

一刀齋に神子上典膳と小野善鬼と呼ぶ二人の高弟あり、共に善く其の術に達せり、然れども一刀齋見る所ありて秘術を神子上典膳に譲れり、茲に於てか善鬼大に怒り、其の秘術の巻物を奪ふて逃げたるがつひに力及ばざるを知り、傍にありし大きな釜を己が身に伏せて其の中に隠る、時に典膳之れを追ふて釜を除かんとすれど、若し釜を除かば善鬼は典膳の足を拂はん事を知るが故に如何ともする能はず、時に一刀齋、氣合術を以て其釜の上より釜蓋共切らんことを教ゆ、典膳即ち教の如く大喝一唱と共に釜を切れば、善鬼は鐵の釜と共に眞二つとなりて死したりといふ。

(四) 富田勢源の行へる氣合術

『武備和訓』に武道の備は一に精神力に有ることを述べ、次の如き實話を記せり曰く。

勝負の道は勇をおさめて妄りに猛かるべからず、沈勇のものは必ず勝ち、浮勇の

ものは必ず負くべし、むかし富田勢源越前を出て美濃に行けるに、其の比、常陸の國鹿島の住人梅津といふ刀術の達人、濃州にありて刀法を教へ、我藝に誇り、自流の外に兵法はなしと稱し、勢源が来るを聞て仕合せん事を望む、勢源聞て兵法は凶賊を討つべきもの也、梅津と勢源雙方罪なし、又相憤て勝負すべきの謂れなし、素より我刀術未熟也、比ふべきものにあらずと云ふ、梅津聞て、勢源越前に於て口をば聞くと、我太刀先には勝つを得ざるを聞て斯く云ふならん、(中略) 兩方吉崎が宅に相望む、梅津は數十人の弟子を率ゐ、三尺六寸の木刀を袋に納めて之れを持つ、勢源は自ら一尺三寸の木刀を携ふ、梅津檢使へむかひて眞劍を以て勝負せん事を願ふ、檢使勢源にかくと告ぐ、勢源曰く相手はともかくも我は木刀を用ゆべしと云ふに、雙方木刀に究りぬ、梅津は大太刀、勢源は小太刀なるに、梅津が風情は偏に獅子奮迅の勢に異ならず、勢源睡猫の新一鼠を見たるが如く聲をかけた、勝負をなすに、梅津が首朱に成て血衣紋に流る、梅津奮て勢源を打つ、勢源笑ふて梅津が右の腕を強く打て、彼が木刀を打おとし、之れを踏み折る、時に梅津腰刀をぬかんとすれども叶はずして仆る、勢源勢ひ偏に竹を破るが如くなりしとか、

予が先輩土岐某、其の祖父土岐新右衛門能く其の勝負を見たりと語るを聞く、愚云評して曰くのこと勝負以前に勢源の勝つべき事明に知れたり、勢源は仁義の勇者梅津は暴虎の勇者なり、不仁を以て仁義に敵すいかんぞ勝つべけんや、梅津は仁義の勇無きにより、自ら狂して我慢心を起し勝負を望む、さるによつて本心動じて騒がしきにより、齊戒して梅津が勝負前三日三夜身を清め信心を爲すが故に斯くいふ心をおさめんとす、勢源は本心静かなるにより、勝負を苦勞にせず、唯天運に任せり、身體手足は一心の統ふる所、刀槍を以て撃つも刺すも皆一心のなせる處也、たとへば本心は三軍の將帥の如く手足は士卒の如し云々。

『武備和訓』は筑前の人片島和訓の著す所、和訓は享保年間の人にして武藝の達人たり、彼れ其書中に又曰く。

劍術はもとこれ小武小藝にして、假令刀劍の威武をおとさじとの教なれば、己が心の信仰、鍊磨の位によりて勝負は心に備はるべし、中略、武人こゝを以て悟れ、優劣は其人の鍛鍊にありて、流義にあらざれば勝負は其の人の心にありて、鍛鍊によるべからず、常に心を刀劍に置いて危き事を恐れ、威武を心に備ふるを劍術の本意と

せり、本心を以て藝をつかひて藝の爲につかはるべからず。

武藝の極意は心法を鍊ふに在りと云ひ、或は勝負は技藝鍛鍊にあらざして、心に在りといふを以て見れば、要するに諸般の武藝の極意とする所は唯だ此の精神の鍊磨にあり、而して其鍊磨の極敵の氣を呑み、其の虚を衝きて勝つなり、この精神の作用を起さしむる方法を稱して氣合術と云ふ。

(五) 兵馬が行ひし氣合術

冢田虎の『隨意録』に記して曰く、『伯兄兵馬、幼にして武技を好み、最も擊劍を嗜み、極寒酷暑、時として廢怠することなく、修練數十年、夙く其の術を致す、武夫多く從學す、六十に至る比ひ頗る其妙を見る、恭坐して動かさず、兩手を膝に置き、勇壯の少年をして其頭顱を鞭撻せしむるに、或は左或は右、鞭篋傍流して卒に能く撃つことあるなし、是れ精氣の爲す所か、抑々亦漸習の妙茲に至るか』と是れ即ち氣合術なり、兩手を膝に置いて坐して動かさるに、勇壯の少年が鞭を持って其の頭部を撲たんとするに鞭が自ら左右に流れて打つ能はざるは、實に妙術ならずや、其鞭に代ゆるに白刃を以てするも又た鞭と同様の結果を得るならんか、氣合術も此に達せば實に

面白し。

(六) 無念流の行ひし氣合術

劍道に無念流と云ふ派あり無念流に就き古書に記して曰く「擊劍家に無念流と稱する者有り予壯年の時親友其流を信ずる者有て其術を講ぜんことを勸む此の流は敢て攻撃の巧を用ゆるにあらず唯是れ一念に在る也と爲す乃ち其の道場に至りて其師に見え指南を受けんことを請ふ時に少壯の子弟多く其場に集つて其術を習ふ予之れを傍觀するに其の相擊刺するや瞑目睚眦し皆眼に在て念に在らざるに似たり予竊かに以て斯の如きは即ち眼流にして無念流に非ず」と眼と眼と見合ふは最もよき法にして心の働かんとする時は必ず眼に變化を來すを以て敵の實を知りて避け虚を知りて突くには最も妙法なり而し精神を眼にのみ集めて眼で眼を見ると云ふことにのみ力を入れて精神力を凝めるといふことを忘るれば眞の武藝とならざるは古書の説く處一々理を穿てり。

無念流の劍道は一念即ち精神の鍊磨を以て奥義とせる流義にして劍を以て戦ひて巧を競はんとするに非ずして其精神を鍊磨し氣を以て敵を仆さんとする點に於て氣合術なり聞く所に依れば此の流義は其の劍を取て構ゆる法は下段とし丹田即ち下腹部に劍の把を當てるを以て特色とすと云ふこれ丹田が空虚となりて敵の氣合にて壓せらるゝを防ぐ方法にして氣合術の修養法に叶へるものと云ふべきなり徳川時代の末には此法常に流行せりといふも此の點に特色ありし爲めならんか。

『嬉遊笑覽』と云ふ書に曰く「眞妙劍といふは此語の如く名有て形なき太刀なり言句にもまねにもならぬ鍊磨の所侍る諸事萬端の稽古至極の所あるべしざる程に無念流の兵法に大雲といふ太刀懸聲を咄々とかけゝる是れも至極の所にやと云へり禪意とかりに名づけたる所多しと見ゆ」と所謂る言句にも眞似にも出來ぬ鍊磨の所とは劍道の極意を指すものにして無念流の大雲と稱する太刀咄々と掛聲すと云ふは是れ即ち氣合術ならん。

以上記す所に依りて讀者はわが國の武術上にて行ふ所の氣合術なるものが如何なるものなるかの大要を知られしならん即ち武術の精妙極意は氣合なり此の氣合は能く鍛鍊されたる精神の力なり此の精神力は凝つて氣合術となりて戦はず

い、能く敵を仆し、斬らずして能く人を殺すに至るものなり、精神の力も亦た偉大ならずや。

(七) 小野治郎左衛門と柳生宗矩との氣合術の試合

柳生宗矩は禪學に依りて劍道を鍊磨し氣合術の蘊奥を得たと云ふ、彼の小野治郎左衛門と宗矩との試合に關して宗矩の取れる態度は最も能く其の消息を窺ひ得べし、之れに就き岡谷繁實君の『名將言行録』に記して曰く。

治郎左衛門兵法の譽れ世に并びなきと聞えし故、己も亦天下第一ならんと思ひ、諸國の兵法師たるものを蔑視せり、然るに、宗矩天下第一と沙汰ある故、治郎左衛門心易からず、我に上を越す兵法、凡そあるべきものとも思はず、然るに宗矩天下第一と沙汰あるこそ珍らしけれ、我等行て彼の太刀筋を見んとて、只一人宗矩方に來り、但州公兵法の聞え天下に著し、哀れ願くば御太刀筋、心見申度と申入れたり、宗矩聞て、尤ものことなり、通すべしとて、治郎左衛門案内に従ひ書院に通り、今や但州出もやせんと、心中に工夫を凝して待得たりしが、良久しても出でざりければ、退屈して見詰て居たり、宗矩も又治郎左衛門が世に勝れたることを知り居たる故、

治郎左衛門が坐したる後襖を開くるや否、木刀を以て撃ちけるに、治郎左衛門刀の柄にて請留め、倉忽にこそ存候へ、尋常に御勝負あれかしと申ける、其時宗矩、木刀を打捨て、足下が術誠に感ずるに堪へたり、天晴上手なり、手利なり、然れども心は甚だ下手なり、猶々修業あらば、誠の名人に至るべし、惜哉と言ければ、治郎左衛門柳生殿の御意見心得難く、如何なる故か、修業足り不申哉と不興の體に答たり、宗矩、足下は天下第一と思ひ、某に打勝つべき心なるべし、爰を以て心の下手なり、某と仕合して勝たる時、活して歸すべきや、某萬石の家來を以て、撃取らしむべし、然らば足下叶ふべきや、其時足下死して後、兵法の譽ありとも、何の詮かあらん、足下身を知らぬ心の下手なり、依て今我之を戒むる所なりと、理非分明に言ければ、治郎左衛門思はず閉口して歸りしとぞ。(余曰く原文には治郎左衛門に代ゆるに塚原卜傳と記しありたり、而し或人曰く、柳生と塚原とは同門にして、然も塚原は柳生の兄弟子なり、故に記事の真否疑はし、恐らくは小野治郎左衛門のことならんと、よりに余は卜傳を治郎左衛門と改訂せり否か。)

これ實に宗矩は戦はずして勝たるなり、勝負の極意は此の外に無かるべし、彼の修

養の程も此れに依りて大凡は知らるゝなり。

劍道の奥義を得たる人が先づ其の精神修養に重きを置きたるの例は凡そ以上の如し、尙其他伊藤一刀齋にせよ、上泉伊勢守にせよ、彼の時代に有名なる劍客は多く山間に居を避け、樹下石上に静坐して心膽の練習につとめたるものゝ如し、されば人若し氣合術を得んと欲せば先づ静坐し自己催眠の方法によりて精神を鍛錬せざるべからざるなり。

尙氣合術と武術との關係を明にせんがために、武藝、柔術、柔道、體術、居合術及び合氣術と氣合術との異同を最も簡短に一言せん。

(八) 武藝と氣合術との區別

武藝と言へば其意廣くして、劍術、柔術は申すに及ばず、馬術、弓術、槍術、砲術等、苟も武藝に屬するものは悉く包含す、氣合術は其武藝を行ふ根本たる精神鍛錬の法なり。

(九) 柔術と柔道との區別

柔術は古來より我國に行はれたる武術の一にして、身に寸鐵をも帶びずして、敵と取ぐみ敵を投げ敵の攻を防ぎ等する方法にして、主として我身を守り敵を倒すに

あり、柔道も一寸似て居るも柔道は敵を倒すと云ふことを主要の目的とせずして主眼は體育にありと云ふ。

(十) 體術と柔術との區別

體術は體育を主とせるものにして、體操は之に屬す、柔術は敵を投げて勝を制すと云ふを主とせり。

(十一) 居合術と氣合術との區別

居合術は長き刀を電光の如く手早く抜くを云ふものあり、彼の日比野雷風が身の丈よりも長き長刀を手と手とを手拭を以て縛して置き乍ら容易に抜くが如きは即ち居合術又は居合抜と云ふ、路傍に於て齒抜もよく其術をやるとは人の熟知する所なり、或人曰く單に長刀を抜く丈にては居合術とならず、抜きし刀を以て縦横に切きはらひ而して後其長刀を雷光の如く手早く鞘に收めて初めて居合術となる也、と何れに致せ居合術は氣合術の應用にて行はるゝものなることを知るべきなり。

(十二) 氣合術と合氣術との區別

六二
 氣合術を行ふときは肉體の力を主とし、精神力を従として其働を外部に發動するも、合氣術は之に反して精神力の力を主とし、肉體の力を従として人を制せんとするにあり。故に合氣は氣合よりも進めるものにして、合氣術に於て最も妙を極めたるものは精神力のみにて種々の奇現象を呈す、併し此の兩者の區別は確然と判明せざるも、先づ氣合の上達せし極點をして合氣と一般に云ふものゝ如し、よりて合氣は靈的の作用によりて人を制するものなり、氣合は心的の作用によりて人を制するものなりと區別する人あり。

之に依て見れば武術の奥義は單に筋骨の鍊磨にあらずして精神力の鍛鍊にあり、精神の鍛鍊は氣合術にあり、換言すれば武術の奥義は氣合術にあることを知るべきなり。

第五章 文明的護身用としての氣合術

(一) 氣合術は護身用として短銃に優る

文明の世に於ては護身用としては法律なるものありて、吾人の生命財産に危害を

六三
 加へんとするものあるときは充分に保護せられ安心なりと雖も、法律による國家の保護を俟つ違なき場合に於ては法律は正當防衛權なるものを吾人に與へり、其條件を具備せる場合に於ては吾人は人を殺すことも出来る、又其場合に於ては一人と雖も檢事同様の權利を得て危険なる現行の大犯罪者を捕縛する權利をも有す、斯様な場合に於て正當防衛權を行使するとき吾人は短銃を以て之を防がんか短銃は頗る危険にして若し誤て犯人以外の人に銃丸が當りしときは、却て吾人は過失傷害罪を犯せしものとして法律に觸るゝことゝなる、又之れが取扱の上、に於ても注意を怠ると飛んだことを惹き起す虞れあり、却て寧ろ所持せざるに勝るの嘆を發することなきにあらず。

之に反して氣合術なるものは頗る安全なり、先づ充分に心を静めて敵の虚を認め其虚に乗じて突き込み以て敵の精神を奪ひ肉體をして意の儘となすなり、故に過失傷害罪を犯すの虞なし、此術は身に寸鐵を帯びずして活殺自在の働をなす至極安全にして便利なり、殊に或る政治を談ずる場所等には短銃の如き凶器を帶携するを罰せらるゝ規定あり、短銃があつても携ふることが出来ず、然かのみならず身

は危険の地へ踏み入らざる可らずとの場合は如何之れ余が短銃よりも氣合術を稱揚する所以なり氣合術によりても短銃の如く電光石火的に突然人を倒すことも修養次第行はれ得るものなればなり。

(二) 氣合術は身に寸鐵を帯びずして活殺

自在の働をなす

此働を氣合術が有することは本書全篇に涉りて重複説述せる所にして既に讀者は之を了得せられしならん然れども又爰に重複を顧みず其要を述べん。歩行し居る者或は突然己に向て危害を加へんとする者に對して氣合術を施し、俄然其者をして木偶の如くになし、動く能はざらしむること、又は其者をして失神状態となし、死人同様の現象となすことを得、尙進んで全く絶息せしむることをも得、之れに反して何かの事情によりて絶息し、假死の状態にあるものに對して、突然氣合術を施すや、息吹き返し今の今迄死人同様の状態にありしもの、忽ち一變して、活潑活地に活動する人となすことをも得、之れ余が氣合術は身に寸鐵を帯びずして、活殺自在の働ありと絶叫する所以なり。

乍去氣合術を以て全く活殺自在になし得るは容易の業にあらず積年の修養を要す、又一寸位學びたる者にも如斯事が容易に行はるゝに至らば由々敷大事なり、若し其れを濫用せらるれば如何思ふて爰に至れば氣合術を修得せし者は氣合術を施さるゝも自らも氣合術を行ふて防禦し得る故安全なるも、之を知らざる者は氣合術者の意の儘に心身を左右せらるゝ事となるの虞あり、然れども之れは單に想像にて今の世に夫れ迄氣合術が進み居るものなきを以て安全なり、唯余は理想として修養次第其位置に達し得ることを確信するものなり、去り乍ら暗示感性の高き者に對しては初學者と雖も容易に不動金縛の状態となすことを得るものなり。

(三) 天下無敵の法としての氣合術

男が敷居を跨いで外へ出た以上は七難が身に附纏ふとは昔からいふ所なり、まことに世の中は何時までも物騒にて人の一生には何時如何様な災難が降りかゝるやも知れず、天の爲せる禍も、人の爲せる災も防ぎ難く豫知し難し、機を見るに敏にして人心操縦に自由を得たりと稱せらるゝ伊藤公も、ハルビンに於ける兇變は豫知する事能はず、かねて覺悟し居られたりとは云ひ條よもや斯る所にて兇手に倒

れんとは思はざりしなるべし、聖人も暗夜の礫は防ぎ難しと云へり、われらの前途は一寸先は闇の夜の如きものなり、劔が降るか、火が降るか、轉ばぬ先の杖は誰でも用意して居らねばならぬ。

氣合術は實に守り本尊也、轉ばぬ先の杖なり、勝伯の『氷川清話』に左の如き記事あり。

宮本武藏と云ふ人は大層な人物であつたらしい、劔法に熟達して居つた事は勿論の話だが、それのみならずこの人は仇があつたので初めは決して腰から兩刀を離さなかつたが一旦豁然として大悟する所があつて、人間は決して他人に殺されるものでないといふ信念が出来、それからといふものはまるで是迄の警戒を解いて、何時も丸腰で居たさうだ、處が或る時、武藏が例の通り無腰で庭前の涼臺に腰をかけて團扇であふぎながら餘念もなく夏の夜の景色に見とれて居たのを一人の弟子が先生を試めさうと思つて、いきなり短刀を抜いて涼臺の上に飛び上つた、武藏はアツといつて忽ち飛び退くと同時に、涼臺に敷いてあつた蓮の端をつかまいて引張つた、すると、そのはづみに弟子は涼臺から眞逆様に倒れ

落ちたのを見向きもせず平然として『何をするか』と一言いつたばかりであつたさうだ、人間もこの極意に達したら、どんな場合に出會うても大丈夫なものさ。

此の武藏の神速なる働は何に依りて爲すことを得られしが、氣合術を得たるものは心は明鏡止水の如く萬事萬端、一切の現象悉く吾眼に映ずるものなり、既に如何なることも其の真相が自己の心胸に映じ來るが故に如何なる事變をも察知し、以て其れを自由自在に防ぐことを得るなり、海舟先生は同書に武藏の此の動作を評して『所謂心を明鏡止水の如く磨き澄まして置きさいすれば、何時如何なる事變が襲ふて來ても其れに處する方法は自然と胸に浮んで來る、所謂物來りて順應するのだ、おれは昔から此の流義で以てその難所を切り抜けて來たのだ、それ故に人は平生の修業さへ積んで置けば、事に臨んで決して不覺を取るものでない。』と云へり、されば諸君は充分此の術を會得し置き、若し萬一災難が身に降りかゝりたるときは電光石火的に拂ひ除き安々と此世を送られんことを望む、從て此術を修得せる者は敵が八方に居るも其實天下に一人の敵もなきものゝ如く、其身は安全な

り、故に此術を以て天下無敵の法と云ふも穿ち附會の言として却くべきにあらざるべし。

第六章 金儲の秘訣としての氣合術

(一) 戦はずして勝ち勞せずして利ある法

此法は何人も願ふ所にして、社會の生活が面倒になればなる程、世の中が暮し難くなればなる程、人は飽食暖衣、逸居して安樂に世を送らんことを考へ、濡れ手で泡の掴み取りを實行せんと夢みるものあり、されば、若し斯る欲望が成就する處の戦はずして勝ち、勞せずして利益を獲得するといふが如き妙法存すと云は、今の世の生存競争に疲勞し果て、社會の戦争場裡に進まん氣力もなく、退かんにも途なく、進退維れ谷まれる人々は、此の天來の福音に狂喜して之れを聞かんと切望するなるべし、諸君が狂喜して聞かんとする不思議の妙法、妙術とは何ぞや、云ふ迄もなく氣合術是れなり、氣合術は相手方の精神の實を避けて虚を突くの術なり、故に苟も人を相手とする業務に之を應用すれば必ず相手方を心服せしめて自己の意の儘

に爲すことを得、從て金なり女なり地位なり名譽なりに満足することを得んか、氣合術の應用も又偉大ならずや、兵法家孫子曰く、百たび戦ふて百たび勝つは善の善なるものにあらざるなり、戦はずして人の兵を屈するは、善の善なるもの也と蓋し此の氣合術は孫子の所謂る戦はずして勝つ善の善なる法也、勞せずして世渡りの戦争に勝つ善の善たる處世法也、人若し此法を得て世に立たんか、其の人は必ず成功者たり、必勝者たらん、維新の最大元勳として又た善く謀り善く斷じ善く行ふ近世稀有の偉人として萬人の尊敬せる故勝海舟は之れを學んで應用せり、實に彼は此の氣合術を以て維新の國家多端の秋に處し、紛糾せる萬般の難事を解決し、死生の巷に出入して蟬集し來る萬難を能く排して大功を立てたり。

(二) 眞劍の勝負は氣力の強弱による

蓋し氣合術と云ひ、氣合術といふは、元是れ武術より出でたる名稱にして、日本武術の精華、獨特の妙技として誇る所なり、元來氣合なるものは昔時の武士には缺くべからざる條件にして昔の武士は斯道の習熟者に就き教授を受けしと云ふ、其の性質は暫々述べしが如く、敵手と相對して、將に闘はんとするに當り、我が全身に心を

配りて少しも間隙なきやうにし、敵に虚おれば之れに乗ずべく、敵若し隙なくば我れ之れを誘引して其の虚を生ぜしめ以て一撃の下に勝を制せんとする活潑敢爲の氣力にして、此氣力を充分養ふことが劍道武術の奥義とせられたり而して元龜天正より以降天下は武力の天下となりて世に戦亂絶ゆる間なく立身の道は文學才能にわらずして、武道勇力の技藝にあり、茲に於てか天下の民、青雲の志ある者は競ふて劍を磨き、武を練り、其の玄妙を發揮するに力めたり、然れども項羽の言ひし如く、劍は一人に對するの道なり、能く萬人に對すべきにわらず、人の力に限りあり、何人も兩者劍を取て闘争すれば、一方は如何に強く一方は如何に弱くとも、同じく是れ對等の人間たる以上は、蚤や虱を殺すが如く無難作に片附くると能はざるなり、況んや斯の如く人が競ふて武力を養ふ時代には、苟も劍を帯ぶる者は必ず相當の技を心得つゝあるに於てをや、茲に於てか眞劍の勝負は、力量と力量、技術と技術との争に止まらずして、氣力と氣力との争となれり、蓋し人一人の力量の相違は常陸山、梅ヶ谷と尋常の若者との相違も比較的、大なる相違を見るものにあらずと雖も、精神力の相違は其強弱の度は極めて遠く大なり、且つ如何に強くとも人の拳

にて鐵門は破壊し能はざるべし、而かも精神力の方は能く岩をも壊ける例あり、されば一たびは戦勝の唯一要素が武術の鍊磨なることを思ふて、精神作用の事を度外視し、只管技術のみに奔りたりし武士も、こゝに漸やく技術のみに拘泥する事の不可なるを自覺し、精神力の偉大なることを認識し、以前は外に向つて技を練りし者が今は内觀して自己の精神力の鍊磨を考ふるに至れり、斯くて氣合の必要は叫ばれ、氣合練習の結果は、戦はずして勝ち、打たずして敵を仆すを得、試に見よ、兩雄將さに闘はんとして而して未だ劍を交へず、然る時此の術を會得せる者大喝一聲、エイッと呼べば敵手は忽ち仆れて再び起つ氣力も無きに至るを、之れ實に玄妙不思議の現象にして殆んど魔術かと思はる、昔一刀流の元祖小野治郎左衛門が將軍の面前に於て清人の武藝者と闘ふや、此の術を以て一喝の下に相手を倒したるが、其餘りに電光石火的にして目にも止まらざる早業なりし爲め、却つて列座せる諸士の疑ふ所となり、何等の賞與をも受くる事を得ざりしとは古書に見えし所なり、精神と精神との交通の力大なれば大なる程、異妙なれば異妙なる程、外觀者の解し得ざる妙技を現はすものなり、彼の催眠術に於て被術者が術者より受くる精神的暗示

は被術者それ自身の精神には大なる影響を受くると雖も、他の人は其れを目に見る能はず耳に聞く能はざるが如く、氣合術を行ふ者と行はるゝ者以外の人は其れを知る能はず、左れば、彼の小野治郎左衛門が將軍の面前に於て實地に行ふて示してすら人々の疑ふ所となる程のものなれば、爰に其氣合術を説かんとするも筆にも口にも盡せざる微妙の處に秘訣あり、よりて彼の講釋師が見て來た様な嘘を吐くと同様の談論にあらざるかと疑はるゝ者あるやも知るべからずと雖も、そは此術の何たるを知らざる者の言のみ、精神力の偉大なるを知らざる人の心のみ、氣合術は眞に日本武術の源泉なり、之れを精神現象の上より見れば學理上殊に催眠學の理論上、當然行はれ得べき心的現象なり、而かも一面に於ては武道の奧義として所謂戰はずして勝ち得る妙技なり、他の一面に於ては膽力の養成、處世の妙法なり、死生の間に出入しても決して迷ふことなく、現今の如く生存競争の激烈なる世の中に立ちて必勝者たり得、勞少なくして利を多く獲得することを得る妙用あり、殊に商業上に於ては、此利用最も大なり、例へば客が品物を望むことも切なるときは價を高くし、客が品物を望まざるときは價を低くするを原則とす、然るに時には望ま

ざる品を高價に賣附けられたるは相手方の氣合術にかゝりしにて又自分の所有せる高價の品を二足三文に買ひ取らるゝ如きも又た氣合術にかゝりしなり、此例に鑑みて百般の事業に應用することを得果して然らば氣合術なるものは金儲の秘訣と云ふも強ち虚偽の言ならざるを知るべし。

○ (三) 心力の強き程大なる成功をなす

松島瑞巖寺の一世、雲悟禪師につき左の如き實例あり。

眞壁の平四郎といふ草履取流るゝ血汐に邊りへつもる白雪の赤く染りて見えたる様子、それにあつたる木履を取上げ、政宗の行きたる後ろ影を暫らく見て居りました、奥齒をバリ／＼と噛みしめ、平己れ政宗、如何に主従とはいひながら、傍若無人の此の有様、此の木履が温かき處より穿いて居たと思ふて、斯様なこと、いたしたに相違あるまい、寒中のことなれば聊かでも暖めて差上げたいと云ふ所から木履を懷中に入れ、暖めて置たるを知つてか知らでか、濫りに人の眉間を破るといふは、免し難き彼れが舉動……

彼の眞壁の平四郎は伊達政宗に木履を以て眉間を破られたるより、之れを遺恨に

思ひ、出家となりて天子の戒師ともなるべき身となれば、至尊に近づき奉りて政宗を讒し、以て彼れを滅ぼして恨を晴さんと叡山へ登れり。

一度叡山に至り暫らくの間叡山に於て修業をいたしました、サアどうしても佛の修業などは最も苦しいものでありますから、容易の事では修業が出来るものではありません。ソコで平四郎は木履を取出し少し撓んで來ると右の木履を見て怒りを増し、此の木履で頭を割られた、無念を晴らさんが爲めに此の修業をするんだと思つて修業を致して居りますうちに、精神一到何事不成、遂に充分佛學を修め、尙日本では修業が足らんといふ所から唐土へ渡り金山寺へ暫らくの間留まつて其處で十分佛學に達し、初めて其の名を改めて雲悟禪士となり、數十年を経て漸くに我國に歸朝を遂げ、恐れながら龍顏を拜し奉ることを許され、道德の聖名僧といはれるやうになりました。……(桃川實氏。水戸黃門漫遊記) 即ち知る彼が斯る大善知識となり得たるは情の緊張に依り意志の充實を來すてふ心理状態に基くものにして、以て斯る大成功を致したるなり、之に依て見るも心力が大なれば大なる程大なる成功を爲し、心力が弱ければ弱き程失敗を大ならし

ひることを覺るべし、此の平四郎出世の嘶は吾人が立志上のよき鑑なり、平四郎の精神は常に統一せられて氣合術上の精神状態と同様になり居たる結果斯く志を遂げたるなり。

(四) 圓轉滑脱の妙境

西郷南洲翁は曾て、金も入らぬ、名譽も入らぬ、命も惜しくない、と云ふ人間でなくては國家の大事を遂げる事が出来ない、と云へり、金も入らぬ、名譽も入らぬ、命も惜しくないといふ、一應聞けば世間誰も相手にせぬ始末に了へぬゴロッキもの、如く思はるれど然らず、西郷の意は人の小利、小欲、小執着を離れて、大欲、大利に向つて奮闘し得べき精神ある人を指せるものにして、凡そ成功のために最も厭ふべきは此小利、小欲に執着して小膽なる事なり、諺に云ふ、大望は大人を作ると、又曰く、大に得んとするものは大に散ずべしと、又更に云はずや、眞に生きんとせば、大死一番せよ、身を捨て、ハコを浮ひ瀬もかれと、即ち西郷が意は小利を捨て、小欲を離るれば眞に大欲望を遂げ得べしと云ふにあり、果せる哉、彼は一たび小欲望を捨て、欲氣なく朝敵賊臣の名を負ひたりと雖も、其の眞精神は遂に現はれて大英雄の名世に芳ば

し、彼れが此の如き言行を爲し得たるもの、抑も如何にして修養し得たるぞ、元より彼が天性の然らしむる所なりと雖も、世人の傳ふる所に依れば、彼は禪と陽明學に造詣深くして、彼の行動の多くは禪的動作に出づといふ、禪的動作とは何ぞや、近世禪學の大家釋宗演師これを説明して曰く。

七六

一、刀兩段といふことはまことに好い語ぢや、段は斷也で決斷を意味する、決斷は一種の禪的ハタラキで、たとへ禪を遣らぬまでも、此の麻の如く紛糾せる人事を一刀兩段的にテキバキ決斷することはこれ成功の秘訣である(淨瑠璃教談)

吾人が何等かの事件に遭遇して兩端を持って何れか是非か利か損かを迷ふ如き事ありとせんか、これに對して纏綿躊躇するなく、眞に是なるを是とし、非なるを非とし、眞に利の在る所を取て宗演禪師の云ふが如く、テキバキ之れを斷行するこれを禪的はたらきといふ、然らば此のはたらきを爲す用意や如何、勝海舟曰く、思慮の轉換が第一の要義であるのだ、餘裕を存して物事に執着せず、拘泥せず、證し來れば圓轉滑脱の妙境に入る事だと精神に餘裕を存し、物事に執着せず、拘泥せず、圓轉滑脱の妙境に入る、これ實に禪の極意にして成功の秘訣たるなり、而して吾

人は如何にして此の愉快なる境遇に入ることを得べきか、其の修養法は多々あらんも、余は氣合術に在ることを云はんとす、氣合術は外界の事物に誘惑されず、外界の事物を怖れざる術なり、故に外界の事物の真相を看取し得るなり、氣合の精神は如何なる事變に逢遇してもびくともせぬ勇敢なる精神なり、故に社會萬般の事に當りて自己の精神を錯亂されず、方針を誤まらず、如何なる事に當りてもテキバキと活動し得る精神を養ひ得るは此術に上越すものは無からんと信ず。

第七章 身心健康法としての氣合術

△(一) 禪と氣合術との關係

禪は古來より精神鍛鍊の妙法として一般に翫味され、殊に昔時の武士は多く之に依て心膽を鍛鍊せり、其の實例を云へば彼の楠正成が廣嚴和尚に參禪したりと云ひ、北條時宗が悟道を得たる人なりしと云ひ、近くは勝海舟、西郷南洲等、維新の元勳として知らるゝ人々が多く禪に歸依して安心立命を得たることは、普く世人の知る所なり、されば禪と武士道とは極めて密接なる關係あると共に、武士道の精華たる

七七

る此の氣合術は殆んど禪の極意たる悟道と或る程度に於て同一の者たるが如し、今此の兩者の異同及び其關係を述べれば。

(イ) 禪も氣合術も共に心の作用。禪は坐禪の方法によりて吾が精神を沈靜にし、元來、偉大なる力を具へ居れる精神の力を發揮せんとするにあり、而して氣合術も亦た此の精神を鍛鍊して精神力を強めて發揮するものなれば、共に心の法とも心の術ともいふべき者なり。

(ロ) 心的状態の一致。坐禪修行の結果は、心は明鏡止水の如しとて、吾人の精神は一點の曇りもなき鏡の如くに澄み、或は少しの波動もなく靜止せる水の如くに落付くなり、斯様に落付くに至りたる精神状態を名けて悟道といひ、悟道の境界に達せりといふ、若し此の精神状態に至る能はずして、心に何等かの煩惱あれば精神始終曇り勝ちにて風に吹かるゝ水の波立つが如く騒ぎ立つるが故に、事物の真相即ち眞理がそのまゝに心に映り來らずして間違へる見解を懷き、之れが爲めに煩悶苦惱す、これを迷ひといふ、鏡に一點の曇りなければ萬物其のまゝの姿を映し來るが如く心が悟道の境界に達すれば客觀界の萬事萬物悉く其の儘の姿を現し來りて

吾心に映ずるが故に眞理を見る事を得るなり、眞理を見る事が即ち悟りなり、殊に禪の中にも働禪とて働きつゝ、行ふ禪の如きは最もよく氣合術に酷似せり、然れども普通には氣合術を得る手段として禪を行ふものあり、而し純粹の禪と氣合術とは其の目的を異にす、禪は悟道を得るためとか健康を増進するためとかに行ふ、然るに氣合術は相手方の心身を左右せんとして行ふを本則とす、氣合術の極意は如何といふに、敵手の精神の虚實を洞察し、其の實を避けて、其の虚を衝く、術なれば、敵手の精神の虚實が明らか様に吾が眼に映せざるべからず、然るに騒げる水には波立ち、曇れる鏡には物の映らぬ如く、吾が精神が騒ぎ立ち居れば敵手の心的状態は明らかに知るを得ずして、虚を實と思ひ、實を虚と思ふて到底何等の術も施され得べきものにあらず、されば氣合術を施す者の精神は、禪の悟道の境界の如く心は明鏡止水の状態にあらずるべからず、此の點に於て禪と氣合術とは一致する所なり。

(ハ) 手段の一致。禪に於ける禪定即ち坐禪の状態は、其の性質自己催眠の状態中、或る程度と同じ状態にあり、自己催眠の状態とは即ち何等の自發的活動なき無念無想の状態をいふ、而して氣合術も亦た無念無想の精神状態にあざれば其の術

は行はれず、尙且つ其の術を施さず、方法に就ては、禪も催眠術も氣合術も殆んど同じ、禪宗に於て相手の煩惱を消失して禪定に達せしめんとするには棒喝とて相手の不意に乗じて棒にて打ち或は一喝して膽を奪ふ等の事を爲す、催眠術に於ても威喝法と稱して被術者に向ひ叱責を加へて暗示を奏功せしむる手段とすることあり、氣合術に於て敵手が我れに向ひ來るや、其の精神に空虚ある點を察して「エイッ」と一喝し、以て敵手の身體を痺れしめ寸歩も進むことを得ざらしむ、又退かんにも我身は大地より生へし大木の如く、如何ともする事能はざるに至らしむ、彼れは棒喝を以てし、これは「エイッ」と云ふ一聲を以てす、其方法殆んど同一なりと云ふべし。

以上の如く氣合術は其の根本に於て禪と一致し、而して禪、氣合術、催眠術の三者は互に關係す、故に禪は氣合術と催眠術とを兼ねるとすれば、催眠術も亦た禪と氣合術とを兼ね、而して氣合術も亦た他の二者を兼ね、されば禪が精神修養の妙術なれば、氣合術も催眠術も共に精神修養の妙術たり、催眠術が人の精神現象を自由にすることを得る能力ある如く、氣合術も禪も共に其の能力を具ふ、此の故に人若し

氣合術を以て處世萬般に應用すれば、何事も成功し得るに相違なし、福來友吉氏は其の「催眠心理學」に記して曰く、氣合術は暗示中の骨子なり、若し人にして此の術の妙用自在を得るに至らんか、如何なる人に對しても暗示を行ひ得るに至らんこと必せりと、斯の如く斯術は催眠術に應用さる、故に氣合術も亦た催眠術に依りて其の理を究め實行の方法を得るに至るべきなり。

(二) 目的の差。余の友人岩谷一心君(前衆議員議員岩谷松平氏令息)曰く「禪は氣合術に入るの第一法にして其の目的に於て兩者は大に異なる、禪は精神を一致する方法にして活動の方法を示さず、氣合は心を一致したる後活殺自在の法を教ゆるにあり、然れども氣合術に階級あり、初めは心を一致する方法にして心は次第に肉體を離れて終には自由自在に靈的活動をするを目的とす、催眠術は活動を主とせるが故に禪と異り、氣合術と目的を一にすと雖も、催眠術は肉體の作用を主として説明するも進んで靈的活動を説くに至りて氣合術と全然一致す」と。禪は靈肉の健康法として近來世人の稱揚する所なり、其禪と氣合術とは殆んど根據を同らす、之によりて氣合術は精神の修養法としても重要な位置を占め居ること明な

り。

(二) 氣合術を應用せし精神修養法

學徳一世に名高き文學博士前田慧雲師曾て其の門生に語りて曰く。

若い時分に京都の或る友達が私に斯ういふ事を言ふた、人の一生は彼の雜沓して居る誓願寺通りを通つて居るやうなもので、押すな〜と云つて居るうちに知らぬ間に三條通りへ出て了ふと、随分氣樂な事をいふ男だと思ふたが、自分が人生五十年を通り越してナル程そうだと感じたのである。まことに此の世の世渡りの窮屈さは、押しつ押しされつして居る誓願寺通り其儘でヤレ金だ、名譽だ、學問だ、修養だといふのが押すな〜の叫び聲である、其の叫び聲を續けて居るうちに、いつかは三條通りの何かの身分になつてしまふ、考へて見れば譯の無い話だ、しかし、こゝに一つ若い人には思案が入るのである、ドンナに押しつ押しされつしてゐても、其の本人が三條通りへ出やうといふ目的が無くては反對に四條通の方へ出て、了ふかも知れない、押すな、押すなといふうちに、何等か自分に目的が無くては人間は思ふ所に達することの出来るものでない、押されながらも

三條通へ出て往つたといふのは、心の底に目的があるといふ事を忘れぬからである、又た其の足許に油斷があつてはならぬ、足許に油斷があつては人の足を踏むか、踏まれるか、或は押し出されて何處かへ轉げ込んで了ふ、少く身體は前へ俯いてもよいが足許を確乎するやうに、世渡り方は種々あつても、踐むべき地盤に堅實なる意志を樹立せねばならぬ、人の押すのを苦にして身をモガイても駄目なやうに浮世の苦しさに精神を狂はしてはイケナイ、前から押され、ば時には少しは後へ寄るも好い、後から押されて前へ進み、押し押されつしてゐる間に目的が定まつて居り、志さへ堅固なれば、何時かは往く處まで行けるものだ、出世が早い遅いのと悲んだりする人は、自分の押されてゐるのを忘れて遙か向ふばかり見て居る人である、ソナニおせるには及ばない、自分の後には未だ澤山の人であるではないか、向ふを見る隙があれば、足許を用心せよ、さうすれば、何時かは目的の所に往かれるものである。(家庭布教雜誌)

と、面白き人生觀と云ふべきなり、博士が人の押すのを苦にするな、押すな〜と云ひながら人の押すに任せよといふは、之れ氣合術にいふ強ひて勝たんといふ精神

を離れよといふに同じ、前から押さるれば後へ下り、後から押さるれば前へ進めよといふも、これ確かに敵の實を避け虚を衝けといふ氣合術の極意と同じからずや、向ふを見る隙があれば足許に用心せよといふは敵の刀に氣を付けなといふ劍道の誠めに同じ、殊に博士の押されながらも三條通りへ出たいといふ目的さへあれば何時かは出られるが如く、堅實なる目的さへあれば何時かは吾思ふ所に達されん、と教ふる所は氣合術に於て氣を一所に止めず自由自在に放任しながらも丹田に心を必ず置くことを忘るゝ勿れと教ふると同一理なり、要するに博士の云ふ所は確かに眞理にして極めて穩健なる處世觀なり、而かもこれがわが氣合術の教ふる所と符合すとせば此の術を得たるものは極めて安全に一生を送ることが出来る以所なり。

第八章 膽力養成法としての氣合術

(一) 膽力と肉體との關係

健全なる精神は健全なる身體に宿るとは聞き慣れたる言葉ながら其言葉を聞く

毎に何となく眞理なるを合點す、されば吾國の教育家は國民の心力及び體力増進の爲めに學校教育の主眼として種々の運動法を教ふるが、現今學校に於て教ふる運動法は何れも多くは遊戯に類せしものばかりにて眞個に身體を練り、精神を鍛へるといふ如き效能在りや否やは聊か疑問なりと余は思ふ、體力増進法の著者小畑幾次郎氏曰く『遊戯はツトマて呼吸すべき運動にして、武術の鍛練はウムと耐ふべき運動なり、或る事に向つて突進するの精神世の磐根、錯節に處するの精神、何を以てか遊戯より得んや』と一理ある言葉なり、膽力養成法としては日本の武道は實に重要な地位を占むと信ず、其の武道中の精華たる氣合術は最もよき膽力養成法の秘訣なりと思ふ、健全なる精神が健全なる身體に宿るとならば、此の健全なる精神活力の根本たる氣合術が健全なる身體を養ふ力あり、健全なる身體に膽力を充實せる精神が宿ることは言はずして明かなり。

相撲界の重鎮電權太夫曾て語りて曰く。
相撲で怪我をするといふのは時にアツト思ふからなのでござりませぬ、このアツトと思ふことが最も悪いので、ムンと斯う力んで耐へると怪我など少しも致しませぬ

せんのを、アツと思ふが爲めに力が抜けて負傷しますのです、力士が只今千人程居りますが、是等があの通りに稽古したり、土俵の晴れの勝負には多少の無理をしたり致しても負傷するといふことは滅多にありませぬ。(體力増進法)
と云へり、之れ即ち精神の虚に乗じられたる故、怪我をするなり、換言すれば氣合術にかゝりたるなり、よつて膽力を養成して常に精神を冷靜に持つことが勝利を得る根元なり、而して常陸山、梅ヶ谷の身體に力の充滿したる所へ、上から錐が落ち來つて命中するも、其の錐は身體を指すこと能はずして撥ね返り、彈き返さるゝと云ふこれ何故なるかと云へば、ウント力を籠めて居る時は緊張作用によりて肉體は堅くなり、大概の物は撥ね返す程の力はあるものなり、精神力の如何によりて如何に肉體に變化あるかを知るべきなり、故に心の持ち方一つにて病身が健康體ともなり、健康體が病身ともなるとある理を知るべきなり。

(二) 膽力養成法の秘訣

氣合術の練習によりて、躰下丹田を練り精神を不動の境に置けば、從て膽力増大し泰山前に崩れ怒濤後を襲ふも、毫も動ぜざる底の膽力家となるべし、眞に氣合術は

力養成の秘訣として稱揚すべきものなり、其の練習法は前の氣合術を行ふ極意と題したる章中に詳述せるを以て爰に又之を贅せず。

(三) 柳生宗矩が澤庵和尚に學びし練膽法

昔柳生家が將軍家の師範役として名聲一世に高く、其技も亦天下に冠たりしことは偶然にあらざり、初代但馬守宗矩は最も此の心膽の練習に心掛け屢々彼の禪僧澤庵の門に出入して其教を受けたり、今日に傳りたる澤庵の著書に、不動心智妙録と稱するものあり、こは澤庵が宗矩の間に答へて禪と武藝との關係を説き、禪の見地より武藝の奥義を説きたるものなり、頗る面白ければ左に其の一二を録さん。
止ると申すは、何事に付ても其事に心を止むるに候、貴殿の兵法にて申し候は、向ふより切る太刀を一目見て、其儘にそこにて合はんと思へば、向ふの太刀に其儘に心が止まりて、手前の働が抜け候て向ふの人に斫られ候、是れを止むると申し候、打太刀を見る事は見れども、そこに心を止めず、向ふの打太刀に拍子合はせて、打たうとも思はず、思案分別を殘さず、振り上ぐる太刀を見るや、否や心を卒度止めず、其まゝ付入て向ふの太刀にとりつかば、我をきらんとする刀を我が方へ

いぎ取りて、却て向ふを切る刀となるべく候。禪宗には、是れを還把鎗頭倒刺人來と申し候。鎗はホコにて候。人の持ちたる刀を我が方へもぎ取りて還て相手を切ると申す心に候。貴殿の無刀と仰せられ候事にて候。向ふから打つとも、吾から討つとも、打つ人にも、打つ太刀にも、程にも、拍子にも、卒度も、心を止めれば、手前の働は皆、抜け候て、人にさられ可申候。我身を置けば、敵に心をとられ候間、我身にも心を置くべからず、我身に心を引きしめて置くも、初心の間習入り候時の事なるべし。太刀に心をとられ候拍子合に心を置けば、拍子合に心をとられ候これ皆心のとまりて、手前拔殻になり申候。

と此説は實に面白し心を或る一點に集むれば他の點に空虚を生じて終に敵の乗ずる所となりて倒れざるを得ずとの教訓なり。氣合術の奥義は茲にあり又同書に曰く。

諸佛不動智と申す事、不動はうごかずといふ文字にて候。智は智慧の智にて候。不動と申し候ても、石か木かのやうに無性なる義理にてはなく候。向ふへも左へも右へも十方八方へ心は動きたきやうに動きながら、卒度も止らぬ心を不動智と

申候。不動明王と申して右の手に劍を握り左の手に繩を取りて、齒を喰出し目を怒らし、佛法を妨げん惡魔を降伏せんと突立ち居られ候。姿もあの様なるが何國の世界にもかくれて居られ候にてはなし。容をば佛法守護の形につくり、體をばこの不動智を體として衆生に見せたるにて候。一向の凡夫は、恐れをなして佛法に仇をなさじと思ひ、悟に近き人々は不動智を表したる所を悟りて一切の迷を晴らし、即ち不動智を明めて此身即ち不動明王程に此心法をよく執行したる人は惡魔もいやまさぬぞと知らせんための不動明王にて候。然れば不動明王と申すも一心の動かぬ所を申し候。又身を動轉せぬことにて候。動轉せぬとは、物事に留まらぬ事にて候。物一見見て其心を止めぬを不動と申候。なぜなれば、物に心が止まり候へば、いろ／＼の分別が胸に浮び候間、胸のうちいろ／＼に動き候。止れば止る心は動きて動かぬにて候。

譬へば十人して一太刀づゝ我へ太刀を入るゝも一太刀を受け流して、跡に心を止めず跡を捨て跡を拾ひ候は、十人ながらへ働を缺かさぬにて候。十人十度心は働けども一人にも心を止めずば次第に取合ひて働は缺け申間敷候。若し又一

人の前に心が止まり候は、一人の打太刀をば受流すべけれど、二人めの時は手前の働抜け可申候、假令一本の木に向ふて、其内の赤き葉一つを見て居れば、残りの葉は見えぬなり、葉ひとつに目をかけずして、一本の木に何心もなく打ち向ひ候へば、數多の葉残らず目に見え候、葉一つに心をとられ候は、残りの葉は見えず、一つに心を止めねば、百千の葉みな見え申し候、是を得心したる人は、即ち千手千眼の觀音にて候。

初心は身に持つ太刀の構も何も知らぬものなれば、身に心の止る事もなし、人が打ち候へば、つひ取合ふばかりにて、何の心もなし、然る處にさまゝの事を習ひ、身に持つ太刀の取り様心の置所いろゝの事を教へぬれば、色々の處に心が止り、人を打たんとすれば、兎や角して殊の外不自由なる事、日を重ね、年月をかさね、稽古をするに従ひ、身の構も太刀の取り様も、皆心のなくなりて、唯最初の何も知らぬ習はぬ時の心になる也。

彼の劍道武藝の極意が心膽の練習にあるを云ひて、心を止めるな、か、れとか、或は心は動きたきやうに動きながら動かさずと云ふが如きは、これ余が前述せる處の精神

を明鏡止水の情態となし置き、何物に向て働く場合には、全身の心力を皆其事にのみ傾注し、以て偉大の働をなさんとするなり、殊に一局部にのみ注意して全般に注意を怠るべからざるを戒めたる點は、最もよし、彼の圍碁を闘はす場合に於ても然り、盤面全體に目を配つて注意すれば、勝利を得べきも、若し一局部にのみ注意して他を顧みざると一寸とでもあらんか、忽ち飛んだ失敗を招くとあり、實に武術上に於ける戦も圍碁の盤面上に於ける戦と其理に於て異なる所なきを知るべし。

(四) 宮本武藏が長春和尚に學びし練膽法

宮本武藏の實傳記に依れば、彼は、極めて精神の鍛練に苦心せしものにて、「劍術は相手の眉間を打たずば勝とならず」と云ひて、常に敵手の眉間を打ちたりといふ、肥後國小倉に彼の碑あり、其の碑文は、禪僧長春の選する所、長春は平素武藏と極めて仲好き間柄にして、武藏は和尚に就き、禪學を修め、心膽を練りたると云ふを以て見れば、彼が禪學に造詣せること深きを知るべきなり、而して彼は常に靈巖洞に坐禪して、精神を練り、膽力を固めたりと云ふ、思ふに武藏が能く氣合術に長じたるは、恐らくは斯くして、以て練膽されたる結果ならん。

第九章 精神療法の眞髓としての氣合術

(一) 精神療法の根據と氣合術

精神療法の根據は精神は肉體を支配す、故に精神が健全なれば肉體は從て健全となる精神の持ち様によりて肉體は如何様にも變化する、此の事は人のよく知る如く催眠術によりて客觀的に證明することを得、例へば催眠術士が被術者に向つて、汝の手は動かぬと云へば如何に動かさずとも動かさず、肉體上には何等の異状なきに動かざるは何故なるか、精神に於て動かぬと確信せしが故に確信通りに肉體が變りしなり、此理を應用して精神療法は行はる、即ち病人の心をして己は病人でない病氣は治せりとの觀念を注入し其の觀念をして確く信ぜしむれば、全く病氣は治し、健康の人となるなり、換言すれば精神療法の要は心機の一轉にあり、心機を一轉せしむる方法として氣合術は最も妙なり、病人に向て「エイッ」と大喝一聲をなし、以て病人の精神を一轉せしむるなり、此理によりて近來氣合術を以て病人を治することを業とせるものあり、然し其等の人の中には全く眞の氣合術を知らず

して唯口先にて「エイッ」と叫びて氣合の眞似をするに過ぎざるものあり、然し皆相當に治病の效を奏しつゝ、あるは心機轉換の理によるなり、故に眞に氣合術の奧義を極めて後に精神療法に従事せば偉大の效を奏するや蓋し疑なし。

(二) 精神病を治したる氣合術

徳川光國に就いて講談師は面白き事を爲せり、曰く、光國卿が西山に隠居して百姓と身を窶して諸國を巡回する途次、某所の宿屋に一泊せし所、其の宿屋の娘に狐が憑きて困り居れり、光國これを治しやらんとて夜中娘の枕邊に立ち、我は從三位中納言徳川光國なるぞ、落ちよと云ひながら「エイッ」と一喝すれば狐は落ちて娘は全快したりと、此の事が事實なりや否やは知らざるも斯る方法は全く行ひ得るものにて、これ光國が氣合術を以て狐憑を治したるものにして、此の場合我は從三位中納言光國なるぞと叫びしは氣合術を行ふに必要な自信力を強め、相手を威喝して彼の精神に恐怖及び尊敬の念を生ぜしめ而して後「エイッ」と一喝して其の精神を轉換せしめたるなり、斯る患者を斯様なる方法を以て治療し得べき理論に至つては催眠術によりて此の種の病人を治療し得ると同様の現象にて心機の轉換に

第十章 催眠術の極意としての氣合術

(一) 催眠暗示現象と氣合術との關係

余が前數章に於て屢々述べたるが如く、氣合術は敵手の精神の虚實を察し、其の實を避けて虚を衝くの法なり、而して其の實行の方法は如何といふに、敵と相對して今や勝負を行はんとするに當り、術者は姿勢を正ふし丹田(下腹)に精神を止め吸氣を深く吸ひて丹田より力を凝めて出したる大喝即ち「エイッ」と一聲叫べば、此の叫び聲が敵の心膽に徹し、爲めに五體をして意の儘となすなり、其の「エイッ」と叫びし一聲が單に口先にて大聲を出すのみにては氣合にならず、從て敵の失笑を買ふに過ぎざるべし、又た「エイッ」の一聲を叫ぶと共に術者は右手に刀印即ち人指と中指とを伸ばし他の三指を堅く握り高く頭上に擧げて置き力を凝めて切り下すなり、然ると「エイッ」の一聲が自然に力ある語となりて敵をして感應せしむ、而して敵の呼吸を圖り敵が呼氣する折を見謀りて「エイッ」と叫び以て敵を意の儘となすなり、

氣合術獨習法

催眠術の極意としての氣合術

敵の精神の虚實を察し、其の實を避けて虚を衝くとは、如何なることを云ふか、又た術者が丹田に力を籠めて「エイッ」と一喝すれば、何故に敵手の五體が意の如くなるか、此の理を知らんとするには催眠心理學上より見れば容易に其理を知るとを得、催眠術上より見れば、此の一喝に依りて敵の身體を左右するとは催眠術の主腦たる暗示感應の理に依るものにして、術者氣合を掛ける人は暗示の投與者にして敵(氣合を掛けらるゝ者)は暗示を受くる者なり。

催眠學上に云ふ暗示とは何ぞや、極めて通俗的の意味で云へば、人の精神に何等かの刺激を與ふれば、精神は其れが爲めに何等かの變化を起して活動を爲す、此刺激が即ち暗示なり、例を以て言へば、何人にも突然其の名を呼ばれたる時には、必ず其の呼聲の起りたる方向に向つて振り向くを常とす、此の場合に於て其の名を呼ぶことが刺激即ち暗示にして振り向くことが其の暗示に感じたるなり、又た何人も夜中突然火事だ火事だと呼ぶるときは驚き立つならん、これ火事だと呼べしは暗示にして、其の暗示に感じたる結果は驚きて立ちたるなり、斯様に何人も暗示に感ずる性質を有せり、而して前に名を呼ばれたる時には、纔かに振り向きたる

に過ぎざりしに、夜半突然、火事だとの叫び聲を聞きたる時は我れ知らず立ちたるは何故ぞ、これ即ち暗示の力の強弱に依るものにして後の暗示が前の暗示よりも強かりしが爲めなり、斯く暗示が強ければ強き程、大なる結果を呈し、又た暗示を受ける者の精神状態が無想となり居れば居る程、暗示は好結果を奏するものなり。さて、こゝに吾人がボンヤリと立つて居る、其後より突然大聲にて驚かすものありたりとせよ、吾人は覺えず飛上りて倒れんばかりに打驚き、胸の鼓動は早鐘を打つが如く下腹部はペツタリと少さくなり、眼は圓くなる如き生理作用を起す、若し其の驚の度が強ければ失神し氣絶す、これ即ち非常に大なる暗示に感應したるものにして、斯く失神する程に打驚きたるは其の暗示がよく效を奏したる結果なり、氣合術の應用は又此の理に外ならざる也。

伊藤一刀齋が神子上典膳に教へたる武藝の奥義は一寸面白きを以て次に引用せむ。

是より神子上典膳は伊藤一刀齋の許に足を留め、日々薪水の業を取り、或は老人の肩腰をたゞき、其の間合に武藝の奥義を尋ねると、否々武藝の奥義は一朝一夕

には知れ難し、自然會得を致す場合もあらん、唯怠らぬを以て好しと致す、手を以て教へずと雖も、凡て武藝の心持は人を打つべきにあらず、打たれざることを專一なり、然れば油断を大敵と云ふ、今より汝油断を致さば、予必ず打たん、努々油断すべからず、典膳に油断あれば一刀齋は手當り次第にビシリ、典膳れ入りました、兼々申附けて置いたではないか、何故油断致す、師弟の間柄なれば生命に及ばず、萬一敵であつたらば汝が命は立ち所に失はれん、以來はキツト心を附けよ、典膳是より更に油断を致さず一刀齋は或は典膳が水を汲み、谷間より上る所を待ち受けてビシリ、典膳れ入りました、決して油断をするな、或は便所に入り用辨して出でんとする所をビシリ、典膳れ入りました、或は寐て居る所をビシリ、典膳先生寐て居る所を御打ちなさるとは少々御手荒いように考へます、黙れ汝を打たんといふ敵なりとせば、何ぞ猶豫をいたさん、是が武藝の極意だ、寐たからと申して心を極めて居らば、人の忍んで來るに目の覺めんと云ふことはない、典膳れ入りました、さあ此うなると寢食も安心しては出來ぬ、或る一日食事を致して居る所へ一刀齋進み寄る、扱はと典膳覺悟致して居る所をビシリひらりと體をかはし

奥先生如何に「是は追々の上達、夫れでこそ我が教へ甲斐もある其の心得を忘れるな」奥御褒めに預り恐れ入り候と平伏する所をビシリ、奥參つた田邊大龍氏講演寛永御前試合

斯様に敵手の油断を察して一撃を加へば如何なる名手も防ぎ難かるべし、これを虚を衝くといふなり、而して伊藤一刀齋が能く典膳の油断を洞察し、若し典膳に油断なき時は之れを褒めて氣鋒を轉せしめたるは即ち實を避けて虚を誘引したるなり、彼の催眠法として行ふ所の威喝法は、相手が術者を信任せず、或は雑念に支配せられて催眠状態に陥り難き者に對して術者は突然大喝一聲以て叱り飛ばし催眠状態にならしむるなり、例へば爰に神經衰弱の患者あり、今勉強せざればならざる重要な年輩なるに拘はらず、神經衰弱の爲めに空しく嘆聲を發して一生の方針を誤ると氣支ふ、然るに催眠術を術者行ひ初めると直に批評的精神が出來て己は催眠するか否か疑はしひとか、病氣が治するか否か疑はしひなど愚考を廻らす者に向つては、術者は汝の如き余の云ふ事を眞面目に聽かざるものは、病身にて一生を送れ、余の云ふ通りに心を持たざる者は余は施術せず、不具にて一生を送れ、と

大喝すると其の大喝の爲めに、其れでは困ると悔悟する一刹那に忽然深き催眠状態となるものなり、氣合術も之れと同じく、敵に若し虚あれば直に乗じて一喝し以て其れを仆し、敵に若し虚なくんば虚を生ぜしむるやうに誘引する其の手段も方法も原理も同一なり、然るに斯る妙術を心得居る術者、即ち武術の達人にありては、自ら威嚴具はりて其の構へも尋常ならず、されば相手は立合ふや先づ其の術者に威壓され、敵如何なる術を施すかと心静かならざるは免れ難きことならん、凡て斯く恐怖を懷めて外物に注意する場合には、生理上當然起り來る結果として神經は非常に興奮し、臉は擴張され、頸は前に突き出で、腦は充血して、眼は血走り、反對に下腹部は空虚になりて俗に云ふ「上づつて了ふ」といふ状態となる、實に術者に取つて最も好都合の生理的状态なり、彼の田舎者が繁華なる東京市内を見物する時は四方八面の事物に氣を奪はれて精神落付かざるがために自轉車と衝突し、胸摸に懷中物を奪はるゝを知らざると同じく、術者の變幻極りなき妙術に刺激され、心は全く術者の爲すまゝに支配さるゝに至る、虚を見るに敏なる術者は突然「エイッ」と大喝するや否や心顛倒す、即ち下腹部は空虚となり居る虚を見計らひ鋭き刺

激を突然與へらるゝにより急劇なる腦貧血を起して身體の一部或は全部が麻痺することあり、或は筋肉の感覺を失ふて覺えず刀を取り落し、或は地上に仆れ伏すことあり、若し斯様な劇しき結果を呈せずとも、必ず精神の活力を鈍らし元氣を失ひ、氣鋒を挫折して再び戦ふ勇氣なきに至らしむ、『武學拾粹』の著者葛野葛山は其の書中に斯る場合の狀態を記して最も詳細を極む、今其の書中の一節を左に記さん。

心氣形無し、形無き故體中所として有らざることなし、鎮まるときは體中に充實し、動くとき上りて下虛也、心鎮まるときは正しくして慾寡く邪正是非の分別出来る也、氣鎮まるときは強くして物に恐るゝとなし、心動くときは慾情盛んにして物覺疎く、氣動くときは體虛にして物に恐るゝこと深く事に臨み顛倒する者也、心氣一の如くにして別也、先づ體を靜にして妄想の念少きときは氣下に集まる、氣下に集まれば心靜なる者なり、隨分心氣を靜むる心掛をすへし、勇怯才不才皆此處より生ず、此事常になれば鎮まる心附かざれども靜かなるもの也、譬へは歩行する者の如し、達者なるは腰より下のみ動き、腰より上は動くことなく體豊

にて形疲れず、物に中り躓きても倒るゝに至らず、不達者なるは氣上釣り、頭と釣合い歩行き、臆附を揉み身體を強く動かす故、忽ち胸塞かり、息喘ぎ足疲れ、僅の物に躓けば忽ち倒るゝ者也、是れ氣が上にのみ計り舛り、下軽くして定まらず、胸の上にて呼吸し氣活動せざる故也、鎧武者は上づりて少しの物にも躓き倒るゝと言ひ傳へしも同じ事也、他無し、唯活氣と死氣との差別に由るのみ。

と、次に勇と強とを區別し勇氣を養ふことを論じて曰く。

是れ又別事に非ず、上文の如く心氣を靜むる時は勇氣生ずる也、今の人、勇と強とを混じ覺えたる者多し、勇は氣にあり、強は筋骨にあり、別なるもの也、勇は決斷を主に、平日猶豫狐疑のみ多く兒女子の如き人武を職にして死生を決斷すること成らざる者也、是等の人は尙更勉め勵んで勇氣を養ふべし。

と先づ勇氣の必要を論じ更に又た勇氣修養の方法を説いて曰く。

勇氣容易に養はるゝ者にあらず、心氣を修整し、道理を會得すれば事に臨み恐るゝ事なきゆえ是より上なるはなし。

彼は勇氣の源泉は心氣の修整と道理の會得とによるとせり、眞に然り、道理に合し

たるとは、天地に恥づることなく、正々堂々と進むことを得、従て勇氣を生ずるや明なり、心氣の修整とは字の如く、心氣を修め整のへるなり、換言すれば、精神を沈めて精神の働を秩序よくするなり、總て昔時の氣合術にありては、心氣と云ふて、心と氣とは別物なりとせり、而して氣合術を行ふときは、心は丹田に修め、氣は全身に配るを秘訣とせり、心とは何か、氣とは何か、言語の上に顯はすことは困難なるも、此の二者の區別し得らるゝことは自ら我身の心と氣とに注意すれば、首肯せらるゝならむ。

心理學上より此心と氣とを見れば、何物なるか、余思ふに、心とは精神のことにて、氣とは識のことならん、識とは現在の心現在の經驗を云ふものなるも、普通に云ふ心とは識の積み重つたもの即ち生れてより今日に至るまで、苟も己の考へと云ふものは、悉く心なり、尙詳しくは心理學書を参照あれ、要するに氣合術は催眠術に於て、被術者を無念無想の状態となし、置き其状態にある被術者に向つて、術者が強烈なる精神力を莊嚴なる手振と言語とによりて發動し、以て感應せしむると其の理一なりと信ず。

(二) 催眠術の眞髓としての氣合術

氣合術の一斑を修めたる者が、催眠術士として被術者に對するときは、容易に被術者をして催眠せしむることを得、例へば術士は被術者をして椅子に凭らすなり、横臥せしむるなりして置き、被術者に術者の眼を見詰めせしめ置き、被術者の精神の實去りて、虚となりしとき、突然「エイッ」と大喝すると、忽然深き催眠状態となるものなり、此の法を準用して鳥獸をも催眠せしむることを得、熊代氏が氣合術と催眠術との關係につき述べたる所を重複の嫌あるも、次に紹介せむ。

「氣合は實に催眠法の眞髓である、極意である、而して呼吸は催眠法の生命である、同時に氣合の原動である、故に氣合と呼吸相待つて會得せなければならぬ。

何をか催眠の氣合といふ、之を説明するは、蓋し容易でない、併しながら術者の自覺に依つて之を會得することが出来る、蓋し催眠氣合といふものは、術者の意氣充實し、其間微塵の隙なき心的状態を稱するのであつて、術者自身の鍛練工夫によつて平生存心し、或る機會に遭遇して始めてなるほど、だなど、飄然自得することが出来るのである、之を要するに氣合には、動的方面と靜的方面との二つの場合があ

る。
 (一) 動的方面。或る特別の目的に向つて、直進活動する場合である。(顯熱の状態)
 (二) 靜的方面。特別の目的を有せざる場合である。(潛熱の状態)
 前者即ち其目的を實現する場合には、其目的に向つて勢力を集注し、遲疑逡巡せず、勇往邁進する場合である。此の場合は、心氣を鍛練し、修養したる結果より出づる意志の鞏固、信念の不拔といふ二の原動地より來るのである。
 後者は催眠上の智識方法等其他一般的腹案充實するを以て、精神に何等の疑念感念もなく、何等の恐怖もなく、何等の邪念もなく、虚心平氣中隙もなく、弛みもなく、孟子の所謂不動心の情態で、威武も屈する能はず、貧賤も移す能はず、泰山前に倒れ怒濤背後に迫るも敢てビクともせざる底の氣構へをいふのである。催眠施術に際し、熱心誠意注意を施行上に配り、術者自己の複雑なる觀念を除くことが出來るといふのは、此の場合の氣合の状態である。
 斯く言へば前者は活動的で、後者は非活動的の如く思はるゝけれども、是れは唯說明の便宜上二つに分解して見ただけで、實際には分解し得るものではない、所謂動

靜一丸で、たとへば顯熱と潛熱との如きものである。其の氣合充實し、活躍し、進むも退くも己の欲する所に従つて、自在無礙の状態に達するといふのである。
 凡そ催眠法の巧拙は暗示使用の巧拙如何にあり、暗示使用の巧拙は暗示奏效の徹底するか否かと云ふにあり、而して暗示奏效の徹底は氣合術を會得するにあらざれば得られないのである。然るに氣合の術を極めやうといふには、心氣を鍛練し、修養せねばならぬ。其の鍛鍊修養の法種々あれども、最も主要なる妙諦を擧ぐれば、常に精氣を氣海丹田に練るといふこと、即ち呼吸を調べるといふことである。精神を臍輪に落ち着かせるといふことである。下腹に力を入れて、元氣を貯藏し、鼓舞すると云ふことである。すべて催眠術に拘はらず、諸藝諸道の極意要訣は、丹田より生ずるのであつて、妙技達道は、下腹部の充實より、運び出さるゝのである。(新催眠術)
 と、此説は簡にしてよく意を盡せり、曾て暫々余が述べし所と暗に吻合し居りて面白し。

第十一章 柔術の極意としての氣合術

(一) 柔術の根底

氣合術が武術の根本要素たるべきことは既に述べ盡せり、我國武術の精華たる柔術も亦た氣合術の原理に基いて其業を全ふすべきものにして實に氣合術は柔術の極意とも云ふべきものなり。

相撲に四十八手あるが如く、柔術にも亦た投業、固業、立業、捨身業、締業、抑業、關節業等ありて其の術千變萬化なりと雖も、其の術の根底に至つては唯一元より出づ、曰く「柔能く剛を制す」と此の外に斯術の根底無し、即ち一人が敵手に對して、武器を持たざるか、又は之を持つとも敵の持てるより優しき武器を持って勝ちを制し、或は敵手が吾よりも力強大なるも吾力を以て彼の力に反對せず、却て敵手の力に譲りながら勝を得る法なり、既に柔を以て剛を倒さんとする以上は、敵の虚を如き實を避けざるべからず、されば彼の柔術の送足掃術(俗にあしはらひと云ふ)を行ふ時の如き、先づ雙方取り組みて横に或は横斜に運動しつゝあるうち、其の運動の方向に伴ひて足を拂ふて相手を倒す者なるが、此法を行ふに當りては相手の體沈んで運動する時は効なきなり、是非共相手の體浮き上りて、其一方の足が地上を走りて他の

一方の足の方に向ふ時、此足の方にある我足の掌を以て他の足の方に打ち着くるが如き心持を以て此足を拂ひ、其上に拂ひたる足の方の手は袖を持ち、他方の手は襟を持ちて斜に上へ(即ち相手の運動を助くるが如く)恰も釣り上ぐる如くし、袖を持つたる方は確と掴み居りて之を助け業を施すものなり、今此法に於て、相手の體沈んで運動する時の効なきは、これを物理的に云へば敵の身體重心の釣合が能く保たれて充分氣が充ち居れるが故に効を奏せざるなり、而して足の浮き上れる時に之を施して効あるは、敵の虚を衝くが故なり、其の虚を衝き實を避くることが氣合術の極意なり、然れば斯の如き柔術の業も、氣合術の原理を會得して始めて完全に効を奏すべきものなり、換言すれば氣合術は柔術の奥義なりと云ふことを得。

(二) 柔術の無形的極意と有形的極意

講道館四段有馬純臣氏の著、柔道大意に次の文見えたり。

『立花子爵又曰く、起居身體何れの時と雖も、下腹に氣力の満ち居る様に爲すべし、自身に練習したる結果、此の老年に及びて身體殊に腹部肥満し舊來の洋服は之を着

一〇八

すること能はざるに至れりと、此時予は柔道の研究に餘念なかりし頃なれば、力めて此法を行ひたるに柔道の亂捕中、體の浮き上る事少なくなりし様に覺えたり、中略思ふに（臍下一寸五分の處を云ふ）に氣を込め力を満たしむるときは、柔道の練習上轉倒し易からざるは此邊は身體重心の存する所なればなり。』

と、柔道修養の方法が氣合術修養の方法と一致し、氣合術を修得したる時は、自ら柔道の極意を修得したること、なるを知るべきなり。

柔術の無形的極意は氣合術にして柔術の有形的極意は三角術なり、三角術のことは實地に就き研究せざれば其意を得難し、要は相手方が平行に力を出して攻め寄せるを三角形に力を出して攻め寄るなり、故に僅の力にて敵の大力を容易に倒すことを得るなり、柔術のことを専門に記すも一大冊子をなす然るに爰には僅かに一言せしに過ぎ、故に詳しくは専門の書に就てなり、師に就くなりして研究せられたし。

第十一章 相撲の極意としての氣合術

(一) 相撲術の巧拙と勝敗との關係

氣合術を修養して得る所の效果に二方面あり、即ち一は積極的方面にして、吾が精神力を充實せしめ、體力を強大にし進んで敵を挫き倒すなり、他の一面は消極的に能く機を見て敵の勢強くして吾の之れに當る時は不利なりと見れば巧に避けて敵の氣鋒を弛めるなり、されば之れを相撲に應用すれば其の效果の大なることは更に多辭を要せず、即ち相撲の技たるや其の本來の性質より云へば甲と乙とが力を角するものなれば力の強大なる者は常に力の弱小なる者に打ち勝つべき筈なり、然るに昨年は西の大關太刀山が勝ちて駒ヶ嶽が敗れたるに、本年は駒ヶ嶽が勝ち、又た次の場所は太刀山が勝つといふが如き、或は小力の玉椿が大力の高見山を倒せるといふが如き變化ありて止まざるは何故ぞと云へば、相撲とても只だ力と力との争ひのみならず、又た術を以て弱能く強を倒すの奥義、俗に角力の手と云ふの存するに依ることを知るべし、而して其角力の奥義、即ち手は氣合術と見ることが得べし。

(二) 元氣の強弱と勝敗との關係

角力の力士に最も大切なるものは所謂「元氣」なるものなり、同一力士が前場所と後場所との成蹟の良不良は總べて元氣の如何に依る、所謂元氣とは其の力士の體力充實し、身體各部に何等の疾病創傷等なく、精神爽快にして自己の技倆を充分に發揮し得るを云ふ、然るに此元氣の養成法としては元より眠食宜しきを得、女色を節する等は必要の條件なれど、氣合術を修得したる者ならんか、其の力士の元氣は、常に充實して、又消失すること無からん。

相撲に「仕切」といふことあり、相角せんとする兩力士が土俵の真中に出で相對して蹲踞し、手を下して地に接する如くし、互に睨み合ひ、我が體勢を整へ、敵の虚實を察し呼吸をはかりて立ち上ると共に撲ち合ひ組み合ふまでの準備の姿勢之れを仕切といふ、此の仕切は相撲の全體に最も大切なりとて力士間には非常に苦心して輕々に行はず、昔某の角力通は兩力士の仕切の様に依て其の勝敗を知りしと傳ふ、此の仕切の心得としては、先づ體勢を整へ、次に手に力を入れ、先づ手を取るを心掛け、敵の得手を察せよ、敵の呼吸を察せよ、敵の我に先んじて出づる時は其のハナをはたけといふが如きは主要なる心得とす、今此の心得方を見るに悉く氣合術

の原理の應用と見るべきものにして、細説するまでもなく吾元氣を充實して以て敵の虚を衝くといふ事の外に仔細は見えず。

三 相撲の奥手

「相撲寶鑑」と云ふ書に相撲の奥手となる處の相撲をとる場合の心得を詳述しあり、其心得は即ち氣合術に外ならず、從て相撲をとる形式にあらずして相撲に勝つ處の精神の持方を記しあり、以下其要を採録せむ。

「相撲立合の心得は本來無一物と思ふべし、心を虚にして敵手を待つ、敵手は實なり、故に虚心を以て敵を知るべし」と相撲の傳書にあるは此事なり、此の敵を知るとは敵の得手不得手の處、又は強弱を知るといふ事なり、是を唯一に收め忍びて立つといふ、譬へば業は經外の別傳なり、業を以て勝つことを勤むるなかれ、只心の一手にかゝるものと知るべし、譬へば經文の外に佛法あるが如く氣治らざれば其業も動搖して甚だ危し、其本亂れて未治らざるは自然の理なり、傳書に多く不動心といふ事を説きたるは心を動かさずして只一圖に忍といふ文字を忘るべからず、必ず勝んと思ふべからず、只負まじと大事を取り、假初にも派手なる取方をなすは大なる過

ちなりと知るべし。

七體七足の虚實とは何ぞ。是れは口傳の事にして容易に人に示すべきものあらざれども此の道熱心の人に教へおかば終身益を得ること少なからざる事を信じ、爰に其大略を記す。

(イ) 強弱虚實の體。強きもの必ず勝つにあらざ、又弱きもの必ず負くにあらざ、虚と見える時は之れ實なり、業は總て強弱虚實ともに必らず時に臨み變化するものなり、真劍の勝負は習ふとも得ること能はず、思ふとも容易に得る事能はざるものなり、只稽古熟練の上より自然に生ずるものと知るべし、然れば一日片時も怠りなく、稽古する時は妙術いで來り其場に臨む時は彼我の強弱自づと分るものなり、依て是を一人自得の妙術といふ、師匠たりといへども口又は手にて教授する能はざる事なり。

(ロ) 強柔弱剛の體。力强しと雖も氣柔らかにして力を蘊たぐはふるものは弱く見ゆれども、心は必ず強し譬へば敵手を見計らひ其分に應じて取組む時は何程の變化相手にありと雖も、本心を失はざれば驚く事なく、思ふまゝに立會はるゝものなり、然る

を弱きものと見ては一ト揉に押し倒さんと思ひ、本心を失ない居る時敵手の方に案外の變化ありて仕掛けられたる時は己れより下手の者にも負る事あるものなり、爰の理を會得せざれば銘人の地位に至ること能はず、是を強柔弱剛の心得と云ふ、尤も大關の地位にゐる力士は片時も此工夫を忘る可らず。

(ハ) 有無の體。變化する其本を見知り敵手の強弱を知るを肝要とす、有時は無心にして無時は有心と知るべし、只一身を守る事を勤め敵手を倒す事を勤るなかれ、我が體に敵手の取組時は無にして勝時は有とすべし、皆臍下の一心にある妙手といふ是なり。

(ニ) 餘力の體。是は力を遣ふ時は少しく餘るやうに蘊へ遣はざる時は不足と心得、只自己の分量を知つて内端に心得、堅きものを柔らかに遣ふ心持にて敵手と立會時は必らず勝ものと知るべし。

(ホ) 過不及の體。縦ひ敵手は我より劣るものと雖ども己れが力にまかせ無理に勝は不可なり、若し力を一杯に出し倒し損じたる時は我より劣るものに負る事あり、古人の謂ふ過たるは及ばざるが如しと是れをいふなり、總て氣あせり氣短かなる

は斯道の大に忌む所なり、常に士俵に上りては氣を鎮め心を平かにして敵手に向ふを以て第一とするなり。

(へ)九死一生の體。都て取組時は己れが業を殘さず十分に施すを善とす、勝負に臨み二心を抱くは最も嫌ふ所なり、又氣の長短に場合と時とあり、能く此處を分別して今は此身彌々危しと見る時は氣を短かく力をも一杯に出す、是を九死一生の體といふなり。

(ト)一體一生の捻。一體とは心氣手足とも兼ていふ、捻りとは業の名にて惣て體には規矩なかるべからず、若し此心得なくして體にひずみの生ずる時は縦ひいかなる妙手を出すも對手に感ぜぬものなり、故に真劍の勝負をなす時は必らず己れが不斷得手を施すものなり、是れ不斷得手なるを以て一體にひづみなく、全身に精神と力量と滿ち渡るが故に勝を得るなり、若し之に反し不得手を施す時は手足心力共に不揃にして敵手を感ぜしむる事能はざるが故負となるなり、是則ち一體に規矩なきに依るなり、我が得手を以て取組む時は敵手方にては己れの得手を施すこと能はず、自づと負となるなり、故に一體一生一の捻り是を三具揃といふ、されど

も此道に入り十年以内の執行にては此規矩に當る人殆ど稀なり、……。

余は此相撲の心得を讀んで余が曾て氣合術なりとして述べ來りし處と暗合し居ることを知り、相撲の秘訣も又氣合術にあることを益々確むるに至れり。

(三)相撲の裏手

俗に云ふ、角力に四十八手の裏表ありと、其裏手なるものは相撲の相手方をして絶息せしめ本死又は假死の状態に陥らしむる恐ろしき手段にして、狼に行ふべからざることなるや勿論なり、其手段は如何なる方式のものなるか、余之を知らずと雖も、相撲をとる場合に行ふてはならぬ所のものあり、若し其手段を施すこと忽ち兩眼くらみて氣絶す、余は之れが即ち角力の裏手ならんと思ふ、左に其方法一二を擧げん。

- 一、拳又は大指を以て眼を突く時は兩眼くらみて立合ふ事能はず、是れ九死一生の際に用ゆるものなり。
- 一、兩手のひらを以て一度に兩耳を強く打つ時は氣絶して茫然となるものなり。
- 一、眼の下を拳にて突く時は雙眼自づと開むものなり。

- 一、鼻尖を拳にて打つ時は眼くらむのみにて氣絶するものにあらず、鼻柱を下より上へ突こむ時は氣絶し、又は茫然となるものなり。
- 一、舌根咽喉の間を親指と人さし指にて緊しくしめる時は呼吸迫り身體自在ならず。
- 一、咽喉の下を拳にて突く時は忽ち悶絶するものなり。
- 一、咽喉のきわを拳にて突も同じく悶絶するものなり。
- 一、乳を拳にて突時は茫然となるものなり。
- 一、乳と乳との間を拳を以て突く時は同じく茫然となるものなり。
- 一、脇腹の骨を拳にて突く時は氣絶するものなり。
- 一、鳩尾ひづりを拳にて突く時は同じく氣絶す。
- 一、臍の上を拳にて突時は氣絶せざるも茫然となるものなり。
- 一、陰囊は五指と食指とにて引出し、睾丸を手の掌に握りて五本の指を以て一同に緊る時は忽ち氣絶す。
- 一、立帶前下りを引ときは陰囊を締め氣絶す。

- 一、胸部を蹴ると即死することあるべし。
- 一、指一本を取て折かへすと其の指は摧くるものなり。
- 右の外口傳にあらざれば發表しがたきものあり、相撲の業は平時の手練にありといへども、當りあひ強くはげしければ肢體を破傷し、又は求めずして誤つて急所にあたり悶絶せしむる事往々あるものなり、故に相撲を稽古せんとするものは豫め爰に注意すべし。
- 尙相撲をとる場合にのみ限らず、極く一寸した事にて人の呼吸を止め假死の状となすことを得る手段あり、此事を公にするは一利一害あるを以て之を爰に公にせず。

第十三章 氣合術應用の實例

(一) 畫道の奥義としての氣合術

余は不充分ながらも氣合術の理論及び練習法は既に説き盡しぬ、而して古來の武藝家が苦心慘憺たる結果得たる武術の蘊奥とする所も亦た氣合術の外無かるべ

しと信ず、而して斯術の應用の方面に就ても今迄屢々述べたる處なるも尙參考となるべき應用例を以下に述べんとす、明ら様に云へば、此書の本旨とする所は武藝の發展を圖らんが爲めに氣合術を説かんとするに非ずして、此武藝の蘊奥秘傳たる氣合術が百般の事業に應用して多大の效果あることを述べ、此術を應用して成功の手段とせられんことを希望するに在り、勝伯は、何事によらず氣合といふことが大切だ、この呼吸さへ呑み込んで居れば、縦ひ死生の間に出入しても決して迷ふことはない」と云へり、然らば此の氣合の凝つて成れる氣合術を應用すれば萬事萬般の事、成功せざるものなき筈なり。

昔天下の名力士として世に知られたる谷風が當時の名畫家圓山應舉に弓の畫を頼み、其の畫料として自ら洛北鞍馬山より大石一箇を背負ひ來りて應舉の庭石となし、畫が速かに出来るやう頼み歸れり、然るに其後數十日を經過すれども應舉より何のたよりもなきまゝに谷風大に怒り、彼の庭石を持ち去らんとせり、應舉これを止めて、先づ待ち給へ君に見するものあり、此方へ來られよ」と谷風を畫室に伴ひ來りて、これを見れば君も左様に怒るまじと指す方を見れば、其處に畫絹が何百枚

とも知れず累々と積み重ねあり、谷風之れを検すれば何れも皆弓の畫に其の弦が、或は中程にて止めあり、或は八分、九分通りまで引き來りて其儘になり居れる等何れも皆弓の繪の書き損じばかりなりき、應舉曰く、われ君の依頼により、長さ一間の弓を畫かんと苦心すること一方ならず、君が荷車にも積まざり、弟子にも運ばさずして手づから大石を運び給はりしなれば、われも亦此の弓弦を定木等に依らずして直腕一筆、一氣にこれを引かんとて力を盡したれど、何様長さ六尺にも近き弓弦を引くことなれば、やゝもすれば曲り易く、曲らぬとても一様に細き線を息をも繼がず、一氣に書くことは六ヶしく見らるゝ通り、斯様に反古を拵らへぬ、而かも未だ思ふやうに書かれぬまゝに、此の通り相變らず書き續け居るなり、決して打捨て、居るには非ずといふ、谷風始めて應舉の苦心を聞き、且つ謝し、且つ喜こび、何分頼み入るとして立ち歸れり。

さて應舉は其後苦心慘憺したれども相變らず思ふやうに書ず、一日大に決心する所あり、われも天下の畫師なり、纔かに一本の弓弦が引けぬとあつては最早筆を折り硯を打壞して百姓とならん」と一日畫絹を伸べて例の如く弓弦を引かんとする

に當り、若し此の繪を仕損じたらばわれは再び丹青の人たらずと口を結び、息を籠め、丹田に張り切るばかりの力を入れて直腕一筆一氣呵成にスーッとばかりに引けば見事一點の狂ひなく絲を引けるか如く一間の弓弦を巧に畫き了りぬ應擧の喜ぶこと限りなく直ちに谷風の許に使を馳せてこれを報せば、谷風待ち設けたることなれば宙を飛んで馳せ來り其の靈妙なる筆致に感入りたりといふ傳へて以て古來丹青界の一美談として應擧の傳に記されたり。

應擧が最後五尺の弓弦を定木等の力に依らずして糸を引けるが如く畫くを得たるはこれ氣合の致せる所、此の氣合を以て能く畫くことを得たるは即ち氣合術の應用に外ならざるなり、應擧は實に氣合術を應用して古今無比の名畫を世に遺せり。

(二) 習字の秘訣としての氣合術

氣合によりて書が見事に出來上るとは畫が氣合によりて美事に出來上ると同様の理なり、同じ書家の書でも其書を書くときの精神が書の上に明かに著はるものなり、即ち精神が急げば筆も急ぐ精神が鈍れば筆も鈍る、精神が高潔にして氣高

ければ、從つて其人の書にも又氣高くして高潔なる處あり、心が仙人の様なれば書も亦俗を離れし處あることは實に形の鏡に映ずるが如し、よりて揮毫も又氣合なりとは書家一斑に唱ふる所なり。

東京小石川音羽八丁目十一番地に山崎東陽と稱する書家あり、此の人は氣合を以て習字を教へ、普通の習字が手本を見て一點一劃も違はぬ様記すに反し、此の人は手本を見て書くといふよりは寧ろ氣で書くことを教ふるが故に、上達非常に早しとて評判なり、其れに就き婦人世界第四卷十四號に左の如き記事を掲げり。

前に庭を控へた明るい六疊の間の真中に花筵を敷いて、先生と喜久子(前警保局長古賀廉造氏の娘)さんと、向ひ合つて坐つていらつしやいます、花筵の上には四つ切りくらい大きな唐紙が伸べられて、その兩側に硯と手本が備へてあります、手本は先生が自分でお書きなされたものです。

先生は年配三十五六、赤銅の細糸の眼鏡をかけ、口髭を蓄へ、着物の上には丁度郵便局員の着てゐるやうな黒の仕事服を襲ねて、邪魔にならぬやうに兩袖は肩から紐で吊つてあります、初對面の挨拶が済むと、先生は喜久子さんの手を執つて、

手本通りの字をお書かせになります。先生の方から申しますと、字を倒さまに書くのです。手本と寸分も違はない文字の出来るのは不思議な位です。かうして二字なり三字なり續けて書いてから、別の紙に今書いた文字を書かせます。この時、先生は兩手を膝について身體を眞直に伸ばして、喜久子さんの持つてゐる筆の先をキツと見詰めて『テン、シュー』と氣合をかけます。その氣合に連れて、喜久子さんは筆を運ぶのですが、如何にも自由自在で、とても十一歳の少女の業とは思はれません。しかも出来上つた文字には力がありません。

三十分の稽古でも疲れる。先生のお掛けになる氣合には、凡そ五つばかりの種類があります。譬へば、立と云ふ字ですと、初めに筆をつけた時がテンで、下の曲つたところがウン（中略）その氣合に従つて、先生がテンと云つた時に筆をつけ、シューといつた時には、ね、ウンといつた時に曲げるのです。から申しますと、何だか先生の氣合に引きづられて行くやうですが、實際は先生の呼吸も書く人の呼吸も、シッカリ合つて、先生がタタタと云へば、それに調子づいて、勢よく線を引くといふ具合です。からかうして、出来上つた字はなかなか立派なものです（中略）その位で

すから運筆の方法などは深く頭へ込み込んで、忘れようとして忘れることが出来ません。上達の早い人も全くこのためです。やうと思ひます……。

氣合で習字を教へるとは、能くも思ひ付きたり、習字のみならず、凡そ一切の諸藝はすべて氣合でよく出来るものなり。何の藝にもせよ氣合を失へば出来るものにあらず。今此の氣合に依りて習字が上達する理を催眠心理學上より説明すれば、先生は術者にして、喜久子様は被術者なり。テン或はシューと稱する氣合は暗示にして、被術者が其の氣合のまゝに手を動かすは暗示に感したるなり。催眠術が教育上に効果あることは一般に學者の認容する所にして、随つて氣合術も又教育上に著しき効果あることを知り得べきなり。

三 壽命延長法としての氣合術

心理學上感情の方向に緊張作用と云ふ精神状態あり、此の状態は物事を期待せる場合、又た或る一事一物に熱心に注意する場合等に著しく表はるゝものなり。例せば、こゝに瀕死の病人あり、其の病人の子は遠方にありて、病氣危篤の電報に接して、今や將に歸り來らんとしつゝあり、其の子の居る所は遠隔の地にて歸宅するまで

には三日の時日を経ざるべからず、然るに醫師の診察に依れば、其の病人は確かに明晩を以て死すべき状態にあり、看病せる親屬等は如何にもして病人の子の歸るまで壽命を得させんと思ひ、病人も亦わが子の歸るを待ち詫びて今か今かと心に期待しつゝあり、斯の如き精神状態を緊張の状態と云ふ、其場合に於て彼の病人は吾子の歸るを待焦れて居る結果、醫師が確に明晩以上の壽命を保つ能はずと診察し断定せるに拘はらず、不思議にも其の子の歸り來るまで餘命を保ち、其の子の顔を見て始めてガツクリと鬼籍に入るが如き事實はよく見る所なり、今この心理状態は氣合術を行ふ場合と同じ状態にて、俗に云へば逢ひたいの一念に氣が張り詰めて居りし故なり、氣が張り詰めて居るとは全身に意志の力が充實せる状態をいふ、氣合術を行ひ得べき精神状態は即ち此の意志充實の状態也、故に換言すれば其の病人は氣合術を以て壽命を延ばし得たりといふべきなり、斯る實例は病人のみならず平素の生理作用に於ても屢々見受くる所にして、人が貧苦の爲めに孜孜と働きつゝある時は病氣に罹らず、少しく小金が出来て身體が安樂になつて後に病氣を發するが如きも亦た此の作用に依るものなり、貧乏なる時の精神は、壯健

で働ひてさへ食ふに困る、故に若し病人となつたならば餓死せなければならず、何とかして金を拵らへたしといふ一念凝りて精神緊張せるが故に病氣もこれを襲ふ能はざるなり、然るに漸く小金が出来て來れば先づ安心するが故に、彼の死に瀕せる病人が我が子の顔を見てガツクリと往生を遂げしが如く、弛緩作用を起して心に隙が出来た爲め、其虚に病氣が侵入したるなり、よりにて人は飽までも奮闘すべきなり、心に油断すべからず、油断大敵とは何事によらず、大切なる誠めなり、精神に油断を生ぜしめぬ様にするには氣合術を修得せる人に於ては最も容易なり、斯くの如く精神に油断なければ壽命をも延し得、氣合術の妙用も亦大なる哉。

此の生理作用と氣合術の關係につき、卑近なる實驗を云へば、諸君が若し吃逆とどろに苦める場合に於て、これを治する爲めに他人をして自己を驚かしむるとは人の能く知る所なり、之れ又氣合術應用の一種なり、吃逆を止むる方法として次の如き面白き法あり、先づ吃逆とどろが出て來らば靜かに坐禮を組ひやうに坐し、身體を前後に軽く揺り動かして氣を落ち付け、兩手を組んで下腹の邊に軽く當て鼻にて深呼吸を爲してウンと下腹に力を入れるべし、これ氣合術を修得する法と同じ方法なり、斯く

すれば吃逆は忽ち止みて精神は極めて愉快なり、此の方法は余か屢々實驗して效を奏せり。

(四) 歩行停止法としての氣合術

氣合術を應用して最も趣味ある現象を即坐に現はさしむることを得る有様を以下に少しく摘出せん。

今室内なり庭園なりを勢ひよく歩行し居るものあり、時に術士が一言「エイッ」と氣合をかくれば歩行者の足は地或は畳に堅く附着して離れず、離さんと勉むれば勉むる程堅く着いて動かざること木像に異ならず、術者が拍手をポン／＼と二ツ打つと初めて元の如く再び歩行するを得、此法は暗示感性の高ひ者に對しては思ひの外容易に行はる、余の宅にては大概の日此の様な實驗をやり居れり。

(五) 疼痛無感法としての氣合術

術士自らの身體をして氣合術によりて疼痛無感となし、如何に大力の人が來て術士の耳を掴んで引くも術士は少しも痛みを知らず、又た術士自身の手を釘或は針を刺すも少しも痛みを知らず、之れは獨り術士の身體のみならず、術士が他人の身

體をして疼痛無感とならしむることを得、此法の秘訣としては精神を他に轉じて無感覺とせんとする處に精神を寄せざるにあり、此法も余の宅にては常に有志が試み居れり。

(六) 口中點火法としての氣合術

術士蠟燭に火を點じ、其の火を自己の口中に入れ、口を結び口腔を燈籠に疑することを得、此法は一寸見ると頗る危険の如くなるも其實頗る安全なものなり、少しく口傳あり、余の宅にては此法もよくやり居れり。

(七) 熱鐵觸皮法としての氣合術

火鉢に熾火を盛に貯へ大なる鐵火箸を眞赤に焼き、掌に握りてこき、又は肉體各所の皮膚に觸るゝも何等の害なし、此法も存外容易に行はる、少しく口傳あり、余の宅にては會員盛に此法を行へり。

(八) 燃火冷感法としての氣合術

大ランプに火を點じ、手腕其他の皮膚をして火中を通過せしむるも何等の異状なし、之れは何等の害なしとの確心を以て身體に力を入れランプの眞に接して早く

通過せしむれば誰れでも出来るものなり。

(九) 力量増加法としての氣合術

一人の力が數十人力に比敵す故に何人でも術士の前に立つと力が脱けて一寸指先きが人の體に觸ると如何に力のある者にて、も劍道に達するも柔術に長ずるも後にたぢくと二三間飛ばされてドツと尻餅をつき腦震蕩を起して人事不省となる此法は著者獨殊の妙術にして東洋にも西洋にも未だ曾て聽かざる術なり、實驗を見度き御方は精神研究會員の紹介あれば何人をも相手としてやつて御目にかけてし、此法には最も秘密を要する口傳あり。

(十) 不動金縛法としての氣合術

術士或人に向ひて氣合術を行ひ、汝の手足は無形の鐵鎖に緊縛せられたるを以て毫も動く能はずと云へば眞に其通りとなる、之れは催眠現象にて暗示感性の高き者に對してのみ行はるゝものなり、故に之れに就ての詳論は拙著驚神の大魔術を參照せられたし。

(十一) 鐵棒屈曲法としての氣合術

左手に鐵棒を握り、右の手の小指を鐵棒に鈎の如く引きかけ、エイツと氣合をかけつゝ、引けば鐵棒は自在に胎細工の棒の如くに曲るものなり、此秘訣としては鐵棒をして必ず曲げ得との大確心を以て力を一度にエツト入るゝなり、詳しくは驚神的大魔術を參照あれ。

以上に擧げたる十一箇の法は余が常に精神研究會に於て精神學を研究しつゝ、ある會員に向て實際に之を示し、又其學理を講述し會員も又よく之を實地に行ひ得る所なり、催眠學を知らぬ者が之を見之を聽くと不思議に思ひ、大に感心する所なるも、催眠術を研究したる者より之を見之を聽くも實に平凡のことにて、其原理は暗示の感應なりと信ず、尤も前記の現象は何人に對しても必ず實行し得るものにあらず、暗示感鈍き者と雖も催眠術を施して催眠状態となせば、必ず悉く行はるゝは勿論なるも、正規の状態にある者に對しては暗示感鈍高からざれば行はれずとの制限あり。

尙々之等諸法の行はるゝ原理と方法とは既述の各章に散見せるを以て爰に又之を贅せず、思ふに氣合術は人のなす事柄に就ては何事にも應用し得らる人の爲す

事柄がよく成功すると否とは其れを行ふ人の精神が故意又は偶然に氣合術上の精神に合致し居ると否とによりて分るゝ處なり、換言すれば氣合術は人の行爲の根源なり。

第十四章 結論

以上余は極めて雑漢ながら氣合術の一斑を述べ終れり、説く處論理的にあらず重複及び前後懂着を免れざるも、此の術の理論及び應用の大凡は説明したるつもりなり、讀者若し心を潜めてこれを熟讀翫味せられなば、恐らくは其の大體は會得せらるゝならん。

此書は初より著書として公にする積りにて筆を執りたる者にあらずして、氣合術の嚆を精神研究會に於て斷片的に數回になしたる嚆の筆記を集めたるものなり、故に重複せる點多くして著書の體をなさず幸に此意を諒とせよ。

夫れ氣合術は只是れ一種の精神作用に過ぎざるなり、而かも如上の大効果あり、眞にこれ戦はずして勝ち、勞せずして利益を得る所の妙法妙術にあらずや、思ふてこ

ゝに至れば人の精神力も亦た偉大なるものなる哉、歐洲全土を席捲して破天荒の大事業を爲したるナポレオン一代の所作は悉く彼が胸に包みし企圖の發現なり、カーネギーの富もモルガンの事業も、或は學問も藝術も何も斯も總べて人の腦中より割り出されたる精神力の力ならずや、此の精神力が凝つて氣合術となる、如何なる事か成らざらん、氣合術は實に絶妙なる武術なり、簡易明快なる處世の秘訣なり、精神修養として唯一の良法なり、何人も之れを學びて會得せば一生の中には利する處蓋し少なからざるべし、余はかく信じて以上の如き論述を爲せり、思ふに諸君の贊成を得し事ならん、若し夫れ余の説く所を平凡なりと云ふ人あらば余は云はんとす、道は近きにあり、之れを遠きに求むるは誤れり、氣合術豈他あらんや、特に氣合術は禪に於ける不立文字と同様の感あり、以て筆の上に現はすことを得ざる微妙の處に秘訣あり、故に筆の不足を攻撃するは誤まれる見解なり、彼の富岳の山頂に達せんとするにも麓より一歩づゝ進まざるべからず、諸君此理を考案して徐々と研究を積み熟練を重ねて氣合術の奥義に達し、其れを應用せば理想の境遇を得んこと蓋し遠きにわらざるべし。

氣合術獨習法終

古屋鐵石催眠術實驗批評集

第一章 反抗者催眠不思議な現象

(一) 不可思議幻妙の現象

(明治四十五年五月發行臨時增刊雜誌科學世界より抄録)

去月九日夜東京芝區精神研究會に於て催眠術の實驗があつた記者は其席に臨んで實驗の模様を見て催眠術の不可思議幻妙なるに驚嘆した。
會長古屋鐵石氏が實驗を行つた被術者を室の中央に立たせ古屋氏が其の面前に立ちて一度睨みつけて兩手にて被術者の面前を撫ぜ下せば被術者は笑ひつゝ、しきりに拒む、古屋氏が手を一つ打てば直ちに突立つて動かぬ全く深き催眠に陥つたのである。夫れより古屋氏が一言ふと被術者の眼が白くなり二で舌が出て三にて手が上り四にて足が上つた爲め、被術者は椅子より滑り落ちたが依然とし

て同じ状態であつた、古屋氏は観客に向つて、最早催眠状態に陥つて居るから如何なる事をしても決して感じなく、手を切り落すとも感じないから傷をつけない限りは宜敷故覺まさして見られた」と云ふたら、一人の者が被術者の所へ行き面部へ劇しく息を吹きかけたが被術者には何等の變化も與へなかつた、観客の某が古屋氏に其催眠状態で、千里眼の如きことが出来ますかと尋ねたら、古屋氏は、千里眼位は何でもなく萬里眼でも億里眼でも出来ると答へられ言葉をつぎて、今千里眼よりも不思議な實驗を御目に掛けます」と云はれて實驗をされた。

X(二) 術者の考へが被術者に通ぜり

其實験は古屋氏の考へて居ることが被術者に傳はり夫れが行爲となつて現はれるのである、之が出来れば甚だ不思議と云はねばならぬ、所が出来たのである、古屋氏は皆様の中の誰か、考へて居る事を私が聞いてやつてもよいが時間がない故簡單なる事を私がやつて見ます」と云ひ古屋氏が被術者に向ひ今私の考へることを行へと暗示して、二間程離れて氏は被術者を瞥めながら満身に力を入れて何事

か考へを傳へた、すると被術者は始め眼を白くし次に舌を出し次に手を上げ次に足を上げた、これ氏の考へが傳はつたのである、古屋氏の語るには、之れは如何なる遠方にてするも差支ない百里遠くに居るものにも考へを傳へることが出来る、本日二階に被術者を置き下に實驗せしところ同じ現象を呈した、此理で宇宙間如何に遠くにあるとも同じである、そこで人を祈り殺すことも又遠方の者の病氣を癒すことも或る程度までは此現象で説明される」と云はれた。

次に古屋氏の發明されたと云ふ實驗を行つた五十二枚のトランプ中より數枚を抜き取り、其トランプ中の一枚を観客に取りしめ、夫れを氏が見て心に考へ絲によつて被術者に考へを傳へしめる事である、氏は二間位の細き麻絲を採つて被術者の左手に暗示を與へて其絲を持たしめ、更に一重手に廻し置き、其一端を古屋氏が持つた、此絲は五間あるも六間あるも亦百間あつても同様である」と云はれた、氏は観客に一枚抜かしめ、其のトランプを見て絲の端を持ち、被術者に、もう解りましたネ、云ふて御覽と云へば、被術者はスベートの六と云ふて明かに適中した、次にはダイヤの八と云ふてまた適中した、氏は短い言葉にても長い言葉にても繩を傳へ

て通ずることが出来る」と断言された。

(三) 催眠者観客の所持品を當てた

次に古屋氏は被術者に暗示を與へてハーモニカ、手風琴、ヴィオリンも美事に奏さしめた。今度は被術者の面部を白布にて幾重にも蔽ひ観客の所持せる品物を當てることを行つた。古屋氏は被術者の椅子の側に立ち観客の示せる品物を見て考へて傳へしむれば暫くにして「鐵瓶」と答へ適中した。観客が直に「其口は何れの方を向ひて居る」と問へば暫くにして「前を向いて居る」と答へ適中した。今度は時計の鎖を示せし處これも適中した。古屋氏は「前には懷中物を當てた」と云はれた。次に暗示を與へ樂隊と三味線の音を出さしむれば一分毎に片手宛、活動寫眞の樂隊と三味線とを鳴す手付きをしながら口にて其真似をするのである。次に新聞賣と納豆賣の聲色も同様になした。次に古屋氏は「諸君が隨意に數字を書て夫を私が考へると被術者が當てる。餘り多くの番號の數字では複雑するから千位以下が宜しい」と言はれた。すると余の隣の者が紙へ八百五十と書た。すると氏が之を見て被術者の椅子

の側に行き考へると暫くして「八百五十」と適中した。次に被術者をして大聲に歌ひながら劍舞を一つ演ぜしめて後醒ました。

第二章 新發明の口笛催眠法

(明治四十四年九月十一日發行「萬朝報」より抄録)

(一) 口笛とハーモニカとの吹き方によりて

人を意の儘に催眠せしむ

昨夜芝琴平町精神研究會で新發明の催眠術實驗を行つた。術者は同會の古屋鐵石氏で先づ學生を椅子に凭せ、鐵石氏三間許り距つて、二回口笛を吹くと手もなく催眠状態と爲つた。餘りに飽氣ないので五十餘名の來會者は眠つた。振ではないかと疑ひ出した。鐵石氏其れと見て取り、此者を醒す事ができれば失禮ながら百圓差上げますといふ。立會人が大なる鈴を鳴らしたけれども覺めない。鐵石氏更に口笛を吹くと、催眠者は義太夫を語り出す。又手を動かし足を踏張る。芝居の真似をする。次に氏がハーモニカを吹くと大聲で笑ひ出す。今度こそ眠りから覺めたのかと思つ

て耳の傍で大聲で呼び、體を揺すつたが依然として催眠して居た。

(二) 催眠者詩歌を詠ず

更に君は大詩人であるといふ暗示を與へると立會人から題を出した五言の詩は四分間、都々逸は二分間、川柳一分間、新體詩三分間で手早くすらくと書く洋杯へ水を盛つて、是れは麥酒だ、君は好きだから飲めといふ、甘さうに飲んで手風琴を奏し、グワイオリンを弾く眞の刀を渡すと劍舞をやる、此間約二時間に亙つた、九時三十分になつて、やはり暗示のピアノの音樂で覺醒し、暗示通り帝國萬歲來會者諸君萬歲を叫んだ、口笛二回で施すとは催眠術も進歩して來た。

第三章 催眠者月琴を弾き唱歌を唄ふ

(大正元年十一月十一日發行「やまと新聞」より抄録)

(一) 一聲の氣合で深く催眠せしむ

十日午後六時芝區琴平町精神研究會主古屋鐵石氏の催眠術實驗を見に行つた、青

年を席上中央に設けられたる椅子に腰を掛けさし、古屋氏一聲高くエイツと氣合を掛けると件の青年は催眠状態に陥り氏の言ふが儘に或は笑ひ或は怒り、或は月琴を弾き或は唱歌を唄ふなど斯術の効果は中々面白い、夫れから何人の提出せる問題に對しても直に筆を以て應じ得ると云ふ。

(二) 催眠者記者の出題に應じて俳句を作る

記者は大演習と川越町と云ふ題で俳句を注文したら、武藏野の川邊に小銃響きけりと答へた、併し覺醒後は一向書く事もできなかつた。

第四章 催眠者左手で字を書き犬猫に變換す

(大正二年一月十四日發行「やまと新聞」より抄録)

(一) 藝妓と義太夫とに人格を變へたり

芝琴平町三精神研究會では去る十二日午後六時から催眠術實驗會を開催した、集會者數十名定刻となれば二階の大廣間に綺麗な椅子を置いて、それに會員北榮壽

と云ふが腰をかけると、これも會員の永富金城と云ふが施術者となつた、充分に催眠させて置いて左手で字を書かせた、被術者の北榮壽は腕を揮つて「龍虎」催眠といふ字を書いた、頗る立派な者であつた、次で棒寄や自己催眠等があつた、最後に會長古屋鐵石氏は一青年を催眠させて藝妓、義太夫、琵琶師、狂言師、大臣、犬、猫、鶏にまでも人格を變換して見せた、散會したのは十時であつた。

第五章 催眠者役者となりて狂言をなし

藝者となりて歌を唄ふ

(大正二年一月十九、二十、二十一、二、三、四日發行「新潟新聞」より抄録)

(一) 實驗會場の光景

芝區琴平町の精神研究會にて催さるゝ、古屋鐵石氏の催眠術實驗會に招待されて在京の宿所を出た。暫く行くと西洋造りの家が在つた、入口の太い門柱には「精神研究會」と階書に書いた札が掲げられて居た、門を入つて花崗石を敷き詰めた道を玄關へ急いだ。

案内されて、二階へ登つた、二階には精神研究會の會員で、今夜の催眠術實驗會の幹事の一人なる北榮壽君が居て「さあ此方へ」と座布団を持つて火鉢の側へ座らせた。先着の會衆は「静肅」と書いた承塵のビラを見詰めて廣い日本間の座敷に呼吸を吞んで座り込んで居た。「茶は御随意におわがり下さい」と書いたビラも下つて居たけれども、神の默示を受けるクリスチャンの様に呼吸さへ吞んで神妙に納まつて居る、一閑張りの大きな机の上に茶器が雑左無ささうに明るい電燈の光に反映して居た。森として何の音も聞えない。

實驗室正面の中央が一間の床に成つて、其處には紺地の極彩色の文珠菩薩が白毛の獅子に乗つて居る大軸が掛けられて、五彩絢爛目覺める様な花籠が其の前に飾られてある、つゞちの床柱を境に右手の遠棚には、幾つかの實驗の道具や月琴やハルモニカ等様な樂器が飾られて、床の左手には大銀行家の書齋にある様な大きな事務用机が拭き込んだ板面に電燈の光を滑らして銀の金具がガラガラと光つて居る横手組子の書院障子を後に緋天鷲絨の椅子がズラリと並べられて「新聞記者席」と之もビラが下つて居る、實驗室中央には乳白色の曇り硝子に梅花の模

様を抜いた井型の笠が釣るされて、電燈が隈もなく室の四隅に麗やかな光を浴せ、電燈の下には鞆した牛皮の大きな安樂椅子が置かれてある、之れが施術椅子だと北君が説明した。施術椅子の横手に深緑色のテュブル、クロオスを掛けた大きな丸テュブルがある。丸テュブルの後の方に、寫真屋の撮影室に在る様な蛇腹の房を重い程下げた椅子が配置されてある。丸テュブルの上には新派劇の舞臺面に飾られる様な玻璃製の水入れとコップとタガヤサンの硯箱とが、モツタイらしく飾られて在る、之も皆實驗に必要な品だと北君は説明した。座敷の欄間には展覽會場の様にぐるりと金縁銀縁の洋畫の額が掛け並べられてやはらかな電燈の光線に打通しの座敷は夢の様に眠つて居る。静寂を破つて實驗室に掛けられて居る時計が七時を打つと間もなく二人の青年が實驗椅子の前に現はれて軽く會衆に叩頭して。

『これから實驗を始めます』と云つた。髪の毛を長く、左右に分けた男は、實驗椅子の上へ倒れる様に腰を掛けた、五分刈の愛嬌者と云つた顔の造作の男は其右に立つた。分け髪は被術者で五分刈は施術者である。施術者は被術者を最も樂々

する様に取り扱つて頭から頤へ掛けて白い手拭をフワリと冠せて『君は非常によく眠る』と被術者に囁いて軽く白布の上から頭を四五回撫で下して、それから眼の邊を撫ぜ手を撫ぜた。また『君は非常によく眠る』とくり返して、今度は胸から下腹部の邊を軽く撫ぜ廻した。恙うして三分ばかりすると施術者は被術者の身體から手を放して『君は既う眠つた、非常によく眠つた、君はもつと深く眠る、もつと深く眠る』と幾度も小さい聲で、くり返しくり返し被術者に暗示して、顔に掛けた白布を取り除いて『君は非常によく僕の暗示に感應する、精神は爽快である、君の頭腦は非常に軽い、君の血液は非常によく巡つて居る、君の氣分は非常に愉快である、君は非常によく僕の暗示に感應する』とくり返した。被術者は霞に酔つた天使の様に軽く眼を閉ぢて頽然として、實驗椅子の上に眠つて居る、此の間略十分時。

(二) 催眠者手に針を刺し貫かれ

たることを知らず

「御覽の通り誠によく眠りました、之れから極く簡単な實驗を御覽に入れます」と云つて、そして「君の手は如何に下げやうとしても段々上へ上る」と暗示を與へて、被術者の手を上に五六寸ばかり離れて、施術者が絲を繰る様に手を動かすと、催眠者の手は感電した蛙の足の様にブルブルと震動しながら段々上へ上つた。其の手が頭より高く上つた時、施術者は更に「君の手は既う動かぬ木の様に堅く成つた」と暗示を與へた。手は其の通り堅く宙にふり上げられた儘動かぬ、施術者はその堅くなつた手を、力まかせに曲げ様としたけれども、實際木の様に動かうとも折れやうともしなかつた。「君の手は既うやはらかに成つた、平常の通り自由になつた、君の手は段々下へ下る」と暗示した、手はその通りになつた。施術者は更に催眠者の手を肩と平行する高さを持ち上げて「君の手は非常に廻る、車の如くよく廻る」と暗示を與へた、催眠者の手はその暗示の通り、大きな圓を描いて車ブルの上から取り上げて「此の手は今君のものでない、君の手でないから針を刺されても痛みを感じない、血も決して出ぬ」と暗示して、三寸ばかりの針を電燈の

光にキラリとかざして、催眠者の腕へズブリと突き刺しズブリと肉深く押し入れた。氣の弱い婦人達は「アラッ」と思はず顔を背けたが、催眠者は少しも感ぜずに、矢張り天使の様に眠つて居た。突き抜けた針の先がポツチリと見える位まで突き刺されても血は少しも出なかつた。施術者は徐にその針を抜き取つて、局部を強く五六回ばかり摩擦した。

(三) 重き者軽くなり、軽き者重くなる

次に施術者は催眠者の手を肩の高さに留まらせて、其の掌に一枚の半紙を載せ、之は非常に重い持ち耐へることが出来ず、手は自然に下へ下る」と暗示した、催眠者の手は其の通り下つた。施術者は掌から其の半紙を除いて、タガヤサンの硯箱を乗せた、そして「之は非常に軽いものである、君の手は自然に上へ上る」と暗示した、催眠者の掌は其の通り段々上へ上つた。「之れは錯覺の實驗です、既う時間も参りましたから覺醒させます」と施術者は會衆に説明して、更に催眠者に向つて「君は非常によく眠つて居る、今僕が一二三と云ふと覺醒する、君は覺醒の後に於いて

も非常に精神が爽快である、非常に頭が軽く気分が愉快である』と幾度も暗示して三十秒置位に一二三と云つた。催眠者は三と云ふ聲を聞くと非常によく熟睡した人が自然に眼を醒ました様に、愉快げにバツチリと眼を開いた。すると術者と被術者とは實驗室を退けり。

(四) 棒寄の術

次には敏捷さうな十二三の少年と色白い青年が現はれて、覺醒時の精神感應術をやつた。何等の催眠法をも施さず普通の精神状態にある者に信念を以て自己の精神を感應させる一種の幻術の様なものである。

先づ少年を直立させて、左右の手に六尺ばかりの球竿を二本持たせ、手を己れの兩側へ垂れて球竿と球竿の間を一尺ばかり離して持たせ直立させた。色の白い青年は其の少年の正面四五尺ばかりの所に立つて『君はしかと其の棒を持つて、私に其の棒の尖を寄せられない様にする。君が如何に其の棒を寄せまいとしても私が信念で寄せる、私の此處を見詰めて居なさい』と自分の眼と眼との間を指し

て要意をさせてから青年は渾身の力を罩めて兩手を胸の上に合掌する様にして『そうら寄つて来た、そうら寄つて来た』と云つた、少年は何も棒にさわるものがないのに、力を罩めて其の棒を寄せまいとしても遂に青年の云ふ通り、ビタリと棒の尖端を寄せられて仕舞つた。同じ事を幾度もして見せた。

(五) 即時即感の妙法

今度は少年の手を丸テェブルの上に突かせ『其の手は如何に机から離さうとしても決して離れない』と青年は云つた。少年は悶躁いて其手を離さうとしたけれども、とても離すことが出来ない。青年は更に會衆に向つて『誰か此手をテェブルから離して御覽なさい』と云ふと會衆の中から二三人の人が出て少年の手を引張つたけれども、到底離すことが出来なかつた色の白い青年が『既う離れる』と云ふと、少年の手は何事もなく自由になつた。此實驗中色の白い青年は渾身に力を罩めて念力を凝して居たので、電燈に映ずる彼の顔は始めよりは赤く充血して居る様に見えた。

(六) 催眠者左手で字を上手に書く

次には再び五分刈頭が施術者となつて北君が被術者として實驗場に現はれた。そして一分時間ばかりの間に催眠させられて、左手を以て「龍虎」「催眠」と云ふ字を二枚書いた。北君は左手にて字を習ふたことがないに此「龍虎」「催眠」と云ふ字は、中々よく出来た。施術者の五分刈頭は北君に「君は僕が一二三と云ひ終ると君は覺醒するが、覺醒するや否や僕の肩に手を掛けて、僕を實驗椅子へ倒して直ぐに催眠させる。然し可成早く覺醒させる」と殘續暗示を與へて覺醒させた。

(七) 催眠者化物の状態を呈せり

覺醒した北君は矢庭に五分刈頭の肩を押付けて之を實驗椅子へ押し倒し、人指と母指を伸ばし五分刈頭の仰向けにした眼の上へふりかひるや、否や物をも云はず「ジリ」と眼に近附けて「エイッ」と大きな聲で叫ぶと五分刈頭はガクリと頭

を垂れて深い催眠状態に陥つた。北君はガクリと垂れた五分刈頭を真直ぐに直して、一寸實驗椅子を離れて「一」と云ふと五分刈頭は鼻の様に眼を大きく開き「二」と聲を掛けるとニョキニョキと赤い舌が抜け出て「三」と浴せると裂けるかと危まれる程大きく口を開いた、會衆は一時にドツと吹き出した。婦人連の如きは聲を立て腹を抱へて笑つた。だつて其の筈だ、大きく開いた眼はニョロリと白眼をむき出し、腹の中まで開き通して御座ると云はぬばかりに口を大きく開いて、化物の様に赤い舌をいやと云ふ程出して悶躁いて居るぢやないか。満座を笑倒させた北君は、殘續暗示の通り三分間ばかりで此の滑稽な催眠者を覺醒させ實驗場を退く。

(八) 催眠者看客の骨相を観て身上を當てる

次に一壯年現はれ自己催眠に依つて骨相學者に人格を變換し、會衆の求めに應じ二人ばかり過去現在未來の運命を占つたがよく適中して黒人も驚嘆するばかりなりし。

之が終ると愈々精神研究會の會長にして、心理學の蘊奥を極め、科學界の未だ足跡を印する能はざる、幽幻不可思議の秘密界に入る秘鑰を握れりと稱讃さるゝ古屋鐵石氏が、黒羽二重五つ紋の羽織にセルの袴をうがつて、艶々しく前額から顛頂まで禿げた頭と肥え太つた體軀を實驗場に現はした。

(九) 笑ふて催眠に反抗する者を咳嗽で深

く催眠せしめ口笛で覺醒せしめたり

鐵石氏は先づ一寸講演をなし後で直ちに實驗臺の傍に立つた。實驗臺には一書生が腰をおろせり。鐵石氏が實驗臺に近寄つて「チア此から催眠させる」と手を其の頭上へ翳すと、書生は今迄嗜み堪えた笑がとう／＼耐えられずアツと吹き出して獨り「アツハツハツハー」と聲を上げて笑つた。鐵石氏は眞面目になつて幾度も其の頭上へ手を翳したが、彼は益々こみ上げてくる可笑しさを抑へる事が出来ずに聲高く笑つた。

「これぢやどうもならんぢや、咳嗽催眠法に依つて催眠させるより外仕方がない」

と云つて、三間ばかり後へ退いて笑ひ顔れて居る被術者を睨みながら。「ゴホン、ゴホン」と二度咳嗽すると、今迄聲を立て、笑つて居た被術者が、鐵石氏の未だ咳嗽を終らざる中にビタリと笑が止んだ。又真似た様に「ゴホンゴホン」と咳嗽したかと思ふと、死人の如く頽然とした。「既う非常に深い催眠状態に陥つた」と鐵石氏は言ひつゝ、催眠者の傍へ寄つて更に「深く催眠すれば催眠する程催眠者は正規の人の如き外見を現します」と云つた。

(十) 催眠者大臣に變換して演説をする

鐵石氏は此催眠者に長時間の暗示を與へて、様々な實驗をし會衆に非常な興味を感じしめた。表情變化の暗示を與へては、分時の間に西歐の名優に見るが如き極端なる喜怒哀樂の情を表はし、人格變換の暗示を與へて、或は一口狂言師として新舊兩派の種々なる狂言を演ぜしめ、藝者として端唄を唄ひ、月琴を弾き、音樂につれて躍り、然かも其の態度音聲に至るまで如何にも女らしく、藝者らしく、或は高峰筑風として琵琶歌を唄ひ、呂昇としては義太夫を語れり、其の節廻し音聲まで高峰筑風

(二) 催眠者の知らぬ者に人格が變換せり

此の不思議な實驗と研究とは如何なる程度まで進められて居るのであらうか、第一に起る疑問は如何にして人格を變換し得るやと云ふのだが、同じ人格變換でも催眠者が嘗て見聞したる事有る者に變換する場合は、藝者とは如何なる者、犬は斯く有る可き者と云ふ事を知悉して居るので、術者の暗示に依つて自己がそれに成り濟まし、所謂潜在精神が活躍するのである、けれども催眠者が正規の状態に有る時、未だ嘗つて見た事も聞いた事も無い、所謂些の潜在精神をも有せざる者に變換し得るやと云ふに、精神研究會の實驗に依れば、術者も催眠者も知らぬ處の立會人たる第三者の指定せる人に變換させた事があつた、立會人は己の知人なる『望月梅太郎』にして呉れと注文したので、術者は直に『君は望月梅太郎である』と暗示したるに、催眠者は右手と左手と兩方共不隨になつて兩手をダラリと下げて不具な人となり、『兩手が不隨で困る』と云つた、立會人は之を見て非常に感心し、私の知つて居る望月梅太郎は兩手が利きませんと言つたさうである、又或時スプリ

(三) 催眠者を東京市に變換せる現象

ングの何なるかを覺醒時に於いては知らぬ催眠者に對して『君はスプリングである』と暗示した所、螺旋のバネの如き形となつた由である、其他幾多の相似たる實驗に依つて此の不思議なる變換は催眠者に千里眼的現象加はりて、暗示せられし物を知る故であらうと推斷されて居る。

然らば催眠者は身體にて形容する能はざる者に變換し得るであらうか、例へば術者が催眠者に向つて『君は東京市である』と暗示した場合はどうであらう。現在の實驗狀況に依れば東京市であると暗示された催眠者は多くの場合唯モジモジして居るのみで、何等の形容をもしなかつた由であるが、唯一回或夜の實驗に催眠者は立派に東京市に成り濟し、頻りに腰の邊を撫で廻し、『熱い〜』と連呼したので、『どうしてそんなに熱いか』と尋ねたら、『今牛込が火事で盛んに燃えて居る』と答へたので立合つて居た牛込の人は驚いて、取るものも取敢ず歸宅すると果して牛込に火事があつて而も其の實驗中の時間と符節を合せた如く時間

が一致して居たので驚いた由である。

(四) 催眠者を鳶に變換せる現象

又或時「君は鳶である、今空中を舞つて居る所だ」と暗示した時、催眠者は兩手を擴げて立ち空中を舞ひつゝ、下界を眺むる姿勢をしたので、「君は鳶で空中を舞つて居ながら足が地に着いて居る道理が無い、早く足を地上より離して充分に飛び廻る」と暗示したけれども彼の足は疊を離れなかつた、之等は尙ほ研究の餘地が充分有るであらうと思ふ、さらば一旦變換した人格をもとの人格に戻さずして其の儘更に他の人格に變換なし得るか、之れも幾多の實驗に依つて「君は犬である」と暗示し催眠者が犬になつて吠えたり狂つたりして居るのを、其の儘元の本人に戻らせずに「君は今度は狐になつた」と言へば直に狐になる由である、記者も又之を實際に目撃したのであつた。

(五) 催眠者を家康と新聞賣に變換せし現象

又或時の實驗に一人の書生を徳川家康に變換せしめ置き、實驗を見物に來りし傍の人が「公にはお茶を召上り候へ」と恭しく湯を捧げると催眠者は其の湯を飲み且つ關ヶ原合戦の模様など様々に其の見物人と物語つた、而し不思議な事には立會人が家康に關係無き事や家康以外の人に對して囁す事は家康の耳には一切入らざるのみならず「君は家康にあらずして催眠者也」と見物人が言つても少しも知らぬ風をなせり、又或時新聞賣に變換された催眠者が「新聞は一錢々々」と客を呼ぶので、立會人が「新聞屋さん新聞を一枚賣つて呉れ」と言ふと「何新聞を」と尋ね望まれた通りの新聞のつもりで幻覺の新聞紙を渡し「そら十錢でお釣り」と言はれて幻覺の十錢銀貨を受け取り懐から財布を出し之を投げ入れ更に幻覺の釣錢を「これが五錢でこちらが四錢」と言つて其の立會人に渡した、所が此の場合見物人の一人が「君は新聞賣では無い書生ではないか」と暗示を與へたが知らぬ風をして居た、此の實驗に依れば催眠者は術者以外の第三者と催眠中に於ても談話すれども、變換したる其の人格に關係せる範圍内のみに於て對話するを得而して又第三者がする其他の暗示は催眠者に何等の影響をも與へぬ

のである。

(六) 變換せる第一人格と第二人格とは共に
半巾を雀と錯覺す

又或時日本人を支那人に變換せしめ、又其れを獨逸人に變換させて『之は雀である』と言つて半巾を丸めて與へた、獨逸人は其の半巾を雀であると錯覺した、而して其の獨逸人を元の支那人の人格に戻らしめて今度は其の支那人に向つて前に示した圓めた半巾を與へて『之は何』と尋ねると『雀』と言下に答へた事がある、此の實驗に依れば第一人格と第二人格とは全く主觀的の記憶を別にして居りながら、客觀的の記憶のみは互に相影響する奇妙な現象を呈して居た。

(七) 催眠者の作りし詩

來會者の内から『催眠術實驗會と云ふ題で催眠者に狂詩を作らして』と言ひ出た者が有つたので術者が催眠者を詩人に變換し其通り暗示すると。

と何の苦もなくスラ〜と書き了つた、此の現象に就いて最も注意すべきは催眠者は正規の状態に有るときは發句も都々逸も作れず、況して漢詩など讀む事さへ出来ぬのに而も催眠状態となつて暗示を與へられると、不思議にも一分間に七言絶句を記すといふ恐ろしい迅速な事もやつた、即ち題を出すや否や真に自働的に手の動くまゝ、スラ〜と記して了ふのだ相だ。

(八) プランセットの文藝

而して催眠状態に有つて此の現象を現はす者に對しては正規の状態にある時プランセットにて詩歌、俳句を自在に作らせる事が出来る由にて、左の二三はプランセットを能くする某氏が人格を變換して作りたる者の一端だと言ふ事である。

催眠術

雨の降る夜はいとよなほ物凄さまで皆淋し、軒端に傳ふるあまだれの、ひびきは

つかうとくと、ゆめ路を誘ふまがつみと、我に應ふるくらき世や、花恥ぢらはんや
さすがた、他處ともなく我前に、立ちしは奇しき事ながら、さまで思はぬ訝しさ、幾久
しかる線言を述べつうらみつ其果は、互に心打とけて、話せばあやにく窓の上に、か
かる時計のその音に、破られけりな我が夢を、ゆめかいないな彼君が、残しおきたる
花の香は、今も尙身に香ほるなり、これぞ正しく傳心の、妙あらはせし彼の人の、魂め
ぐり今こゝに、來りしものと知るしぞや、奇しき心のはたらきぞ。

春 雨

若人のほてりさますや春の雨

雨の日唐崎を忍ぶ

みどりみて故郷おもふ雨のそら

第七章 催眠者ヴァイオリンを弾き浪花節を語る

(大正二年三月十日發行「やまと新聞」の抄録)

(一) 笑ふて反抗せる者を一聲の掛聲で催眠せしめたり

芝區琴平町精神研究會で九日午後六時から催眠術實驗會を開いた、集まつた會員は約百餘名で定刻となるや同會長古屋鐵石氏は先づ被術者を椅子に掛けさせる、被術者は頻と笑つて居た、此時古屋氏は數間離れて「エイッ」と大喝したら被術者はガツリと首を垂れて深い催眠状態に陥つた、次で古屋氏は椅子を二脚据ゑて其上に被術者を棒の様に硬直にして横へたり、一二三の掛聲で笑はせる怒らせる、種々と人格の變換を試みた後、「君は音楽家である」と暗示すると被術者は「バイオリンを弾じ乍ら『螢の光』『此處は御國を何百里』」など云ふ唱歌やサノサ節、浪花節等あらゆる事をやつて、最後に白目玉をひき出しペロを出す兩手を藻掻いて騒ぎ廻つたには會員一同臍を燃つて笑つた、これが濟んでから會員諸氏の種々面白い實驗が澤山あつて散會したのは九時過ぎであつた。

第八章 催眠者易者となり人の身上をよく當てる

（大正二年三月十日發行、國民新聞の抄録）

（一）催眠者雲入道と變換し浪花節を語る

九日午後六時より芝區琴平町の同會樓上にて催眠術實驗を爲す、始め古屋會長人格變換の術を爲せば、被術者は音樂家となりて、催眠中にヴァイオリンを奏しつゝ、命ぜらるゝ儘に歌ひ、最後に雲入道になつて浪花節を唸る、次に被術者は易者となり五人を占ひて悉く適中し、續いて會員數名の實驗あり九時過ぎ散會せり。

第九章 思念を感通せし不思議の現象

（大正二年四月十五日發行、海國日報抄録）

（一）厭世家を樂天家となし得る根據

十三日の夜七時より芝區琴平町精神研究會にて古屋鐵石氏主宰の下に種々興味ある催眠術實驗を催した、最初に行ひしは思念感通の實驗にて、術者被術者に向つて數字及び假名を來會者に指定せしめ、被術者に當てしむる法にて三回とも適中した、次は人格變換の實驗にて、被術者を催眠せしめ山本權兵衛に變換して演說せ

しめ、或は呂昇に轉換して淨瑠璃を語らしめ、或は巴里の美人に轉換して音樂にづれ舞踏せしむる等、それ〴〵特殊の態度調子を奇妙に現はせり、氏の説明によれば誰人にも此人格變換を行ふときは未だ會て知らざる技藝を演じ詩歌を作り經文を誦む等實際不思議なりと云ふ。斯の作用によりて不愉快の性格を愉快に、怒り易き性格を溫和に、陰鬱の性格を快活に變じ、乃至は愚鈍なる性質を伶俐ならしむる事を得、之皆根據ある心理學上の活用に基くものなり云々、厭世自殺でもしたがる者には人格變換至極妙であらう、平素治療も盛んに行つて居る。

第十章 催眠者總理大臣とオペラダンスに變換せり

（大正二年四月十四日發行、やまと新聞抄録）

（一）讀心術の實驗美事に適中せり

芝區琴平町精神研究會では十三日午後七時から催眠術實驗會を開催した、先づ會員の讀心術がつた、白紙に字を書いて秘し置き、何と云ふ字かと訊ねたら數回美事

に的中した、次で棒寄術があつて最後に研究會長古屋鐵石氏の實驗が始る、先づ被術者を催眠させて置き、人格を變換させて山本總理大臣とならせ、更に薩摩琵琶師に變換させた、被術者は月琴を琵琶に代へて弾じ乍ら「月に叢雲花に風」と鏘のある咽喉を聴かせた、それから義太夫呂昇に人格を變へると今度は道に女である、襟をつくろつて三味線代用月琴を弾き、夕顔棚の此方よりと唸り出し、一句一句毎に百面相をやつたので、一同はお臍に茶を沸かし、次でオペラダンス幼稚園の小兒等に變換して種々の實驗を試みた上、散會したのは十時頃であつた。

第十一章 催眠者琵琶歌を唄ひ義太夫を語る

(大正二年四月十四日發行「東京朝日新聞抄録」)

(一) 催眠者總理大臣に變換し演説をなす

心理學者古屋鐵石氏の主宰せる芝琴平町の精神研究會では十三日の夜催眠術の實驗會を催した、最初二三の簡單な實驗があつて後面白い實驗に移つた、施術者たる古屋氏が被術者たる一青年に造作も無く催眠術を施し薩摩琵琶をさせると善

い聲で、石重丸を一席吟じ、次に義太夫をやらせると、太閤記十段目を唸る、更に山本首相たるべき暗示を與へると急に嚴然たる態度で卓を叩きつゝ、「前桂内閣も不幸命運短くして我等の連中が其後を襲ひました云々と大氣焰を吐いた。

第十二章 催眠術にて溺死體の所在を知る

(大正二年五月十日發行「中央新聞朝刊と夕刊抄録」)

(一) 行衛不明の溺死體發見者に百圓の懸賞をなしたり

(編者曰く大正二年五月六日東京本郷區湯島尋常小學校生徒が千葉縣鴻の臺に遠足會を催し、其歸途江戸川の渡場栗市を渡らんとして生徒教員附添人等三十餘名乗れる渡船中流にて顛覆し、乗者悉く水中に陥り行方不明者三名を出したり、其行方不明の三名を如何に搜索するも上らず、一名を上げたる者には百圓の懸賞をなしたるも死體は見當らず。茲に於て中央新聞記者、精神研究會に來り、催眠術の千里眼によりて其死體の所在を知る方なきや、と依て中央新聞記者及

此本會の研究數名立會の上實驗をなしたり其顛末は同年五月十日の朝刊と夕刊の中央新聞に掲げあり左に之を抄録せむ。

(二) 神に變換せる催眠者死體の所在を語る

溺死體の搜索に付て渾身の努力徒に水泡に歸して猶未だ三兒が帶の端だにも發見する事能はず其骨肉の心事に同情して態々湯島小學校を訪ね、易者千里眼等を紹介する者日に幾人を數ふるに到る記者亦精神研究會長古屋鐵石氏を訪ねて催眠術應用人格變換に依つて死體の所在箇所を知る法無きやと圖りたるに、折柄集まり居たる會員諸君は、太く不幸なる三兒に同情し即座に快諾して其の實驗に取懸りたり。

抑も人格變換と云ふは進歩せる現今の催眠術にて屢々實驗せられ其の最も不思議なるは全く未知未見の事を語る人にも轉換し得其現象は學理を以て未だ充分に説明し能はずと雖も實際の示す所は既に疑ふ餘地無きに至れり。

古屋氏は一書生を催眠せしめ之を神様に變換して恭しく拜跪し、死體の所在を伺

ひしに神様は暫く默想の後「二つの死體は鐘ヶ淵より五丁の川下に有り、下流に向つて少しく右手に當り死體と死體との間は約一丁半を隔つ、而して他の一つの死體は渡船の轉覆せる箇所より約十八町の下流にて左岸に有り、前者の河岸には何等目標となる可き物無けれども、後者の河岸には日に焼け雨に晒されたる古き木柵有り」と。

(編者曰く以上は、中央新聞朝刊に記載されたる處にして其夕刊に次の記事ありたり。)

(三) 催眠者の語りし處に果して溺死體ありたり

鴻の臺下鐘ヶ淵に可憐なる三少年が果敢無くも水魔の襲ふ所となりてより爰に五日間、人事を盡しての大搜索に苦心せる其甲斐ありて、其中の一人なる湯島小學校五年生同區三組町嶽野金平四男勝吉十三の死體は十日午前八時五十五分現場を距る約五丁の下流、市川橋の上流五丁通稱根本河岸に於て發見されたり。扱ても此の死體を發見して父兄及び關係者より感謝の言葉を浴せかけられたるは、市

川町真間字水室船頭中山清七(五十五)と呼ぶ者にて前記根本河岸を棹を以て波除の石下を探したるに棹の先に柔かきもの觸れたるより大に勇み立ち直ちに竿の先に曲折せる鰻釣を結び付け再び水中に差し込み遂に引揚げたり。さるにても我社に於ては死體の發見遅々として渉らざるより古屋鐵石氏に鑑定を請ひたるに偶然にも其指定の寸分違はざりしより人皆其適中に驚きたり。

(四) 透視悉く適中す

(編者曰く大正二年五月十三日發行の「萬朝報」に次の記事見えたり)
市川町三〇八六船頭兼大工業秋元虎吉(四十八)昨十二日午前八時頃己が小廻船に乗りて郵便局裏手より出かけ、江戸川鐵橋の左の口、第三橋臺より上流數間の處を搜索せしに、何物か竿に觸りしものあり、三本の釣を垂れて水底を搜るに、物あり之にかけ徐々引上げて水面にあらはるゝを見れば果して小兒の屍體なり「見付かりました」と大聲に叫ぶを聞きつけ、福田校長等船を飛ばして來り、見れば正しく藤本求義(十二)の屍體なり、次で來りし求義の父鎌太郎は、我子の屍體を一目見るよ

り、悲喜交々至りて暫くは涙も出でざりき。

(編者曰く此屍體の上りし場所は渡船の顛覆せし處より大凡十八丁の下にして催眠術による透視は適中せり、而して後殘れる一名の溺死體は容易に發見せられざりしが、其後六月十九日遭難場所を去る下流一里半の箇所たる行徳と云ふ處を死體が流れて下るのを其處に居合したる船頭が見附けて引き上げたり、思ふに本會にて透視を行ひしときは其明示せし場所に在りし者が、時經て其處に流れ出で人眼に觸れて引き揚げられし者ならん。)

第十三章 催眠者藝妓萬龍女優森律子に變

換す

(大正二年六月十日發行「海國日報」抄録)

(一) 覺醒者に突然暗示し自在に感應せしむ

一昨八日の夜芝區琴平町精神研究會にて催眠術實驗會を催したり、先づ一會員が一羽の鶏を催眠せしめたるに今迄騒ぎ狂へる鶏は仰臥の儘少しも驚かず、覺醒と

同時に元の状態に復したり、之に依つて催眠術は人間に限らず他の動物にも總て感應するものなりと説明し。次に古屋氏は一書生を催眠せしめ、人格變換を行ひ、鶏犬音楽家に變換せしめ、次に藝妓萬龍に變換し又女優森律子に變換せしめ、それぞれ各別の動作言語を爲して、來會者を賑はしたり、同時に氏は説明して此人格變換を應用して治療すると治療上に大效あるべき原理を丁寧に解説せり、終りに覺醒者に突然暗示し暗示に抵抗し能はざる實驗を爲したるが何れも成功し來會者は満足を得たるもの、如し。

第十四章 催眠者雞犬に變換し不思議の現象を呈す

(大正二年六月九日、やまと新聞抄録)

(一) 來會者中の患者に治療せり

芝區琴平町三の精神研究會では八日午後七時から催眠術實驗會を開いた會する者二百餘名、鶏の催眠、小兒の硬直状態等の實驗に次で、會長古屋鐵石氏は一名の患

者を呼出し簡單なる施療實驗を示した後、更に別の被術者に對し拍手一聲、深き催眠状態に陥れて鶏犬、樂隊、藝妓等に人格を變換させ最後に女優森律子に變換させた、被術者はお化粧をして演壇に立ち演説をした、之が了つてから會員間の種々な實驗があつて散會したのは十時頃だつた。

第十五章 ヒステリーには可驚大效あり

(大正二年六月一日發行雜誌「日本之婦人」抄録)

(一) ヒステリー治療の顛末

ヒステリーは往々上中流の家庭の奥様や令嬢方に多い、此病に罹つた人の多くは肉體上の勞働は爲さずとも精神上の苦勞は甚だしいので、一度ヒステリーに罹ると容易に治らず、其治療法として種々あるも、確かに效驗があると云ふ法はまだ聞かぬ、此頃芝區琴平町精神研究會にては盛んに催眠術治療を行つて居ると聞き、好奇心に驅られて實狀を探訪に行きしが頗る参考となるべき點も尠くないと思ひ、其一端を紹介して讀者の批評を乞ふ事とした。

治療室は十五疊敷位の大廣間で、正面の床の間に普賢菩薩の佛畫が掛けられて居る。數個の寢臺と椅子は設けられて今や古屋鐵石氏及同夫人は年齢二十八九歳の婦人の手術にかゝらんとしてつゝある。古屋氏は恰も辯護士服の様な黒衣を着た四十二三歳の肥満の大男、而も顔面には一種の磁力ありさうな相好である。聽て古屋氏の症狀質問に對して患者は次の如く答へた。

(一) ヒステリーの病狀

- 一、一番困るのが些細の事を忘れ様と思ふても何うしても忘られず、覺えて居やうと思ふ事を忘れて了ふ。
- 一、父母親戚知己、夫が一つとして自分の爲にならぬ様思はれて心細い事限りない。何をしても愉快と思はず無意義な不平が絶えぬ、少しの事に腹がたつたり涙が出たりする。
- 一、猜疑心が非常に強い、自分乍ら愛憎が盡きる程である、又人並以上に嫉妬心が強くて狂氣の様になる。

- 一、父母や夫に心配をかけるのを何とも思はぬ。
 - 一、手足が痺れ、夜よく眠られず夢ばかり見て居る。
- 以上の様な缺陷がある爲め圓滿に家を納めて行く事が出来兼ねます、何うか此等の悪癖を悉く治して人並の女になりたいと思ひます、御治療で治りまうか。
- 古屋氏は此質問に對して、確かに治ります、一度治療を御受けになりますと全く生れ變つた様に愉快な人となられますと明瞭に答へ尙種々症狀を問答した後寢臺へ臥させ莊嚴の療法を行へり。(此間僅か三十分間許り)すると患者はフト眼を開いて起き上り。
- 手足の麻痺は悉く除れて軽々と自由に動く様になり、肉體も氣分も爽快になつて全く生れ變つた様に思はれ、心持は清々して這んな愉快な事は生れて初めてですと云ふた。尙記者は催眠術が治療に效ある所以の實驗を希望したら、古屋氏は快諾して次の如き實驗を示された。

(三) 催眠術が治療矯癖に效ある根據

古屋氏は一女學生を催眠させて、口中に一ぱい唾液が出た」と暗示するや、直に唾液が流れて多量に痰壺へ吐いた、又兩眼に眼脂が出た」と暗示すると忽ち眼脂が出たことも一寸不思議である。

四二

(四) 乳少なの婦人を乳澤山にすることを得る所以

此現象に對して古屋氏は云ふに、乳の出ない婦人を乳澤山とし、胃液の少い患者に胃液を多からしむることが出来るも此原理である、又小兒の寢小便を止めるのも同様であると云ふた。

次に最も驚きたるは、腕を切つても刺しても血が出ない又少しも痛まぬ」と云ふ暗示を與へて、大きな墨針の如きものを二の腕に刺たが少しも血が出ず、又痛みを知らぬで居つた事である。

次に、口は右に引きつけられて曲ると暗示すると忽ち催眠者の口は右の方へ吊り上り物凄い程である、又、美少女である」と云ふとニコニコ顔となつた。

古屋氏は附説して云ふに、此の理法で人の精神を美にし心身相關の法則により全く容貌迄も變化し得るのである、故に此療法では顔面の調和も整へて醜貌も美貌とする事が確かに出来るのであると説明した。

(五) 不愛嬌者を愛嬌者とすることを得る所以

次に催眠者に向ひ、「一」と云ふと喜び、「二」と云ふと怒り、「三」と云ふと哀しむ」と暗示して、「二」と呼ぶや手を擴げたり摺つたりして笑ひ嬉び、「三」と云ふや一變して凄みを帯び拳を握つて立上り打かゝらんとするかと思ふ途端、「三」と云ふとメソソ泣き出し、涕をハラ／＼落して泣き崩れた。

古屋氏は説明して年中クヨクヨ悲しみ暮す陰氣な性分も愉快な陽氣な性分とすることが出来、短兵急で何時も疍癩玉を破裂さす人間を溫良な性質と變化さすことも出来、ヒステリーの如き缺陷も此理法によりて治癒轉換することが出来るのであると。

四三

(六) 不和の夫婦を和合せしむることを得る所以

尙氏は此外に夫婦間の不和合なども調和することが出来る、又兒童の如き數學の出来ない者や愚鈍に近い者を伶俐な性質と變じ、或は宗教を信ぜざるものは信心家になり、怠惰者が勤勉家になる等全く不思議であります、其不思議の理由は詳しく申上げる暇がありませんが、其れは前の奇異なる現象で證明され得べきものであると説明された。此實驗は醫術藥物の力の及ばぬ方面には大いに効果あると思ふから茲に紹介して置きます。

第十六章 催眠者男三郎の俗謠を唄ふ

(大正二年十一月十一日發行「國民新聞」より抄録)

(一) 美人髻男を自由にす

九日午後七時から芝琴平町精神研究會樓上に催眠術實驗者が公開せられた會する男女合して一百餘名先づ會員の一人が雄鶏のバタ／＼して居るものを捕らへ

て来て椅子の上に置き催眠状態に導いて、鶏に一言半句も出さしめず睡らしてしまつた、其から會員の誰彼が思ひ／＼の實驗をしたが何れも成功した、就中二名の美人が實驗壇上に顯はれて髻男に勝手な暗示を與へて其身體及び思想を自由になし得たのは一入鮮かに群衆を喜ばした、會長古屋鐵石君の得意の人格變換にて義太夫薩摩琵琶或は男三郎の俗謠も甘く行つた。

第十七章 世界無比の奇現象催眠者演説を

なす

(茨城日報第七千四百五十九、六十號より抄録)

(一) 催眠者即問即答に演説をする

西洋にも東洋にも未だ曾て如斯珍らしき實驗ありしを聞かず、催眠者が平常少しも知らざる處の演説でも講談でも浪花節でもチヨボクレでも何でも、今迄に見たことも聞いた事もなき意外の題を出すや、即坐に苦勞徒以上にやる、其現象を東京芝琴平町精神研究會に於て發見せり。

余が實見の様を語らん、即ち術者は被術者を椅子に凭らせて一寸舉手したれば被術者は深く催眠して手に針を刺さるゝも知らぬ様になれり。

(二) 無病長壽の新説

其催眠者に向つて「無病長壽の法と云ふ題で演説をする」と暗示したれば、催眠者は次の如く演説せり。此演説筆記は衆議院速記技手齋藤増吉氏の筆記になりしものにて、催眠術に着手より演説終る迄に十分時間にて成れるものなり、其演説筆記は左の如し。

(三) 催眠者のなせる演説の筆記

催眠者曰く「無病長壽と云ふ題で一場の演説をやれと云ふ、斯う云ふことは諸君も定めし望むところであらう、成程無病長壽、斯んな結構なことはございませぬ、ですから私は無病長壽をする秘訣を皆さんにお授けを致します、暫くの間お聴き下さい。

總て無病で長壽を得やうと思つたならば能く攝生と云ふことに氣を付けて下さい、私が言はぬでも分りきつたことであるが、中々實行は出来ないものである、先づ朝起きた時洗面を致す場合に口中を十分嗽する、其時に齒磨楊子にて荒く口中の奥迄洗ふ人があるが是は宜くない、咽喉は食事の這入る門口であるから其處を痛めてはならない、齒をよく磨かなければならん事は勿論にして、事更にお話する必要はありませぬ、それから食物でございます、或人は甘い物許り食ふ、或人は辛い物許り食ふ、是は消化機に害を及ぼす、又野菜許りに傾いても可かせぬ、肉許りを食つても可けない、常に色々の物を食はなければいけない、それから食後には運動する、それも食つて直ぐ運動しては可けない、少し間を置いて運動するがよい。

それから夜寝る時でございます、此頃はさうでもありませぬが、夏になると寝相が悪くなる、布団も何も脇へやつて仕舞ふ人がある、之が爲に寝冷をする、其れが元で種々の病氣に罹るものあり、それから夜具布団を日光に晒すことも時々する必要がある、すると蚤又は黴菌を驅逐することが出来て宜しい、又室を掃切つて置く、空氣の流通が十分でない、炭酸瓦斯が発生する、ですから十分室を明け放して空氣

の流通を好くするとよい、日光の十分這入る所は明け放して置くともよい、日光は微菌を殺す力がありますから室の戸を閉めることは廢めて日光を透射するやうな方針を取つて貰ひたい。

今度は精神的の衛生を申し上げます、總て病は氣から起ります、足が重いハテ脚氣ぢやないかしら、自分の心で自分で病を求めて居る、それですから病氣の方では一寸お宿を拜借致しますと云ふやうな風にドン／＼這入つて來る、乃公の身體は金城鐵壁病氣などは入るものかと威張つて居れば病氣に罹るものではありませぬ、さう云ふ譯でありますから精神を鞏固にすることは最もよい長壽法であります、それから朝早く起き直に腹式呼吸をやる、して腹を十分に拵へる、さうすると精神的の基礎が出来る、朝早く起きて深呼吸をやる、とオゾンを十分に吸収しますから血液が新になる、衛生法に大關係あるは冷水浴であります、風の神が來たら突き飛ばしてやらうと云ふ考で、井戸端に出てザーザツと浴びる、さうすると風の神は是れで無病長壽を得られる、尙此外に慎む可きは色慾です、此話は委しく申しませぬ

が、先づ以上申しましたことを實行すれば無病長壽は完全に出來ると思ひます。』

第十八章 神經衰弱は屹度全治する

〔讀友日日新聞「第三千四百七十、七十一、二號より抄録」〕

(一) 驚くべき一大發見

神經衰弱は一名文明病と稱す、世が益々文明に進むに従ひ世事は益々複雑となりて種々の事情に餘儀なくせられて精神及び肉體を過勞するが爲め、終に神經衰弱に罹りし者夥し、加ふるに一度神經衰弱に罹ると容易に恢復せず、依之神經衰弱の治療法として種々の方法各所に現はる、然し實際に的確なる效果あるものなし。然るに先般東京市芝區琴平町精神研究會長古屋鐵石氏が多年間催眠術研究の結果驚くべき一大發見をなせり、即ち毫も藥物を用ゐずして哲學上の一元二面論と心理學上の觀念聯合論とを應用したる催眠術治療にて、重き神經衰弱を治したること數千名、其の治療の效果眞に神の如くなりとの評判高し、一日其眞偽を確めんが爲めに精神研究會を尋ねて其治療法を實見せり、左に其要を記さん。